令和３年度若年層に対する性暴力の予防啓発相談事業

若年層の性暴力被害の実態に関する
オンラインアンケート及びヒアリング結果

報告書

令和４年３月

株式会社 リベルタス・コンサルティング

― 目 次 ―

第１章　事業実施要領 1
１－１．目的 1
１－２．定義 2
１－３．実施項目・内容 2

第２章　若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート 6
２－１．オンラインアンケートの実施状況 6
２－２．オンラインアンケートの結果と分析 9

第３章　若年層の性暴力被害の実態に関するヒアリング 75
３－１．ヒアリングの実施状況 75
３－２．若年層の性暴力被害の状況（ﾜﾝｽﾄｯﾌﾟ支援ｾﾝﾀｰへのﾋｱﾘﾝｸﾞより） 77
３－３．性暴力被害及び対象者別の状況（支援団体等へのヒアリングより） 85
３－４．若年層の性暴力被害への対応課題及び行政・関係者に求めること 95

第４章　まとめ 98
４－１．若年層性暴力被害の実態に関する考察と今後の政策課題 98
４－２．最後に 103

参考資料　アンケート質問票 104

第１章　事業実施要領

１－１．目的

政府では、「第 5 次男女共同参画基本計画」（令和 2 年 12 月 25 日閣議決定）において、若年層を対象とした性暴力被害に関し、実態把握や取締等の強化、教育・啓発の強化、相談体制の充実、保護・自立支援の取組強化等の施策を総合的に推進することとしている。また、「性犯罪・性暴力対策の強化の方針」（令和 2 年 6 月 11 日性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議決定）において、教育・啓発活動を通じた社会の意識改革と暴力予防を行い、大学生を含む若年層の性暴力被害の実態把握を実施することとしている。

令和 2 年 3 月に発表した「性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターを対象とした支援状況等調査」によると、ワンストップ支援センターの面談を利用した年齢は「20 歳台」が 31.3%と最も多く、次いで「中学卒業以上 19 歳以下」 が 22.3%で全体の 5 割を超えている。さらに AV 出演強要、JK ビジネス、レイプドラッグ、SNS を利用した性被害、セクシュアルハラスメント、痴漢等、性犯罪・性暴力の手口が巧妙化しており、その予防と被害にあった際の支援が不可欠である。

これらを踏まえ、関係者が様々な若年層への適切な対応や支援を行えるよう、若年層の性暴力に対する認識をはじめ、若年層の性暴力被害の実態及び若年層の被害者支援における課題について把握することが必要である。 そこで、若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート及びヒアリングを実施し、有識者による検討会において被害実態の分析を行う。

１－２．定義

本オンラインアンケート及びヒアリングでは、「若年層」及び「性暴力」を下記のように定義した。

◆若年層：16～24 歳の方

◆性暴力：望まない性的な言動（下記の分類を設けた）

図表　1-1　性暴力被害の分類と例示

分類	例示
言葉による性暴力	言葉で性的な嫌がらせを受けた、体の特徴についてからかわれた、いやらしいことを言われた　等
視覚による性暴力	相手の裸や性器を見せられた　等
身体接触を伴う性暴力	体を触られた、抱きつかれた、キスをされた、相手の体を触らせられた、服を脱がされた・脱がせられた、性器を押し付けられた、体液をかけられた　等
性交を伴う性暴力	相手の身体の一部や異物を無理やり膣や口、肛門に挿入された、避妊なしに性交させられた　等
情報ツールを用いた性暴力	インターネット・携帯電話・スマホなどで性的に嫌な経験をした、見たくない画像や動画を見させられた、下着や裸を撮影された、下着姿や裸の写真を送るよう強要された、なりすました相手から性的な嫌がらせを受けた　等

１－３．実施項目･内容

上記の背景・目的にあわせて、下記の事業を実施した。

１）「若年層の性暴力被害の実態」に係る有識者検討会の実施

オンラインアンケート及びヒアリングの実施方法、取りまとめ等について、専門的見地から助言をいただくため、有識者検討会（以下、「検討会」という。）を実施した。

検討会委員には、若年層の性暴力被害の実態・支援等に知見のある有識者 4 名を選定し、計 3 回の検討会を以下の要領で実施した。

図表　1-2　検討会委員（五十音順）

区分	氏名	所属・役職
座長	山本 恒雄　氏	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 愛育研究所 客員研究員
委　員	浦　尚子　氏	公益社団法人福岡犯罪被害者支援センター 理事長
	河野 美江　氏	島根大学 保健管理センター 教授
	齋藤　梓　氏	目白大学 心理学部心理カウンセリング学科 専任講師

図表　1-3　検討会実施内容

検討会	実施年月日	主な議事
第 1 回	2021 年 11 月 19 日（金） 19：00～21：00	・ 調査概要の確認 ・ アンケートに関する検討 　－目的・実施要領 　－調査項目 ・ ヒアリングに関する検討 　－目的・実施要領 　－対象候補 　－調査項目
第 2 回	2022 年 2 月 21 日（月） 19：30～21：30	・ アンケート結果に関する検討 　－速報報告 　－取りまとめについての検討 ・ ヒアリング結果に関する検討 　－進捗報告 　－取りまとめについての検討
第 3 回	2022 年 3 月下旬	・ 報告書（案）の内容精査

※第 1、2 回はオンライン開催、第 3 回はメール開催。

２）若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート

性暴力被害を受けた若年層の方の状況を把握し、施策を検討することを目的に、若年層の性暴力の被害実態に関するオンラインアンケートを実施した。アンケート実施要領は下表のとおり。

図表　1-4　若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート実施要領

<table>
<tr><th>項目</th><th>概要</th></tr>
<tr><td>対象</td><td>全国の 16～24 歳の方</td></tr>
<tr><td>実施
方法 1</td><td>オンラインアンケート
（(株)クロスマーケティング社「ネットリサーチ」の登録モニターに対するアンケート）</td></tr>
<tr><td>実施
方法 2</td><td>・ スクリーニング調査（有効回答数 8,941 人）
性暴力被害にあった経験のある方の抽出、及び性暴力被害遭遇率の推計を目的に実施。
・ 本調査（有効回答数 2,040 人）
スクリーニング調査で抽出された性暴力被害経験者に対し、性暴力被害実態を把握することを目的に実施。</td></tr>
<tr><td>配信
方法</td><td>①1 次配信：性別・年齢別の人口分布を考慮して配信（被害遭遇率の算出を目的とする）
②2 次配信：回収数を高めることを目的に追加配信
<table>
<tr><th>性別・年齢</th><th>1 次配信</th><th>2 次配信</th><th>計</th></tr>
<tr><td>女性 16 歳～19 歳</td><td>47,009 (21.3%)</td><td>35,114 (32.7%)</td><td>82,123 (25.0%)</td></tr>
<tr><td>女性 20 歳～24 歳</td><td>63,134 (28.6%)</td><td>63,134 (58.8%)</td><td>126,268 (38.4%)</td></tr>
<tr><td>男性 16 歳～19 歳</td><td>43,431 (19.7%)</td><td>412 (0.4%)</td><td>43,843 (13.3%)</td></tr>
<tr><td>男性 20 歳～24 歳</td><td>67,448 (30.5%)</td><td>8,781 (8.2%)</td><td>76,229 (23.2%)</td></tr>
<tr><td>計</td><td>221,022 (100.0%)</td><td>107,441 (100.0%)</td><td>328,463 (100.0%)</td></tr>
</table>
※若年層のモニター数は限定的（特に 16～19 歳の男性）であるため、上記の 2 段階配信方式（人口動態に応じた配信と回収数確保を目的とした配信の組み合わせ）を採用した。</td></tr>
<tr><td>調査
項目</td><td>・ スクリーニング調査
➢ 性自認、年齢、所属・職業
➢ 性暴力被害遭遇の有無、最も深刻な被害、最も深刻な被害に最初にあった年齢
➢ ７つの手口への遭遇の有無
・ 本調査
➢ 加害者との関係、加害者の性別、加害者の社会的・職務上の地位等
➢ 性暴力被害にあったときの状況、被害を受けた場所、被害の継続期間
➢ 性暴力被害の相談の有無、相談した人・機関、相談までに要した期間、相談相手の対応、相談しなかった理由
➢ 性暴力被害による生活の変化、被害からの回復状況
➢ 必要な手助け・支援、性暴力のない社会になるために必要な取組、性暴力被害の相談をしやすくするために必要な取組</td></tr>
<tr><td>実施時期</td><td>2022 年 1 月 7～17 日</td></tr>
</table>

３）若年層の性暴力被害の実態に関するヒアリング

若年層の性暴力被害の実態及び若年層の性暴力被害者支援における課題について把握し、関係者による様々な若年層への適切な対応や支援の検討に資することを目的に、性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターを対象としたヒアリング（5 か所）及び若年層の性暴力被害者支援団体の相談員等や学生団体等を対象としたヒアリング（5 か所）を実施した。ヒアリング実施要領（概要）は下表のとおり（詳細は p.75～を参照）。

図表　1-5　若年層の性暴力被害の実態に関するヒアリング実施要領

項目	概要	
対象	ワンストップ支援センター	5 か所
	支援団体等	5 か所
実施方法	オンラインヒアリング	
調査項目	・若年層の性暴力被害及び相談・支援状況に関する実態把握 ➢ 若年層の性暴力被害の状況・傾向（性暴力被害の内容・特徴、頻発・増加している性暴力被害ケース、性暴力被害継続の期間、性暴力被害が心身に及ぼす影響、身体的・精神的被害等の度合い、SNS 等の影響、低年齢化の状況、男性・障害者・外国籍の方等の性暴力被害の状況　等） ➢ 相談状況（近年の相談件数の推移、相談者・相談経路、相談機関の認知ルート、性暴力被害から相談までに要する期間、相談手段の状況・ニーズ　等） ➢ 支援状況（支援内容、最近の支援件数の推移　等） ・相談や支援につなげるための活動・工夫・連携等 ・課題 ・行政に求めること	
実施時期	2022 年 1～2 月	

第2章　若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート

2－1．オンラインアンケートの実施状況

1）目的

若年層の性暴力被害の実態について把握し、よりよい施策（例：被害者が一人で悩んだり、難しい状況におかれたりせず、十分な支援を受けるための効果的な制度等）を検討することを目的に、内閣府が実施した。

2）質問項目

下記を質問項目とした。質問票の詳細は「参考資料　アンケート質問票」を参照。

（1）スクリーニング調査

若年層における性暴力被害経験を有する回答者の抽出（本調査対象者の抽出）、性暴力の各分類の被害遭遇率の推計、性暴力被害の遭遇年齢状況の把握等を目的に、スクリーニング調査を実施した。

- 性自認
- 年齢
- 所属・職業
- 性暴力被害の遭遇の有無（言葉による性暴力被害、視覚による性暴力被害、身体接触を伴う性暴力被害、性交を伴う性暴力被害、情報ツールを用いた性暴力被害）
- 最も深刻な／深刻だった性暴力被害
- 最も深刻な／深刻だった性暴力被害に最初にあった時の年齢
- 7 つの手口への遭遇の有無（AV 出演強要、JK ビジネス、レイプドラッグ、酔わせて性的行為を強要、SNS を利用した性被害、セクシュアルハラスメント、痴漢）

（2）本調査

若年層における性暴力被害の実態の把握を目的に、本調査を実施した。

- 加害者との関係
- 加害者の性別
- 加害者の社会的・職務上の地位等
- 性暴力被害にあったときの状況
- 性暴力被害にあった場所
- 性暴力被害の継続期間
- 性暴力被害の相談状況
- 相談までに要した期間

- 最初に相談した相手の対応
- 相談しなかった理由
- 性暴力被害による生活の変化
- 性暴力被害からの回復状況
- 必要な手助け・支援
- 性暴力のない社会になるために必要な取組
- 性暴力被害の相談をしやすくするために強化が必要な取組

３）リサーチクエスチョン

上記の質問項目を基に、本オンラインアンケートでは、下記のリサーチクエスチョンを設定し、その結果を示していく。

（１）スクリーニング調査

若年層（16～24 歳）における性暴力（望まない性的な言動）被害の遭遇状況はどのようになっているか。

- オンラインアンケートの回答者はどのような人たちか。
  回答者の属性（性自認、年齢層、所属・職業）
- 誰が、どのような性暴力被害（被害分類・手口）に、どの程度遭遇しているか
  性自認・年齢層別の性暴力被害分類、手口への遭遇率

（２）本調査

若年層（16～24 歳）における性暴力（望まない性的な言動）被害の実態はどのようになっているか。

① 性暴力の被害分類別に、どのような被害状況・傾向がみられるか。

- 被害者はどのような人たちか。
  性自認、年齢層、所属・職業、性暴力被害の遭遇の有無、性暴力被害に最初にあった年齢
- 加害者はどのような人たちか。
  加害者と被害者との関係・立場、加害者の性別
- どこで、どのように性暴力被害にあっているのか。
  被害時の状況、被害場所、被害の継続状況等
- 性暴力被害者は相談等につながっているか。誰に、どのようにつながっているか。何が阻害しているか。
  相談の有無、相談した人・機関、相談までに要した期間、最初に相談した人がとった言動、相談しなかった理由
- 性暴力被害の程度、影響、深刻さについてはどのような特徴がみられるか。

性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化、性暴力被害からの回復状況

② 性自認や年齢層別に、どのような被害状況・傾向がみられるか。

③ 加害者の属性別に、どのような被害状況・傾向がみられるか。

④ 低年齢被害の状況はどのようになっているか。低年齢のときに受けた性暴力被害の影響はどの程度大きいか。

⑤ 若年層被害者の被害からの回復に影響を与えている要因は何か。

⑥ 若年層被害者に対する支援課題は何か。

- 性暴力被害にあった後に必要な支援はどのようなことか。
  必要な手助け・支援
- どのような施策が求められているか。
  性暴力のない社会になるために必要な取組、性暴力被害の相談をしやすくなるために強化が必要な取組

⑦ 今後に向けた課題は何か。

オンラインアンケートの成果と限界、より詳細な調査を要する点等

２－２．オンラインアンケートの結果と分析

以下、1）スクリーニング調査結果と分析（p. 9～）、2）本調査の結果と分析（p.21～）と順次述べる

１）スクリーニング調査

スクリーニング調査（配信件数：328,463 件）では、全体で 8,941 人の有効回答が得られた（回収率 2.72%）。そのうち、被害遭遇率の算出に用いるために性別・年齢別の人口分布を考慮して配信した「1 次配信分（221,022 人）」に該当する回答人数は 6,224 人（回収率 2.82%）、それ以外の「2 次配信分（107,441 人）」の回答人数は 2,717 人（回収率 2.53%）となっている。

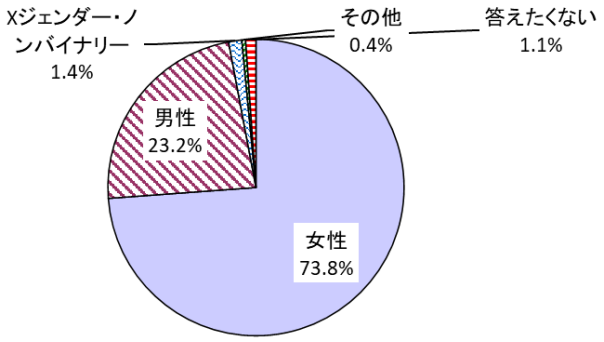
（１)回答者属性

下記にスクリーニング調査の回答者属性を示す。

①性自認

全体では、有効回答数 8,941 人のうち、女性 6,601 人（73.8%）、男性 2,075 人（23.2%）、X ジェンダー・ノンバイナリー129 人（1.4%）、その他 36 人（0.4%）、答えたくない 100 人（1.1%）となっている。

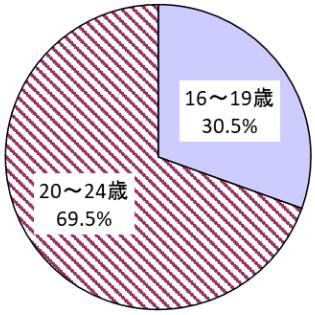
図表 ２-１ 性自認（n＝8,941）



②年齢層

全体では、有効回答数 8,941 人のうち、16～19 歳 2,725 人（30.5%）、20～24 歳 6,216 人（69.5%）となっている。

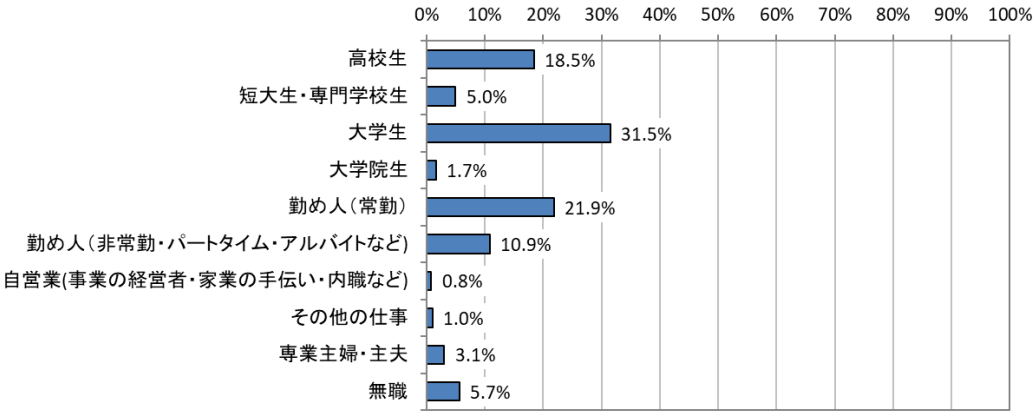
図表 2-2 年齢層（n＝8,941）



③所属・職業

全体では、有効回答数 8,941 人のうち、高校生 1,651 人（18.5%）、短大生・専門学校生 448 人（5.0%）、大学生 2,818 人（31.5%）、大学院生 148 人（1.7%）、勤め人（常勤）1,956 人（21.9%）、勤め人（非常勤・ﾊﾟｰﾄﾀｲﾑ・ｱﾙﾊﾞｲﾄなど）971 人（10.9%）、自営業（事業の経営者・家業の手伝い・内職など）74 人（0.8%）、その他の仕事 92 人（1.0%）、専業主婦・主夫 274 人（3.1%）、無職 509 人（5.7%）となっている。

図表 2-3 所属・職業（n＝8,941）



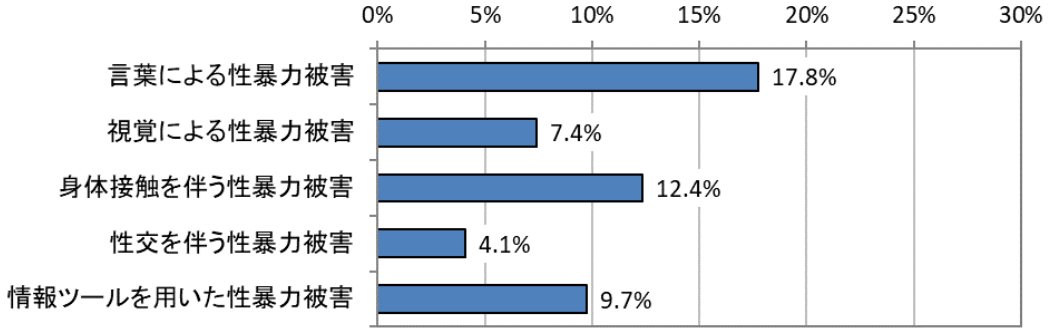
（２）性暴力被害の遭遇率（１次配信では 1,644 人（26.4%）が被害遭遇ありと回答）

本アンケートでは、性暴力被害を 5 つに分類・整理した上で、Web アンケートモニターに対し、性暴力被害の遭遇の有無を聞いた。本項の遭遇率においては、人口分布を考慮した 1 次配信分の結果（回答数 6,224 人）のみを活用する。なお、本結果は、1 次配信の回収率が全体で 2.82%であることから、母集団の特性を反映する疫学的なデータとは言えず任意の回答者（＝積極的に回答した方）の回答内容に基づいた結果であり、疫学的遭遇率を示すも

のではないことに留意されたい。

下図に、性暴力被害 5 分類への遭遇率をまとめる（性暴力被害の分類と例示については図 1 - 1 を参照）。

図表 2-4 性暴力被害 5 分類への遭遇率（1 次配信分、n＝6,224：複数回答）



以下、5 分類ごとに詳細にみていく。

①言葉による性暴力被害

言葉による性暴力被害の遭遇率は全体で 17.8%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（40.0%）、その他・答えたくない（28.0%）、女性（19.9%）、男性（11.2%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（18.9%）、16～19 歳（15.5%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（48.0%）で最も高く、次いでその他・答えたくないの 16～19 歳（30.2%）となっている。

図表 2-5 言葉による性暴力被害の遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	17.6% (250)	21.2% (583)	19.9% (833)
男性	7.9% (43)	12.6% (165)	11.2% (208)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	30.0% (12)	48.0% (24)	40.0% (36)
その他・答えたくない	30.2% (13)	26.3% (15)	28.0% (28)
計	15.5% (318)	18.9% (787)	17.8% (1,105)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

②視覚による性暴力被害

視覚による性暴力被害の遭遇率は全体で 7.4%となった。

性自認別には、その他・答えたくない（15.0%）、X ジェンダー・ノンバイナリー（13.3%）、女性（8.7%）、男性（3.7%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（8.2%）、16～19 歳（5.8%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（18.0%）で最も高く、次いでその他・答えたくないの 20～24 歳（17.5%）となっている。

図表 ２-６ 視覚による性暴力被害の遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	6.8% (96)	9.7% (268)	8.7% (364)
男性	2.6% (14)	4.2% (55)	3.7% (69)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	7.5% (3)	18.0% (9)	13.3% (12)
その他・答えたくない	11.6% (5)	17.5% (10)	15.0% (15)
計	5.8% (118)	8.2% (342)	7.4% (460)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

③身体接触を伴う性暴力被害

身体接触を伴う性暴力被害の遭遇率は全体で 12.4%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（32.2%）、その他・答えたくない（19.0%）、女性（15.0%）、男性（5.1%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（13.6%）、16～19 歳（9.9%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（38.0%）と 16～19 歳（25.0%）で高くなっている。

図表 ２-７ 身体接触を伴う性暴力被害の遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	11.7% (167)	16.7% (460)	15.0% (627)
男性	3.5% (19)	5.8% (76)	5.1% (95)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	25.0% (10)	38.0% (19)	32.2% (29)
その他・答えたくない	18.6% (8)	19.3% (11)	19.0% (19)
計	9.9% (204)	13.6% (566)	12.4% (770)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

④性交を伴う性暴力被害

性交を伴う性暴力被害の遭遇率は全体で 4.1%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（12.2%）、その他・答えたくない（8.0%）、女性（4.7%）、男性（2.1%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（5.0%）、16～19 歳（2.2%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（16.0%）で最も高く、次いでその他・答えたくないの 20～24 歳（12.3%）となっている。

図表 ２-８ 性交を伴う性暴力被害の遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	2.7% (39)	5.7% (158)	4.7% (197)
男性	0.5% (3)	2.7% (36)	2.1% (39)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	7.5% (3)	16.0% (8)	12.2% (11)
その他・答えたくない	2.3% (1)	12.3% (7)	8.0% (8)
計	2.2% (46)	5.0% (209)	4.1% (255)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

⑤情報ツールを用いた性暴力被害

情報ツールを用いた性暴力被害の遭遇率は全体で 9.7%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（24.4%）、その他・答えたくない（16.0%）、女性（11.6%）、男性（4.6%）の順で高くなっている。

年齢別には、16～19 歳（9.5%）、20～24 歳（9.9%）とほぼ同水準となっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（32.0%）で最も高く、次いでその他・答えたくないの 20～24 歳（19.3%）となっている。

図表 ２-９ 情報ツールを用いた性暴力被害の遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	11.4% (162)	11.7% (321)	11.6% (483)
男性	4.0% (22)	4.8% (63)	4.6% (85)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	15.0% (6)	32.0% (16)	24.4% (22)
その他・答えたくない	11.6% (5)	19.3% (11)	16.0% (16)
計	9.5% (195)	9.9% (411)	9.7% (606)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

【参考】被害分類における重複被害状況について

上記の性暴力被害の 5 分類のうち、複数の分類の性暴力被害を受けている回答者も多い(同じ被害の中で、複数の分類の被害を受けている場合を含む)。重複被害の状況を下表に示す。

- 性暴力被害遭遇があると回答した実人数 1,644 人のうち、重複被害を受けている方（複数の被害分類に遭遇したと回答した方）は 849 人（51.6%）となっている。
- うち 2 分類が 421 人（25.6%）、3 分類が 236 人（14.4%）、4 分類が 109 人（6.6%）、全 5 分類が 83 人（5.0%）となっている。
- 詳細はデータ編の p.8 を参照。

図表 ２-１０　性暴力被害分類別、重複被害状況（1 次配信分）

遭遇した被害分類	件数
1種類	795
2種類	421
3種類	236
4種類	109
5種類	83
合計	1,644

（３)7つの手口への遭遇率(１次配信では 920 人(14.8％)が被害遭遇ありと回答）

次に、若年層に対する性暴力の手口を下表のように整理した上で、性暴力被害経験の有無を質問した。本項の遭遇率においては、再度、人口分布を考慮した 1 次配信分（6,224 人）の結果のみを活用する。また、性暴力被害の遭遇の有無を聞いた設問で、遭遇していないと回答した場合は本設問には当初から回答していないが、その場合にも下記手口に遭遇していないものとみなした。

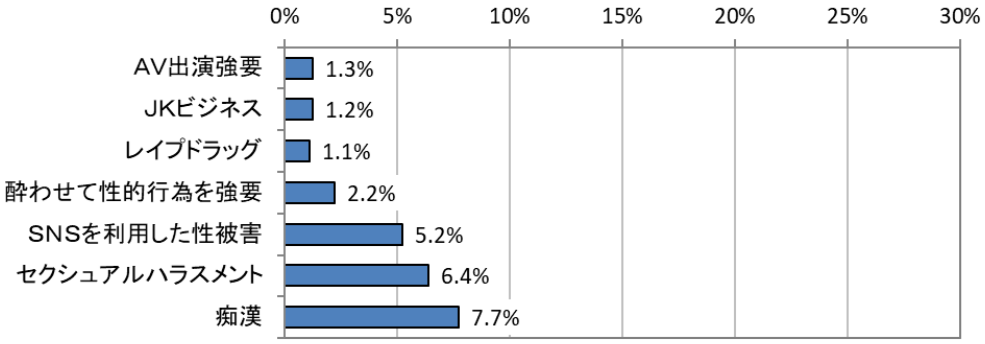
前項の「性暴力被害の遭遇率」と同様、本結果は、配信への回答率からも、Web アンケートモニターのうちアンケートに任意で回答した方（＝積極的に回答した方）の回答内容に基づいており、疫学的遭遇率を示すものではないことを付記する。

図表 ２-１１　手口の分類と例示

手口の分類	例示
a)　AV 出演強要	「モデル・アイドルになりませんか」と声をかけられ、その後、聞いていない・同意していない性的な行為や、行為中の「写真」や「動画」の撮影をされた
b)　JK ビジネス	アルバイトへの応募をしたところ、約束していない性的な行為を要求された
c)　レイプドラッグ	薬物などにより意識がない・もうろうとした状況で、性的行為をされた
d)　酔わせて性的行為を強要	飲酒により意識がない・もうろうとした状態で性的行為をされた
e)　SNS を利用した性被害	インターネットや SNS などで相手から性的な写真を送るよう要求された、画像をばらまくと言われた、なりすました相手から性的行為を強要された　など
f)　セクシュアルハラスメント	学校や職場で性的な嫌がらせをされた
g)　痴漢	電車などで体を触られた、相手の体を押し付けられた　など

下図に、手口 7 分類の遭遇率を示す。

図表 ２-１２　手口 7 分類への遭遇率（1 次配信分、n＝6,224：複数回答）



以下、7 分類ごとに詳細にみていく。

①AV出演強要

AV 出演強要への遭遇率は全体で 1.3%となった。

性自認別には、その他・答えたくない（5.0%）、X ジェンダー・ノンバイナリー（3.3%）、女性（1.5%）、男性（0.5%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（1.6%）、16～19 歳（0.6%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、その他・答えたくないの 20～24 歳（7.0%）で最も高く、次いで X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（6.0%）となっている。

図表 ２-１３　AV 出演強要への遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	0.8% (11)	1.8% (50)	1.5% (61)
男性	0.0% (0)	0.7% (9)	0.5% (9)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	0.0% (0)	6.0% (3)	3.3% (3)
その他・答えたくない	2.3% (1)	7.0% (4)	5.0% (5)
計	0.6% (12)	1.6% (66)	1.3% (78)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

②JKビジネス

JK ビジネスへの遭遇率は全体で 1.2%となった。

性自認別には、その他・答えたくない（5.0%）、X ジェンダー・ノンバイナリー（3.3%）、女性（1.3%）、男性（0.8%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（1.6%）、16～19 歳（0.5%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、その他・答えたくないの 20～24 歳（8.8%）で最も高く、次いで X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（6.0%）となっている。

なお、本アンケートの JK ビジネスは女子高生に限定しておらず、例示を「アルバイトへの応募をしたところ、約束していない性的な行為を要求された」としているため、女性以外の回答も存在する。

図表 2-14 JK ビジネスへの遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	0.6% (8)	1.7% (46)	1.3% (54)
男性	0.4% (2)	1.0% (13)	0.8% (15)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	0.0% (0)	6.0% (3)	3.3% (3)
その他・答えたくない	0.0% (0)	8.8% (5)	5.0% (5)
計	0.5% (10)	1.6% (67)	1.2% (77)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

③レイプドラッグ

レイプドラッグへの遭遇率は全体で 1.1%となった。

性自認別には、その他・答えたくない（5.0%）、X ジェンダー・ノンバイナリー（3.3%）、女性（1.2%）、男性（0.6%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（1.4%）、16～19 歳（0.4%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、その他・答えたくないの 20～24 歳（7.0%）で最も高く、次いで X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（6.0%）となっている。

図表 2-15 レイプドラッグへの遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	0.4% (6)	1.6% (43)	1.2% (49)
男性	0.4% (2)	0.8% (10)	0.6% (12)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	0.0% (0)	6.0% (3)	3.3% (3)
その他・答えたくない	2.3% (1)	7.0% (4)	5.0% (5)
計	0.4% (9)	1.4% (60)	1.1% (69)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

④酔わせて性的行為を強要

酔わせて性的行為を強要への遭遇率は全体で 2.2%となった。

性自認別には、その他・答えたくない（5.0%）、X ジェンダー・ノンバイナリー（4.4%）、女性（2.6%）、男性（1.1%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（2.9%）、16～19 歳（0.8%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、その他・答えたくないの 20～24 歳（8.8%）で最も高く、次いで X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（8.0%）となっている。

図表 ２-１６ 酔わせて性的行為を強要への遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	1.0% (14)	3.4% (93)	2.6% (107)
男性	0.4% (2)	1.5% (19)	1.1% (21)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	0.0% (0)	8.0% (4)	4.4% (4)
その他・答えたくない	0.0% (0)	8.8% (5)	5.0% (5)
計	0.8% (16)	2.9% (121)	2.2% (137)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

⑤SNSを利用した性被害

SNS を利用した性被害への遭遇率は全体で 5.2%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（13.3%）、その他・答えたくない（7.0%）、女性（6.4%）、男性（2.1%）の順で高くなっている。

年齢別には、16～19 歳（5.6%）、20～24 歳（5.1%）がほぼ同水準となっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（20.0%）で最も高く、次いでその他・答えたくないの 20～24 歳（8.8%）となっている。

図表 ２-１７ SNS を利用した性被害への遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	7.0% (100)	6.1% (168)	6.4% (268)
男性	1.8% (10)	2.2% (29)	2.1% (39)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	5.0% (2)	20.0% (10)	13.3% (12)
その他・答えたくない	4.7% (2)	8.8% (5)	7.0% (7)
計	5.6% (114)	5.1% (212)	5.2% (326)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

⑥セクシュアルハラスメント

セクシュアルハラスメントへの遭遇率は全体で 6.4%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（23.3%）、その他・答えたくない（14.0%）、女性（6.9%）、男性（3.9%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（7.3%）、16～19 歳（4.5%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（34.0%）で最も高く、次いでその他・答えたくないの 16～19 歳、20～24 歳（それぞれ 14.0%）となっている。

図表 ２-１８ セクシュアルハラスメントへの遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	5.1% (72)	7.9% (218)	6.9% (290)
男性	2.0% (11)	4.7% (61)	3.9% (72)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	10.0% (4)	34.0% (17)	23.3% (21)
その他・答えたくない	14.0% (6)	14.0% (8)	14.0% (14)
計	4.5% (93)	7.3% (304)	6.4% (397)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

⑦痴漢

痴漢への遭遇率は全体で 7.7%となった。

性自認別には、X ジェンダー・ノンバイナリー（16.7%）、女性（10.3%）、その他・答えたくない（9.0%）、男性（1.5%）の順で高くなっている。

年齢別には、20～24 歳（8.5%）、16～19 歳（6.1%）の順で高くなっている。

性自認・年齢別には、X ジェンダー・ノンバイナリーの 20～24 歳（22.0%）で最も高く、次いで女性の 20～24 歳（11.5%）となっている。

図表 ２-１９ 痴漢への遭遇率（1 次配信分、n＝6,224）

	16～19 歳	20～24 歳	計
女性	7.9% (112)	11.5% (317)	10.3% (429)
男性	1.1% (6)	1.7% (22)	1.5% (28)
X ｼﾞｪﾝﾀﾞｰ・ﾉﾝﾊﾞｲﾅﾘｰ	10.0% (4)	22.0% (11)	16.7% (15)
その他・答えたくない	7.0% (3)	10.5% (6)	9.0% (9)
計	6.1% (125)	8.5% (356)	7.7% (481)

※(　)内の数値は回答数を示す。

※X ジェンダー・ノンバイナリー、その他・答えたくないは、女性、男性と比較して回答数が少ないことに留意が必要。

【参考】手口の分類における重複被害状況について

上記の手口 7 分類のうち、複数の手口の性暴力被害を受けている回答者も多い（同じ被害の中で、複数の分類の被害を受けている場合を含む)。重複被害の状況を下表に示す。

- 被害遭遇があると回答した実人数 920 人のうち、重複被害を受けている方（複数の手口分類に遭遇したと回答した方）は 346 人（37.6%）となっている。
- うち 2 分類が 205 人（22.3%）、3 分類が 73 人（7.9%）、4 分類が 26 人（2.8%）、5 分類が 15 人（1.6%）、6 分類が 6 人（0.7%）、全 7 分類が 21 人（2.3%）となっている。
- 詳細はデータ編の p.9 を参照。

図表 ２-２０ 性暴力手口分類別、重複被害状況（1 次配信分）

遭遇した手口	件数
1種類	574
2種類	205
3種類	73
4種類	26
5種類	15
6種類	6
7種類	21
合計	920

２）本調査

本調査では、スクリーニング調査の有効回答 8,941 人から、全体で 2,040 人の性暴力被害経験者の有効回答が得られた。また、本調査では、スクリーニング調査で質問した「最も深刻な／深刻だった性暴力被害」（回答者本人が最も深刻と思っている被害）の回答結果に絞って、性暴力被害実態等を質問した。

なお、「最も深刻」の基準は回答者により異なるため、回答者が経験した性暴力被害及び主観的に深刻と捉えた性暴力被害であることに留意されたい。

（１）全体の状況

本調査の対象者 2,040 人全体の性暴力被害の状況についてまとめた。本項の結果は、言葉による性暴力、視覚による性暴力、身体接触を伴う性暴力、性交を伴う性暴力、情報ツールを用いた性暴力といった多様な性暴力の被害にあった方の回答の単純集計であることに留意されたい。

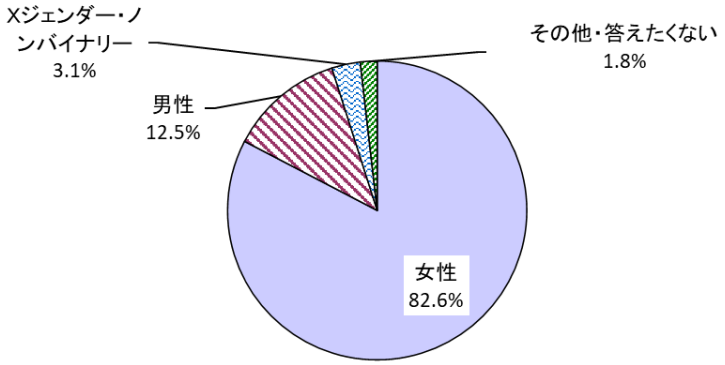
①回答者属性

下記に本調査の回答者属性を示す。

A.性自認

有効回答数 2,040 人のうち、女性が 82.6%を占め、男性が 12.5%、X ジェンダー・ノンバイナリーが 3.1%、その他・答えたくないが 1.8%となっている。

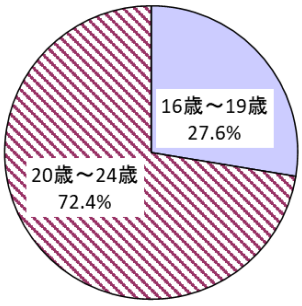
図表２-２１　性自認（n＝2,040）



B.年齢層

有効回答数 2,040 人のうち、16～19 歳が 27.6%、20～24 歳が 72.4%となっている。

図表　２-２２　年齢層（n＝2,040）

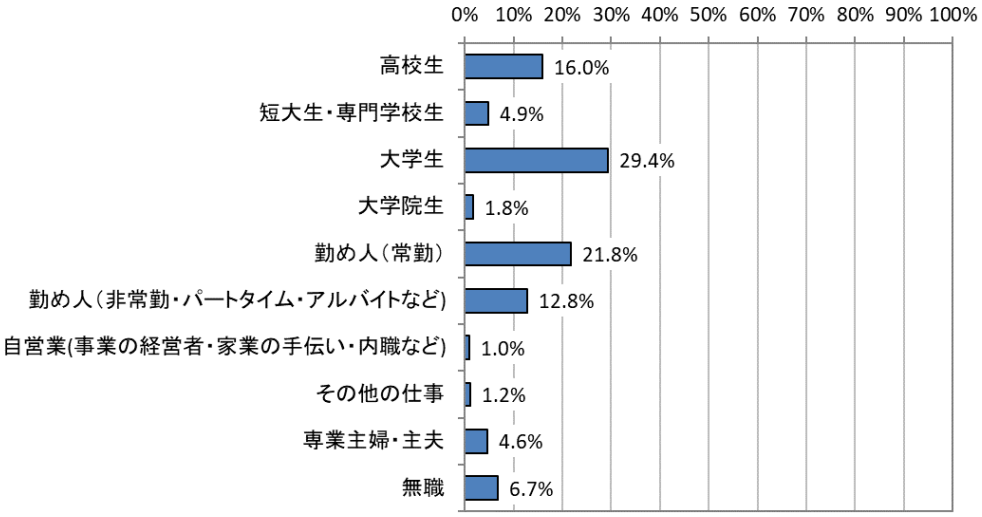


C.所属・職業

有効回答数 2,040 人のうち、高校生は 16.0%、短大生・専門学校生は 4.9%、大学生は 29.4%、大学院生は 1.8%、勤め人（常勤）は 21.8%、勤め人（非常勤・ﾊﾟｰﾄﾀｲﾑ・ｱﾙﾊﾞｲﾄなど）は 12.8%、自営業（事業の経営者・家業の手伝い・内職など）は 1.0%、その他の仕事は 1.2%、専業主婦・主夫は 4.6%、無職は 6.7%となっている。

大学生、勤め人（常勤）、高校生、勤め人（非常勤・ﾊﾟｰﾄﾀｲﾑ・ｱﾙﾊﾞｲﾄなど）の順で多くなっている。また、スクリーニング調査と比較しても構成比に大きな差異はみられていない。

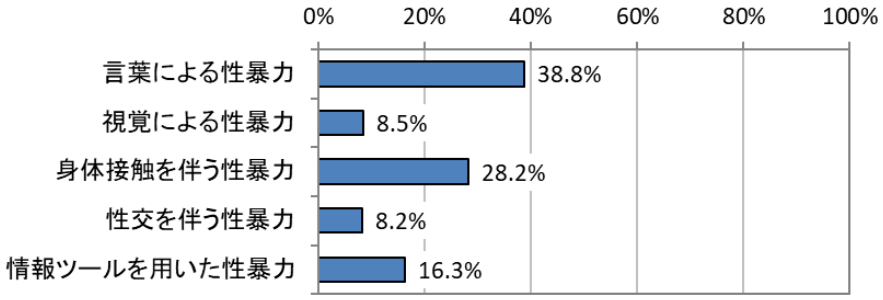
図表　２-２３　所属・職業（n＝2,040）



D.最も深刻な/深刻だった性暴力被害の分類

被害にあった性暴力被害のうち、最も深刻な／深刻だった性暴力被害としては、言葉による性暴力が最も多く（38.8%）、次いで身体接触を伴う性暴力（28.2%）、情報ツールを用いた性暴力（16.3%）となっている。

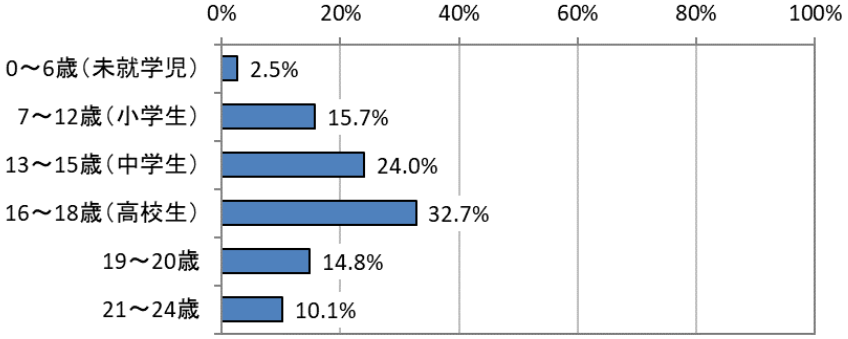
図表　２－２４　最も深刻な/深刻だった性暴力被害の分類（n＝2,040）



E.最も深刻な/深刻だった性暴力被害に最初にあった年齢

最も深刻な／深刻だった性暴力被害に最初にあった年齢は 16～18 歳が最も多く（32.7%）、次いで 13～15 歳（24.0%）、7～12 歳（15.7%）となっている。

図表　２-２５　最も深刻な/深刻だった性暴力被害に最初にあった年齢（n＝2,040）

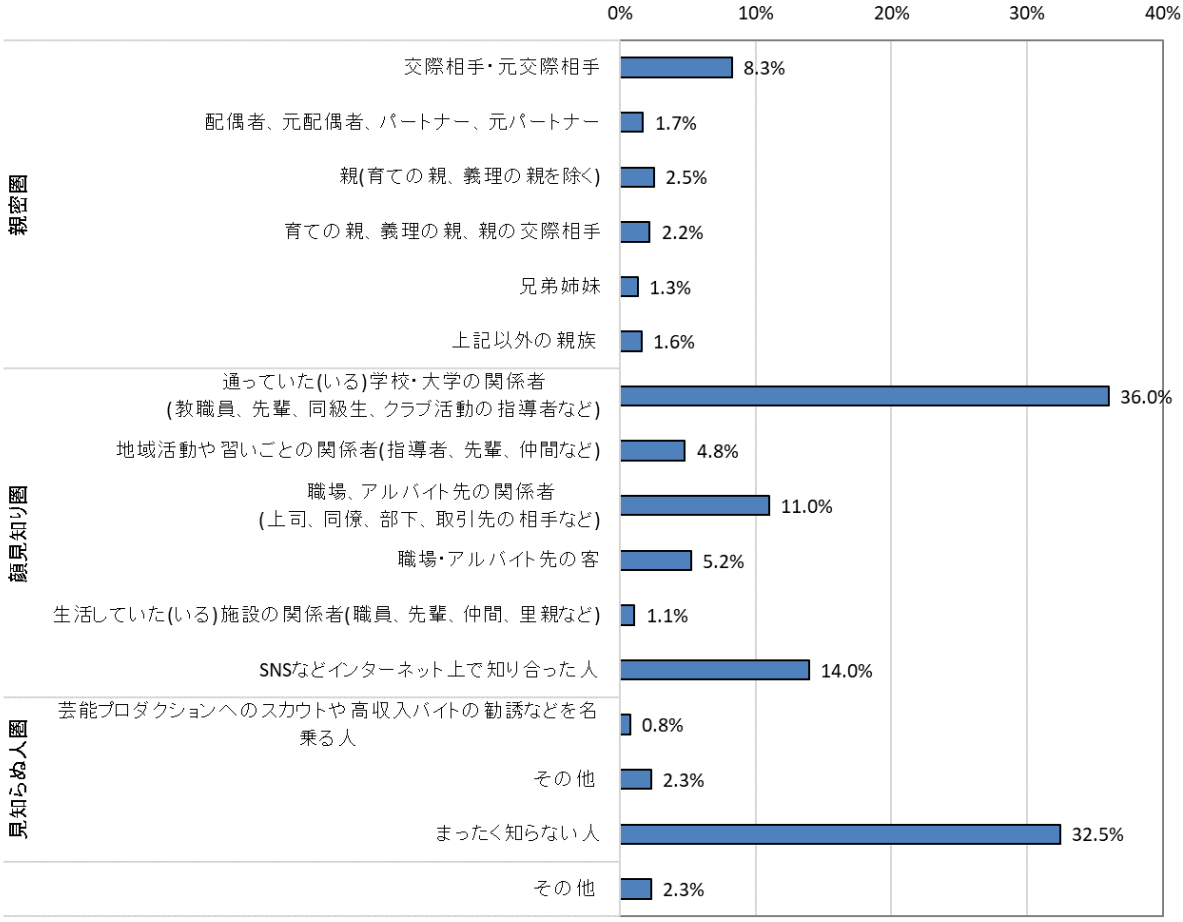


②加害者について

A.　加害者との関係

「通っていた（いる）学校・大学の関係者（教職員、先輩、同級生、クラブ活動の指導者など）」（36.0%）が最も多く、次いで、「まったく知らない人」（32.5%）、「SNS などインターネット上で知り合った人」（14.0%）、「職場・アルバイト先の関係者（上司、同僚、部下、取引先の相手など）」（11.0%）となっている。

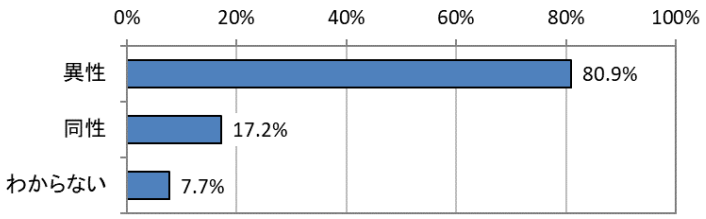
図表　２-２６　加害者との関係（複数回答）（n＝2,040）



B.加害者の性別

加害者の性別は異性が 80.9%と最も多く、同性が 17.2%、わからないが 7.7%となっている。

図表　２-２７　加害者の性別（複数回答）（n＝2,040）

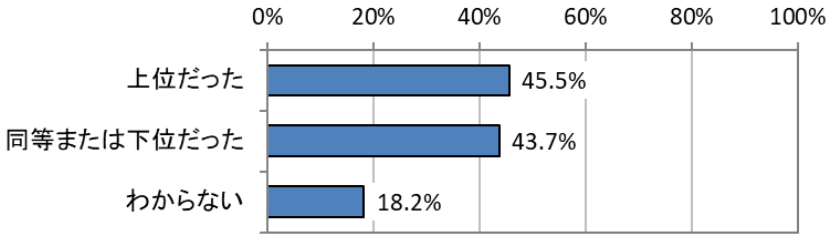


C.加害者の社会的・職務上の地位等

加害者が「通っていた（いる）学校・大学の関係者」、「地域活動や習いごとの関係者」、「職場、アルバイト先の関係者」、「職場・アルバイト先の客」、「生活していた（いる）施設の関係者」、「SNS などインターネット上で知り合った人」、「その他」と回答した方に、加害

者の社会的・職務上の地位等についてたずねたところ、「上位だった」が 45.5%、「同等または下位だった」が 43.7%とほぼ同じ割合となっている。

図表 ２-２８　加害者の社会的・職務上の地位等（複数回答）（n＝1,294）



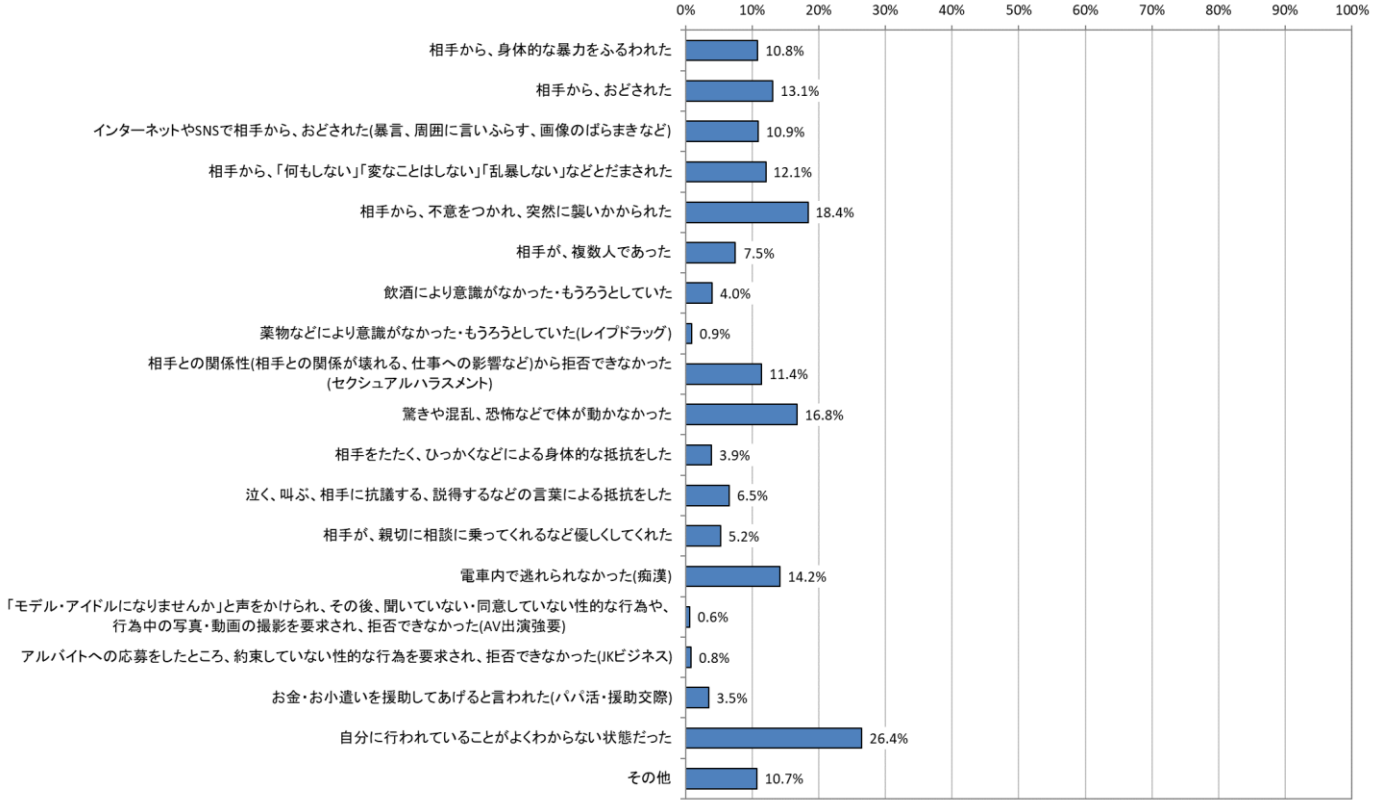
③性暴力被害の状況について

A.被害にあったときの状況

被害にあったときの状況としては、「自分に行われていることがよくわからない状態だった」（26.4%）が最多となっており、次いで「相手から、不意をつかれ、突然に襲いかかられた」（18.4%）、「驚きや混乱、恐怖などで体が動かなかった」（16.8%）、「電車内で逃れられなかった（痴漢）」（14.2%）、「相手から、おどされた」（13.1%）、「相手から『何もしない』『変なことはしない』『乱暴しない』などとだまされた」（12.1%）となっている。

その他には「AirDrop で画像が送られてきた」、「言葉の暴力」、「寝ている時に」等の回答がみられている。

図表 ２-２９　被害にあったときの状況（複数回答）（n＝2,040）

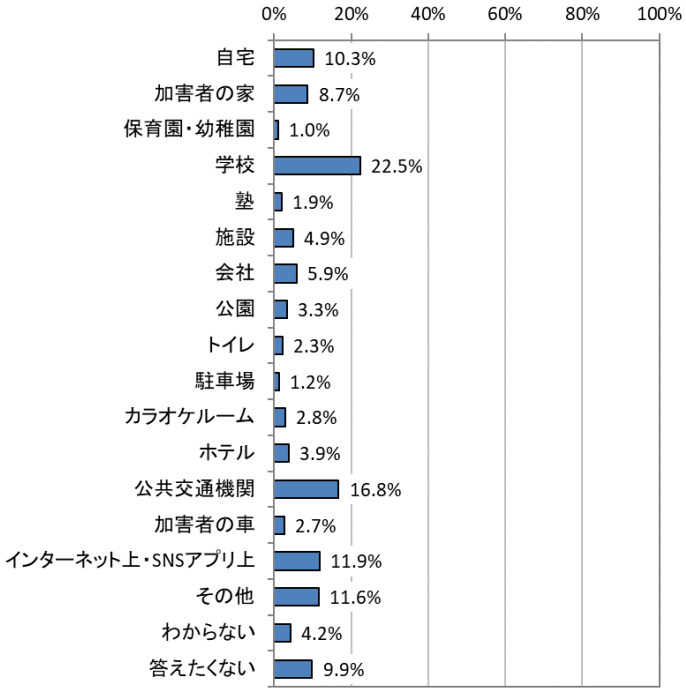


B.被害にあった場所

被害にあった場所としては、学校（22.5%）が最も多く、次いで公共交通機関（16.8%）、インターネット上・SNS アプリ上（11.9%）、その他（11.6%）、自宅（10.3%）、加害者の家（8.7%）となっている。

その他には「アルバイト先」、「通学路」、「道路」等の回答がみられている。

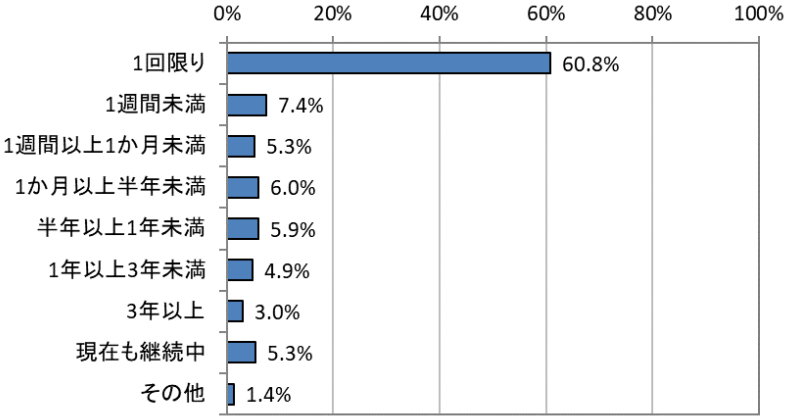
図表　２-３０　被害にあった場所（複数回答）（n＝2,040）



C.被害の継続期間

「1 回限り」の被害（60.8%）が最も多い。被害が継続した（1 週間未満～現在も継続中の和）との回答割合は 37.7%で、その内訳は「1 週間未満」（7.4%）、「1 か月以上半年未満」（6.0%）、「半年以上 1 年未満」（5.9%）等となっている。

図表　２-３１　被害の継続期間（n＝2,040）



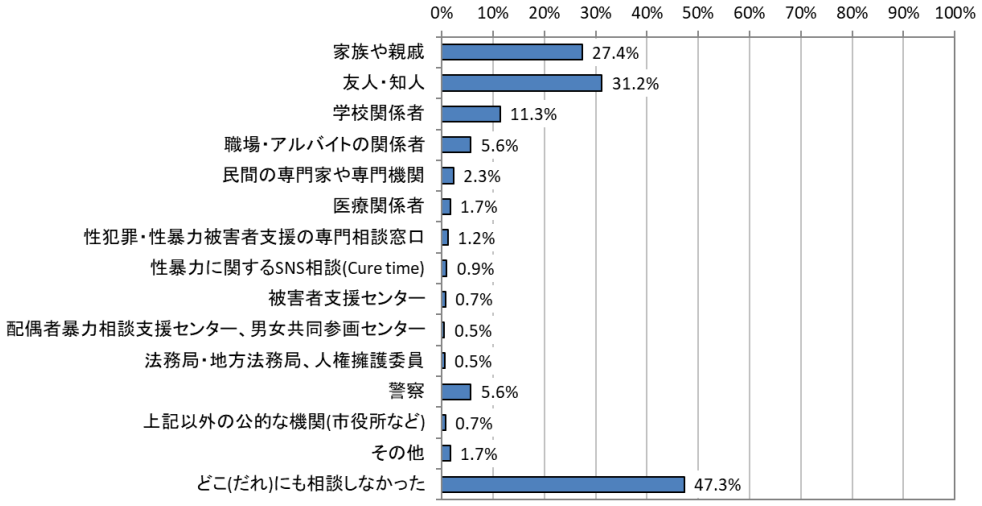
④被害にあったときの相談状況について

A.被害の相談状況

「どこ（だれ）にも相談しなかった」（47.3%）との回答が最も多く、約半数は相談につながっていない状況にある。被害を相談した方が、だれに相談したか（相談者）については、

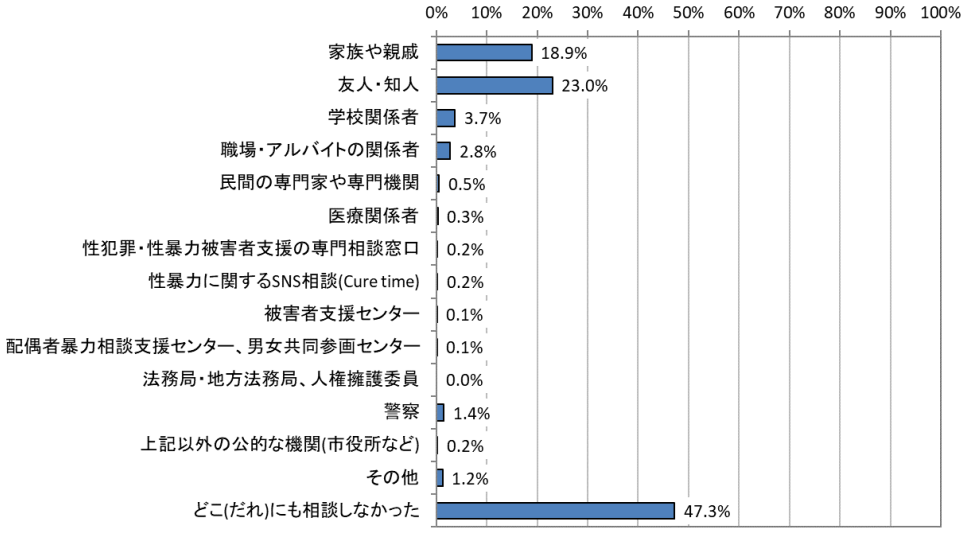
「友人・知人」（31.2%）と「家族や親戚」（27.4%）が多くなっており、「学校関係者（教員、養護教諭、スクールカウンセラーなど）」（11.3%）がこれに次いでいる。「警察」が 5.6%みられるものの、それ以外の官民の相談窓口への相談比率は低くなっている。

図表 ２-３２ 相談した人・機関（複数回答）（n＝2,040）



被害を相談した方に、最初に相談した人・機関をたずねたところ、「友人・知人」（23.0%）、「家族や親戚」（18.9%）となっており、まずは近しい存在の方に打ち明けたり、相談したりしている状況がうかがえる。

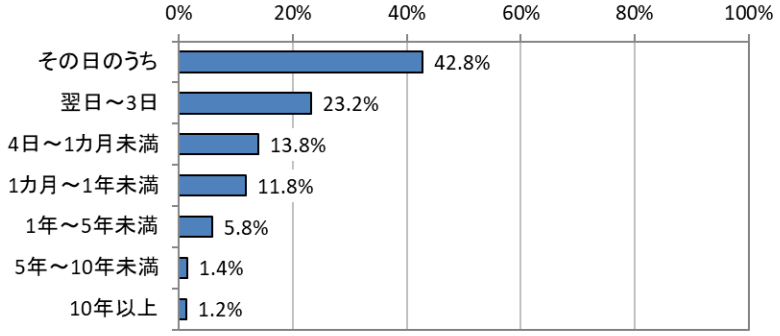
図表 ２-３３ 最初に相談した人・機関（n＝1,076）



B.相談までに要した期間

被害を相談した方に、被害から相談までに要した時間をたずねたところ、「その日のうち」との回答が最も多く（42.8%）、次いで「翌日～3 日」（23.2%）、「4 日～1 カ月未満」（13.8%）、「1 カ月～1 年未満」（11.8%）となっている。

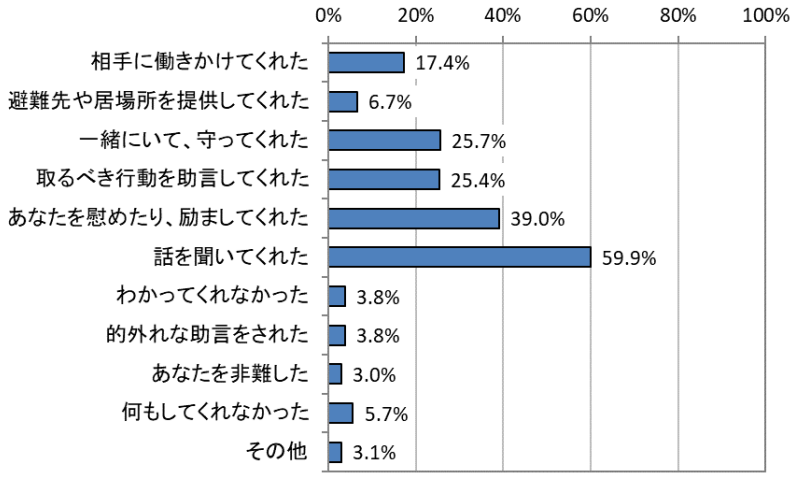
図表　２-３４　相談までに要した期間（n＝1,076）



C.最初に相談した相手がとった言動

最初に相談した相手がとった言動としては、「話を聞いてくれた」（59.9%）との回答が最も多く、次いで「あなたを慰めたり、励ましてくれた」（39.0%）、「一緒にいて、守ってくれた」（25.7%）、「取るべき行動を助言してくれた」（25.4%）、「相手に働きかけてくれた」（17.4%）等の前向きな対応が多くなっている。一方で、「何もしてくれなかった」、「わかってくれなかった」、「的外れな助言をされた」等の後ろ向きな対応も約 3～6%ずつみられている。その他には「警察に通報」、「他言せずにいてくれた」、「学校に相談した」等の回答がみられている。

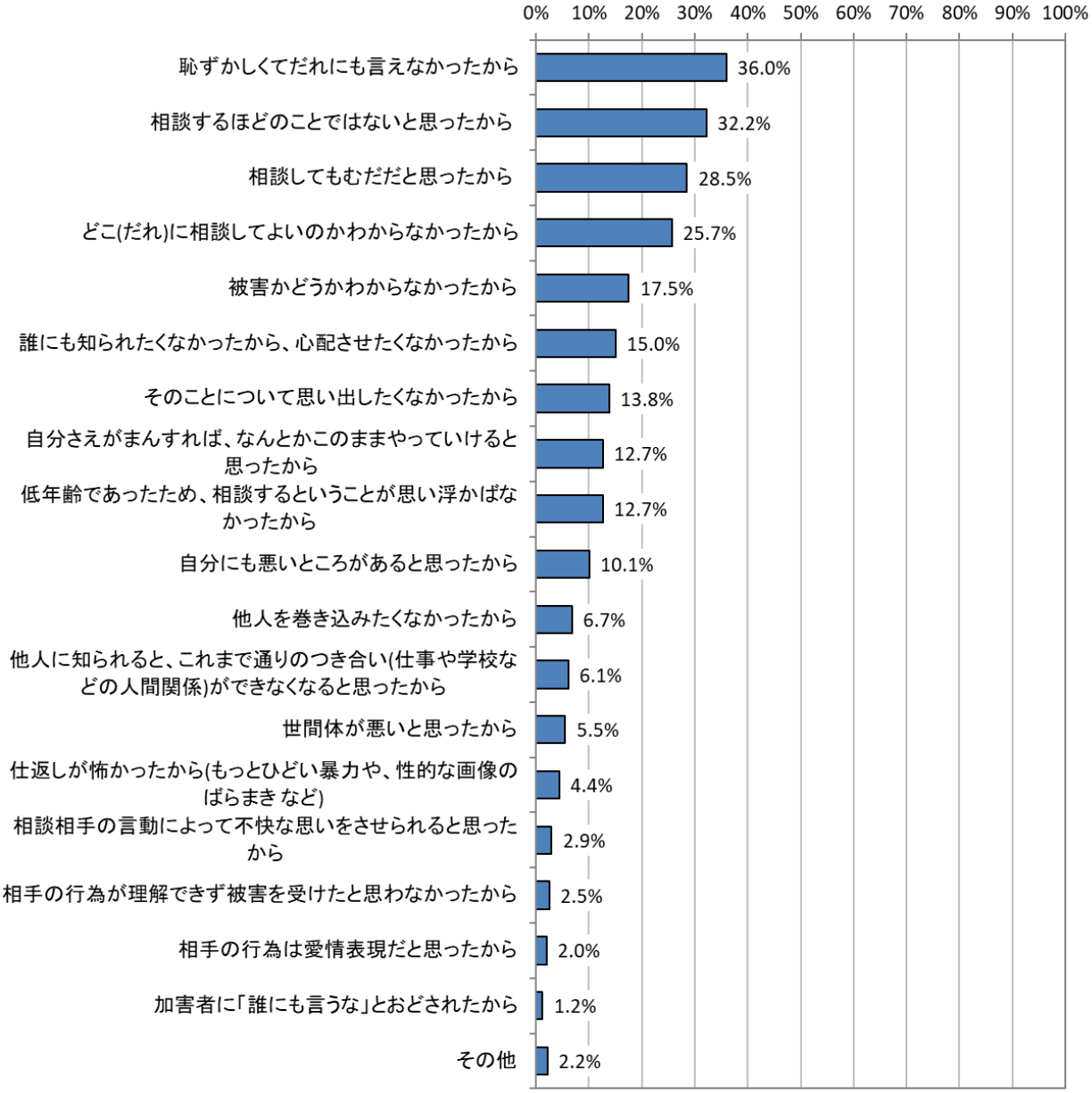
図表　２-３５　最初に相談した相手がとった言動（複数回答）（n＝1,076）



D.相談しなかった理由

相談しなかった理由としては、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」（36.0%）との回答が最も多く、次いで「相談するほどのことではないと思ったから」（32.2%）、「相談してもむだだと思ったから」（28.5%）、「どこ（だれ）に相談してよいのかわからなかったから」（25.7%）等が多くなっている。

図表 2-３６ 相談しなかった理由（複数回答）（n＝978）

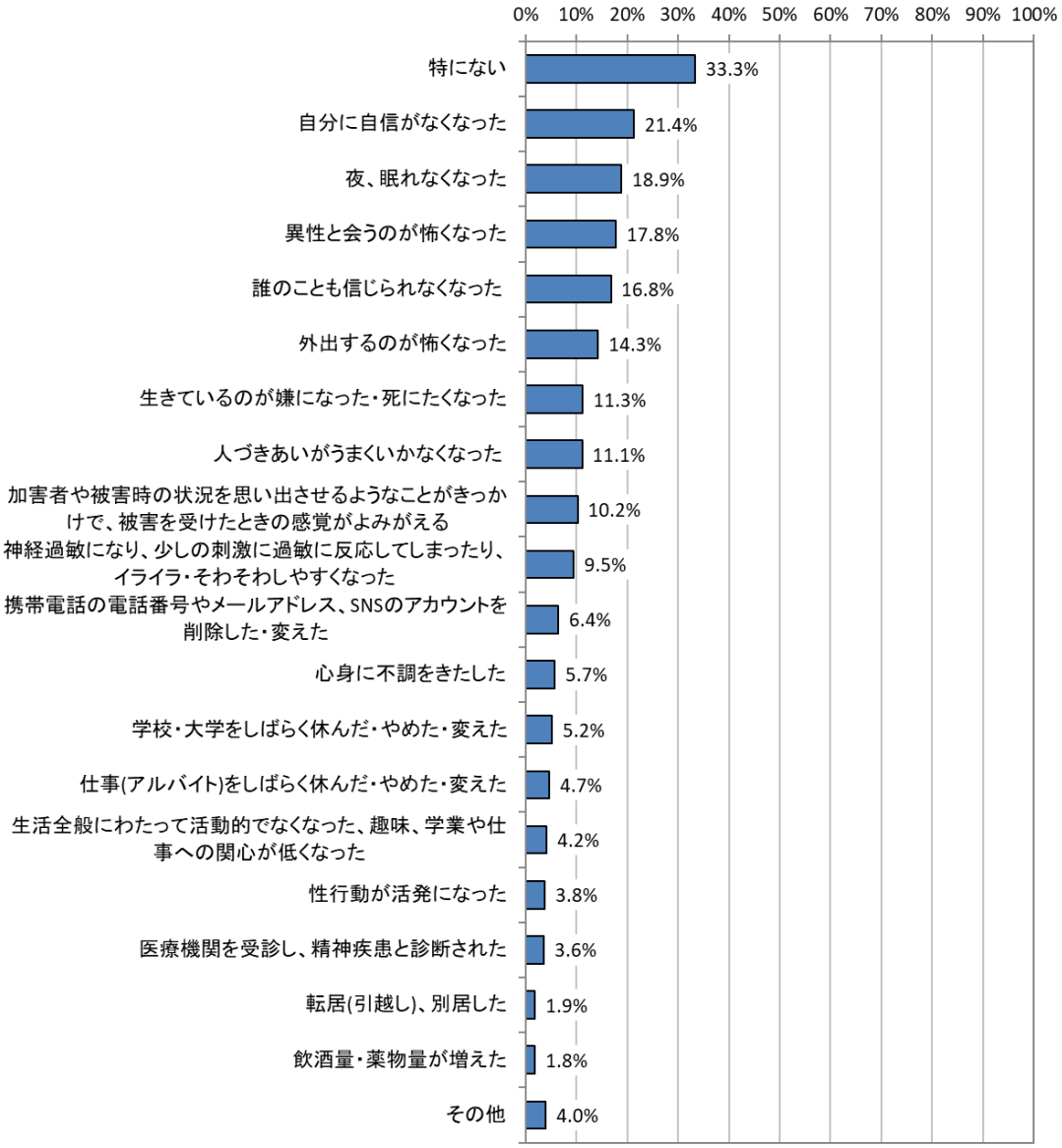


⑤性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

A.性暴力被害による生活の変化

被害による生活の変化は「特にない」（33.3%）との回答が最も多い。変化があったとする回答の中では、「自分に自信がなくなった」（21.4%）、「夜、眠れなくなった」（18.9%）、「異性と会うのが怖くなった」（17.8%）、「誰のことも信じられなくなった」（16.8%）等が多くなっている。

図表 ２-３７　性暴力被害による生活の変化（複数回答）（n＝2,040）

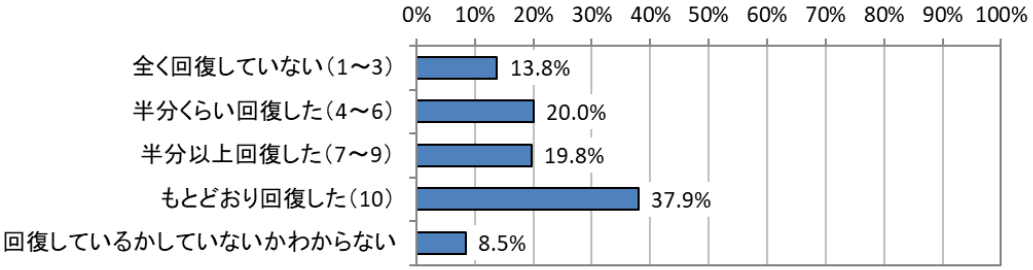


B.性暴力被害からの回復状況

本アンケートでは回答者に、被害からの回復状況を 10 段階で自己評価してもらい、そのうち、1～3 を「全く回復していない」、4～6 を「半分くらい回復した」、7～9 を「半分以上回復した」とした。その結果は下図のとおり。

「もとどおり回復した」（37.9%）が最も多く、次いで「半分くらい回復した」（20.0%）、「半分以上回復した」（19.8%）となっている。

図表 ２-３８ 性暴力被害からの回復状況（n＝2,040）



（２）性暴力被害分類別の状況

言葉による性暴力被害、視覚による性暴力被害、身体接触を伴う性暴力被害、性交を伴う性暴力被害、情報ツールを用いた性暴力被害の被害分類別に、性暴力被害の実態、相談状況等についてみていく。

①言葉による性暴力被害

最も深刻な／深刻だった性暴力被害として、言葉による性暴力被害を挙げた 791 人（有効回答数）の回答結果を基に、言葉による性暴力被害の特徴をみる。

【ポイント】言葉による性暴力被害の状況

○被害者について

女性の被害者が多数ではあるものの、男性の被害者も一定数いる。また、言葉による性暴力被害は小学生～高校生の時に初めて遭遇した人が多い。

○加害者について

学校の関係者が加害者であることが多い。異性による加害が多いものの、他の被害分類と比して同性による加害も多い。他の性暴力被害分類と比して社会的地位が同等または下位の者による加害が多い。

○性暴力被害の状況について

被害場所として学校が多くなっている。1 回限りの被害との回答が半数を超えるが、継続被害も比較的多い。性暴力被害にあった際の状況として、自分に行われていることがよくわからなかった、おどされた、身体的な暴力をふるわれた、相手が複数人であった等の回答が多い。

○性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこにも相談をしなかったケースが半数を超え、その理由として、相談するほどのことではない、相談してもむだ、恥ずかしくて言えなかった等が多く挙げられた。相談した人は家族・親戚、友人・知人の順で多い。

○性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

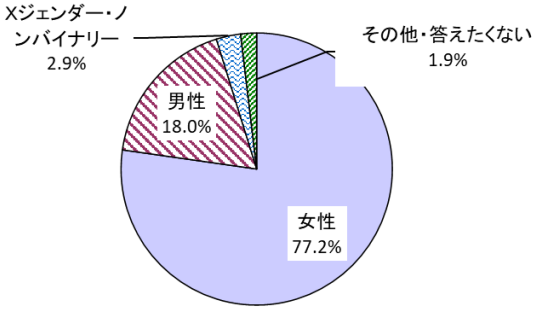
性暴力被害により、自信がなくなったとの回答が多くみられる。

A.【言葉による性暴力被害】被害者について

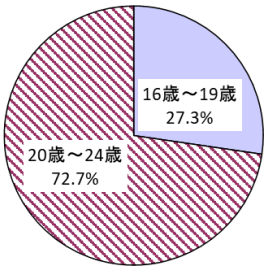
女性の被害者が 77.2％と多く、次いで男性が 18.0％となっている（下図左上）。年齢層は 20～24 歳が 72.7％と高く（下図右上）、所属・職業は大学生（32.2％）、勤め人（常勤、22.3％）の順で多い（下図中）。言葉による性暴力の他に、身体接触を伴う性暴力（21.0％）、情報ツールを用いた性暴力（19.6％）等にあっている人が多い（下図左下）。13～15 歳の時に初めて言葉による性暴力被害にあった人が 30.2％と最も多く、次いで 16～18 歳（23.5％）、7～12 歳（21.7％）と、小中学生・高校生の時に初めてあった人が多い（下図右下）。

図表 2-39 【言葉による性暴力被害】被害者について （n＝791）

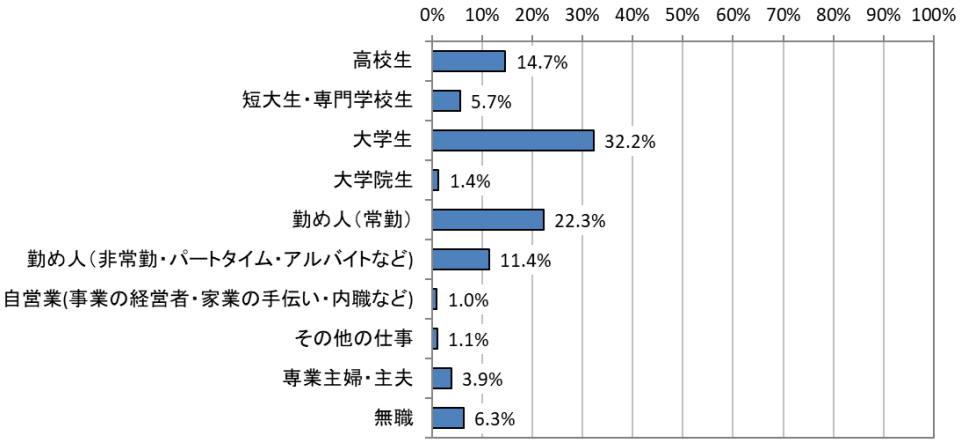
＜性自認＞



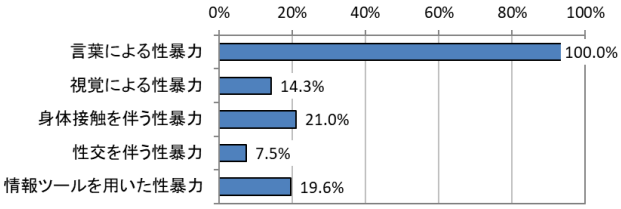
＜年齢層＞



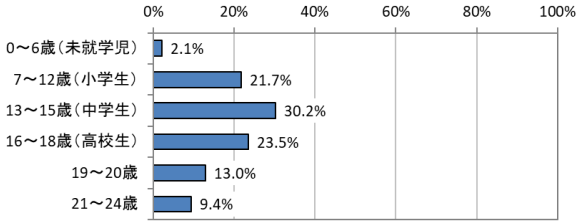
＜所属・職業＞



＜性暴力被害の遭遇の有無（複数回答）＞



＜言葉による性暴力被害に最初にあった年齢＞

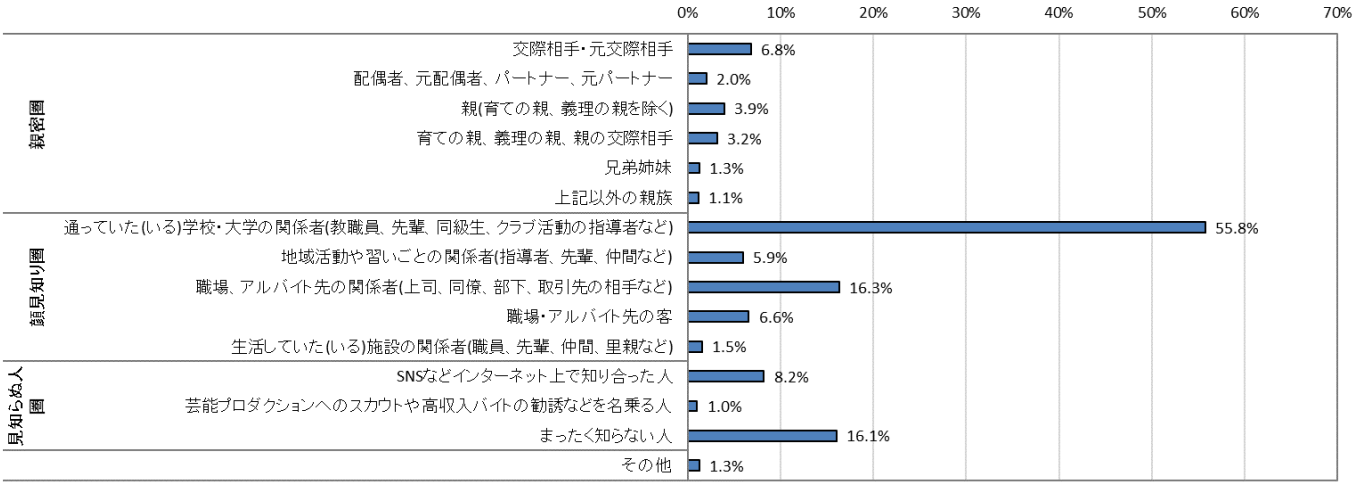


B.【言葉による性暴力被害】加害者について

加害者としては、学校・大学の関係者（55.8%）が多く、職場・アルバイト先の関係者（16.3%）、まったく知らない人（16.1%）等がこれに次ぐ（下図上）。異性による加害が 74.1%と多いが、同性による加害も 31.1%みられる（下図左下）。加害者の社会的・職務上の地位等は同等または下位が 50.0%と、他の性暴力被害分類と比しても多くなっている（下図右下）。

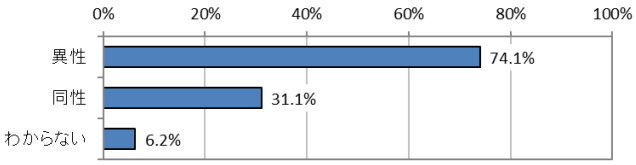
図表 2-40 【言葉による性暴力被害】加害者について

＜加害者との関係（複数回答、n＝791）＞

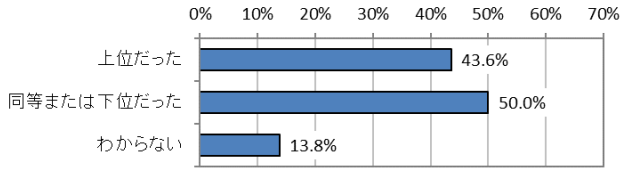


※加害者を「親密圏」、「顔見知り圏」、「見知らぬ人圏」に区分して表示（以下同様）

＜加害者の性別（複数回答、n＝791）＞



＜加害者の社会的・職務上の地位等（複数回答、n＝638）＞

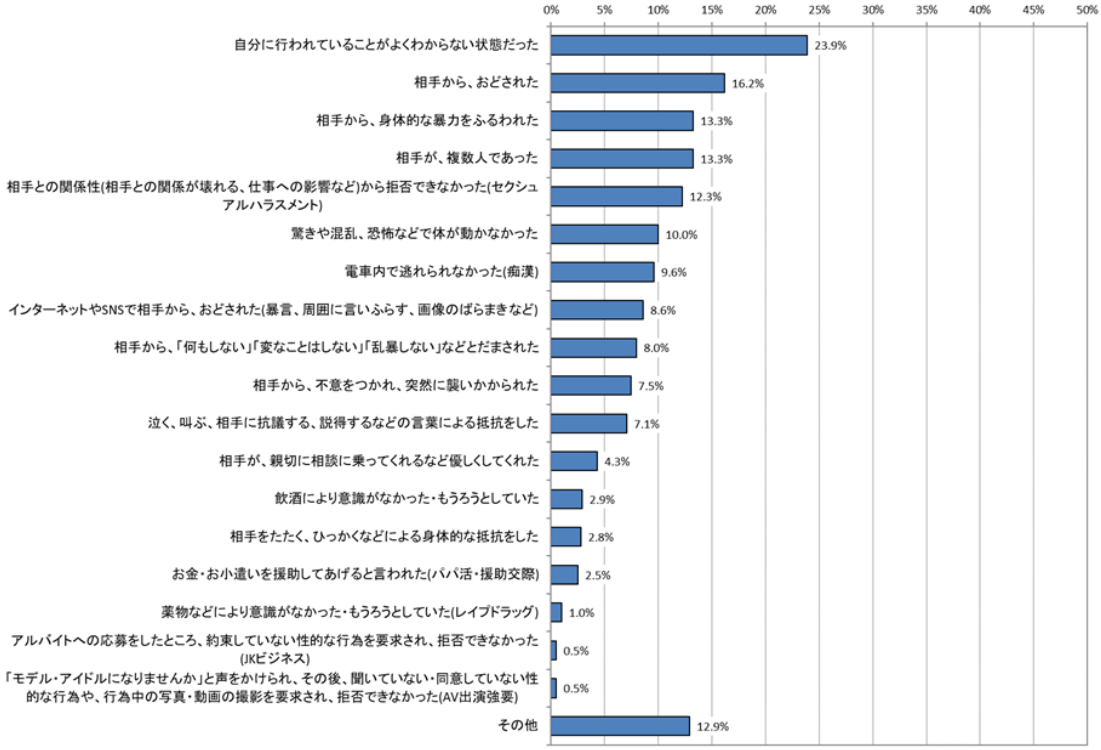


C.【言葉による性暴力被害】性暴力被害の状況について

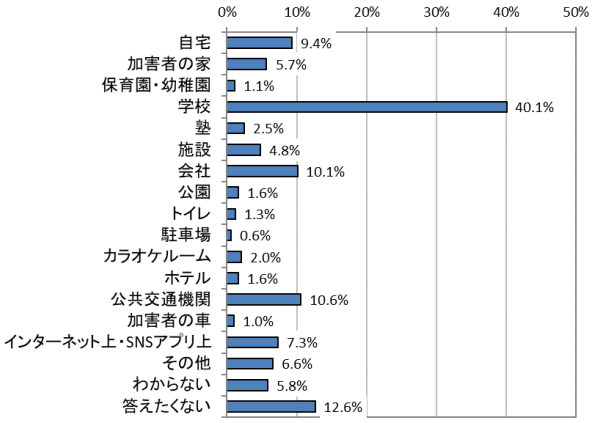
被害場所は、学校（40.1%）が多く、公共交通機関（10.6%）、会社（10.1%）等が続く（下図左下）。被害は 1 回限り（56.3%）が多いが、継続被害（41.4%、1 週間未満～現在も継続中の和）も比較的多くなっている（下図右下）。性暴力被害時の状況として、「自分に行われていることがよくわからない状態だった」（23.9%）、「相手から、おどされた」（16.2%）、「相手から、身体的な暴力をふるわれた」（13.3%）、「相手が、複数人であった」（13.3%）、その他（言葉による性暴力をうけた等。12.9%）等が多くなっている（下図上）。

図表 ２-４１ 【言葉による性暴力被害】性暴力被害の状況について（n＝791）

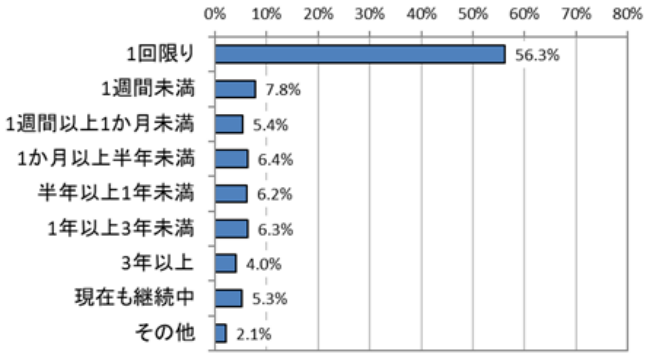
＜被害にあったときの状況（複数回答）＞



＜被害にあった場所（複数回答）＞



＜被害の継続期間＞



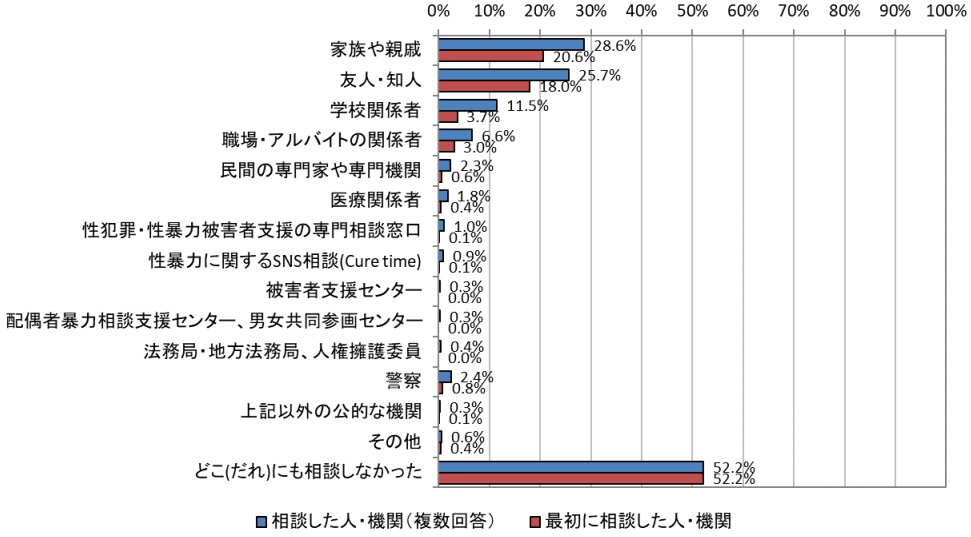
D.【言葉による性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこ（だれ）にも相談をしなかったケースは半数超（52.2%）（下図上）。その理由として、「相談するほどのことではないと思ったから」（35.6%）、「相談してもむだだと思ったから」（29.3%）、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」（28.3%）等が多く挙げられた（下図下）。相談に至る場合、被害から 3 日以内の相談が 62.9%となっており（下図左中）、相談した人は家族や親戚（28.6%）、友人・知人（25.7%）が多くなっている（下

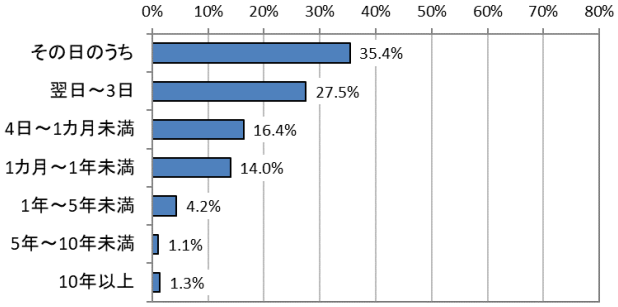
図上)。また、最初に相談した人は、話を聞く（58.2%）、慰め・励ます（38.6%）等の行動をとっている（下図右中)。

図表 ２-４２ 【言葉による性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

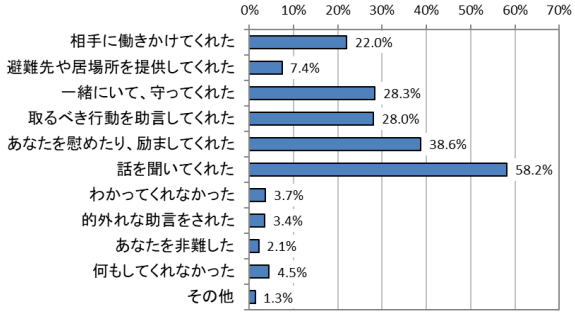
＜相談した人・機関（複数回答、n=791）、最初に相談した人・機関（n=791）＞



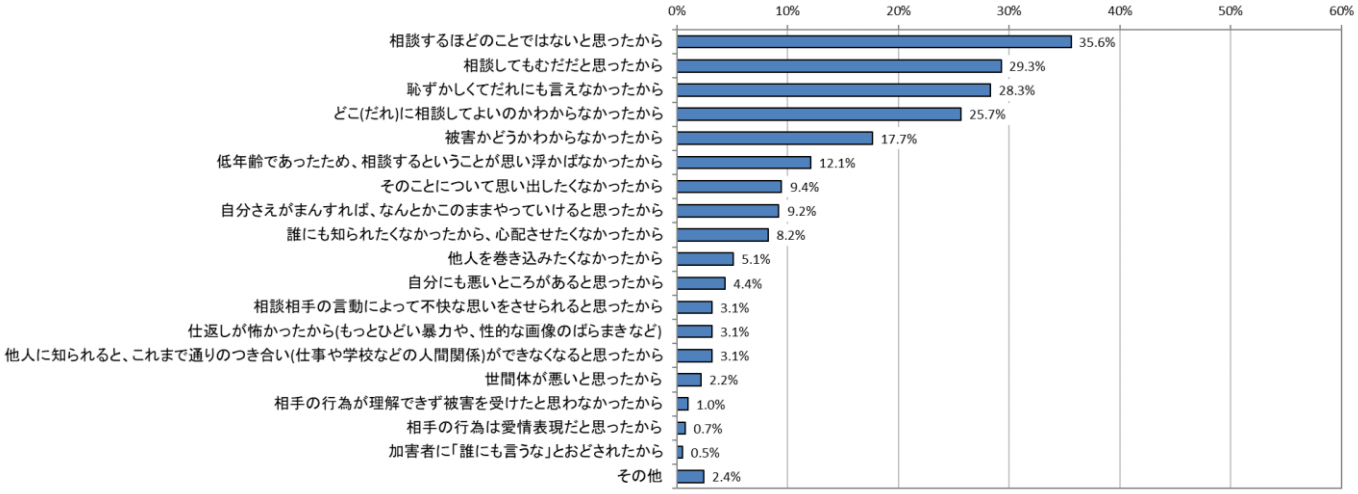
＜相談までに要した期間（n＝378）＞



＜最初に相談した相手がとった言動（n＝378）＞



＜相談しなかった理由（複数回答、n=413）＞

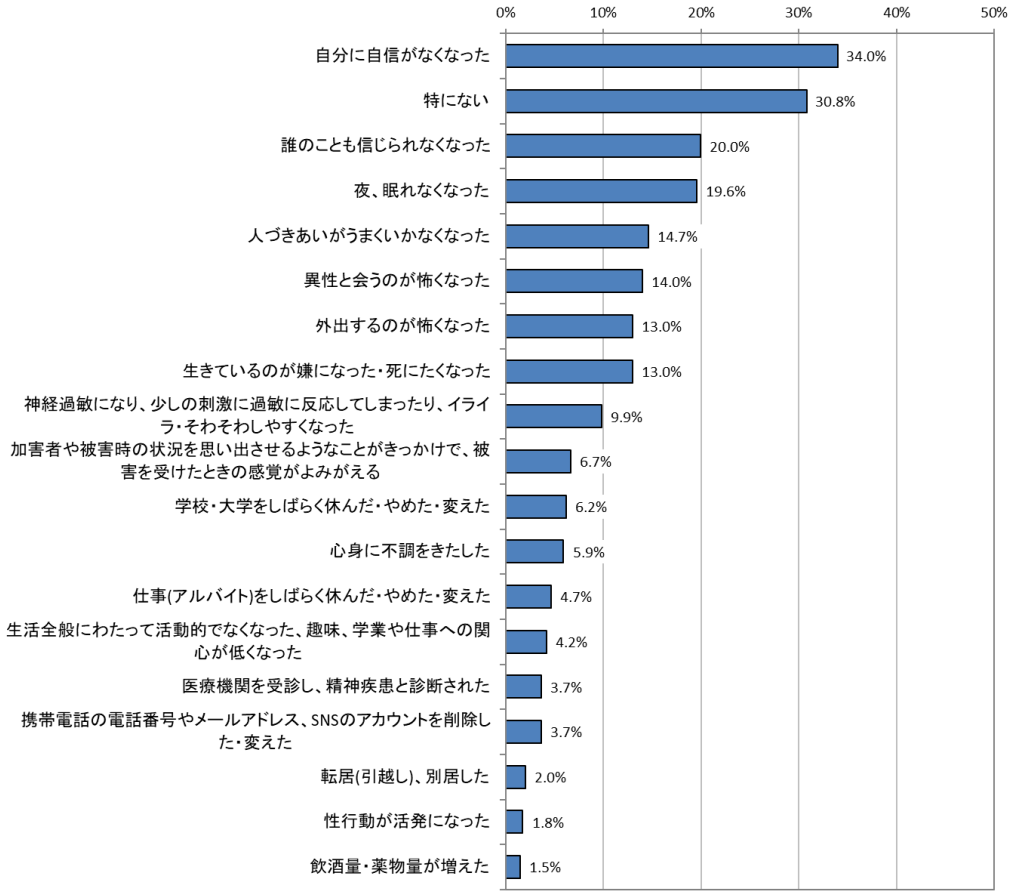


E.【言葉による性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

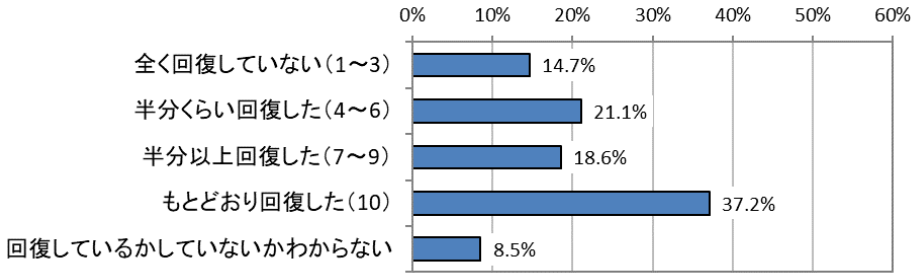
性暴力被害による生活の変化としては、「自分に自信がなくなった」(34.0%)、「特にない」(30.8%)、「誰のことも信じられなくなった」(20.0%)、「夜、眠れなくなった」(19.6%) 等がみられる（下図上)。性暴力被害からの回復状況は、「もとどおり回復した」は 37.2%となっている（下図下)。

図表 2-43 【言葉による性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について（n=791）

＜被害による生活の変化(複数回答)＞



＜被害からの回復状況＞



②視覚による性暴力被害

最も深刻な／深刻だった性暴力被害として、視覚による性暴力被害を挙げた 173 人（有効回答数）の回答結果を基に、視覚による性暴力被害の特徴をみる。

【ポイント】視覚による性暴力被害の状況

○被害者について

小学生～高校生の時に初めて視覚による性暴力に遭遇した人が多い。

○加害者について

知らない人が加害者であることが多い。異性及び社会的地位が同等または下位の者による加害が多い。加害者の社会的地位がわからないとする回答も比較的多い。

○性暴力被害の状況について

被害場所は路上、公共交通機関、学校等が多く、1 回限りの被害が多くなっている。性暴力被害にあった際の状況として、自分に行われていることがよくわからなかった、驚き・恐怖等で体が動かなかった、突然に襲いかかられた、電車内で逃げられなかった等との回答が多い。

○性暴力被害の相談状況について

どこにも相談しなかったケースは他の性暴力被害分類と比してやや少ない。相談した人は家族・親戚、友人・知人の順で多く、比較的短期間で相談に至ったケースが多い。一方、相談できなかった理由としては、恥ずかしくて言えなかったが多くなっている。

○性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

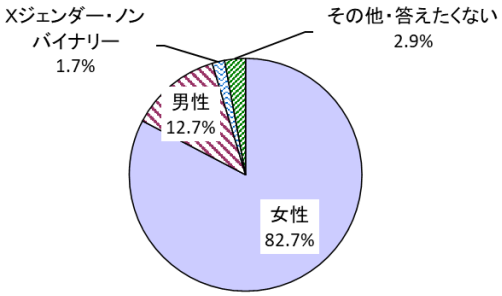
性暴力被害による生活の変化は特になしとの回答、性暴力被害から回復したとの回答が、他の性暴力被害分類と比しても多い。

A.【視覚による性暴力被害】被害者について

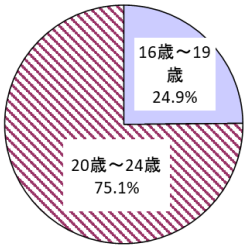
女性の被害者が 82.7%と多く、次いで男性が 12.7%となっている（下図左上）。年齢層は 20～24 歳が 75.1%と高く（下図右上）、所属・職業は大学生（30.6%）、勤め人（常勤、22.5%）の順で多い（下図中）。視覚による性暴力の他に、言葉による性暴力（35.8%）、情報ツールを用いた性暴力（22.0%）等にあっている人が多い（下図左下）。13～15 歳の時に初めて視覚による性暴力被害にあった人が 28.9%と最も多く、次いで 16～18 歳（27.2%）、7～12 歳（19.1%）と、小学生～高校生の時に初めてあった人が多い（下図右下）。

図表 ２-４４ 【視覚による性暴力被害】被害者について （n＝173）

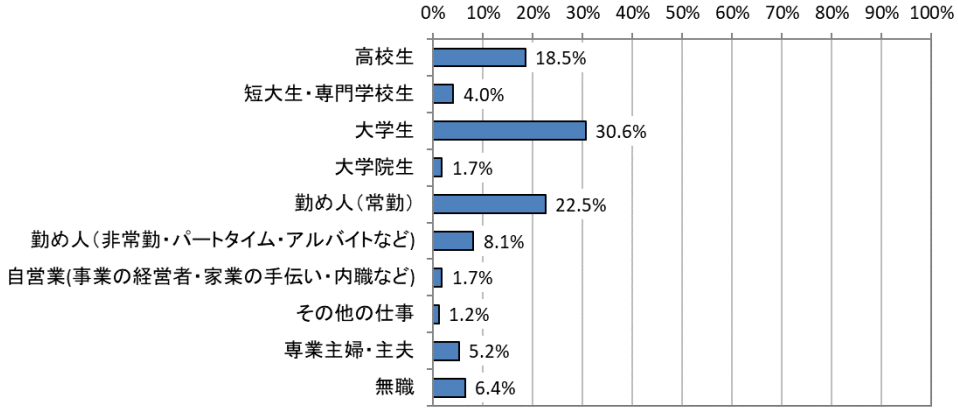
＜性自認＞



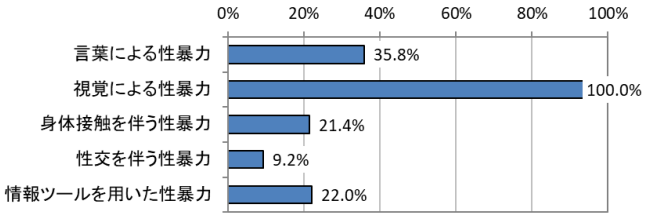
＜年齢層＞



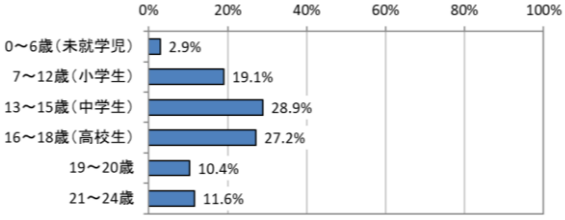
＜所属・職業＞



＜性暴力被害の遭遇の有無（複数回答）＞



＜視覚による性暴力被害に最初にあった年齢＞

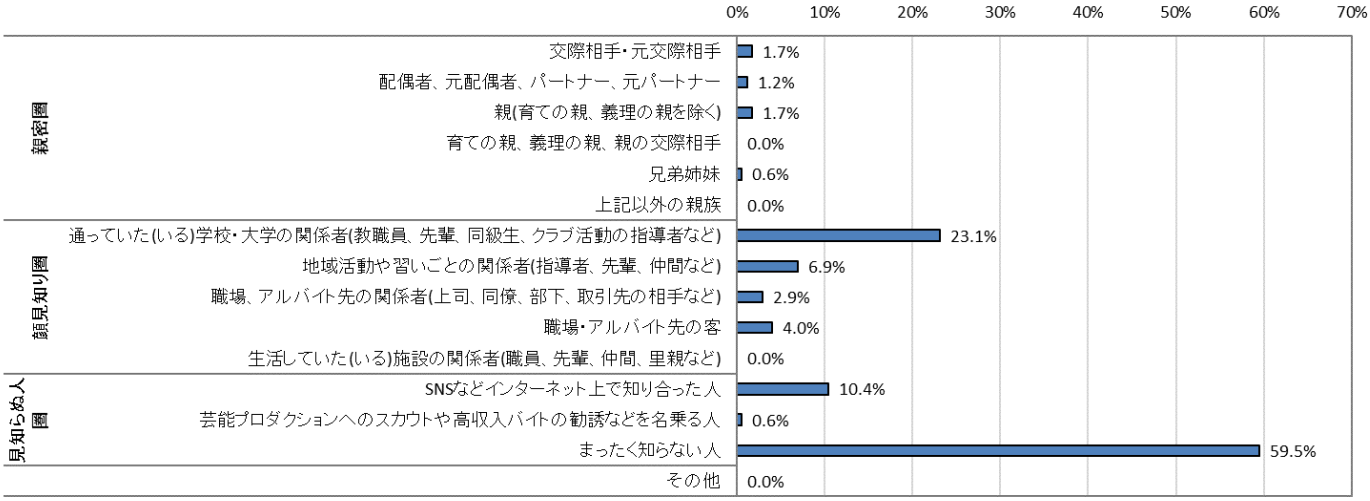


B.【視覚による性暴力被害】加害者について

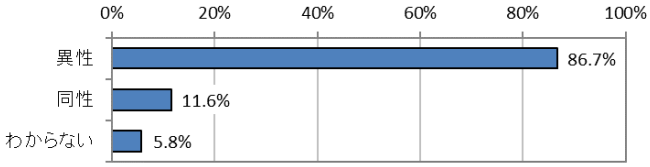
加害者としては、まったく知らない人（59.5%）が顕著に多く、学校の関係者（23.1%）、SNS 等インターネットで知り合った人（10.4%）等がこれに次ぐ（下図上）。異性による加害が 86.7%と多くなっている（下図左下）。加害者の社会的・職務上の地位等は同等または下位が 43.7%で最多だが、他の被害分類と比してわからない（25.4%）とする回答も多い（下図右下）。

図表 2-45 【視覚による性暴力被害】加害者について

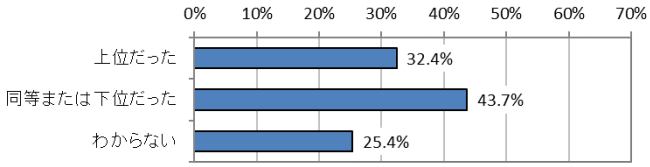
＜加害者との関係（複数回答、n＝173）＞



＜加害者の性別（複数回答、n＝173）＞



＜加害者の社会的・職務上の地位等（複数回答、n＝71）＞

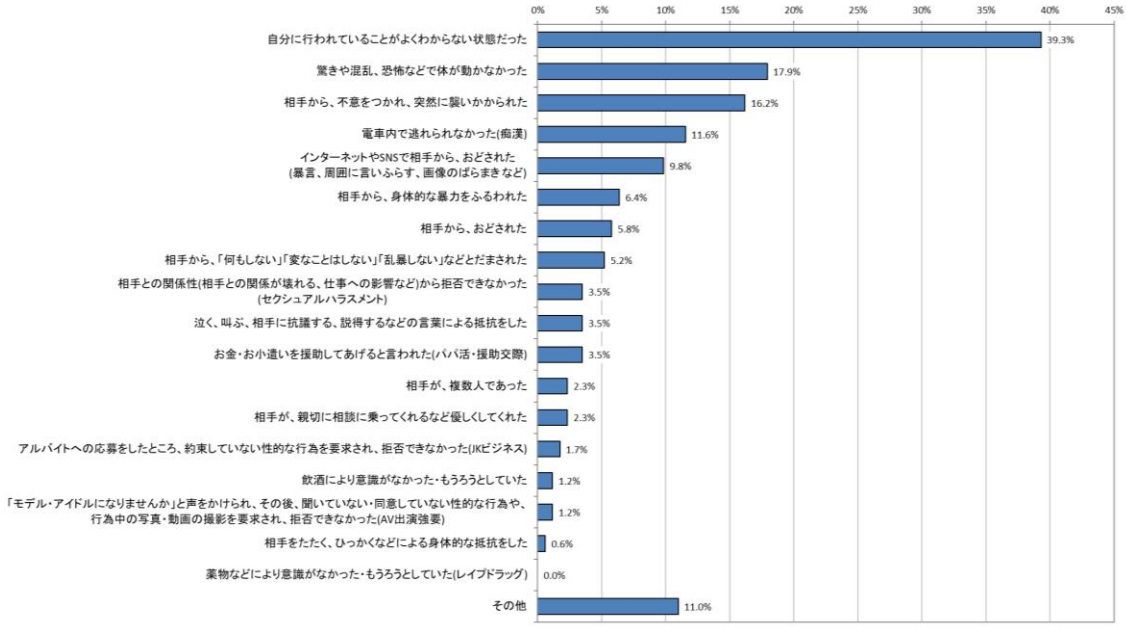


C.【視覚による性暴力被害】性暴力被害の状況について

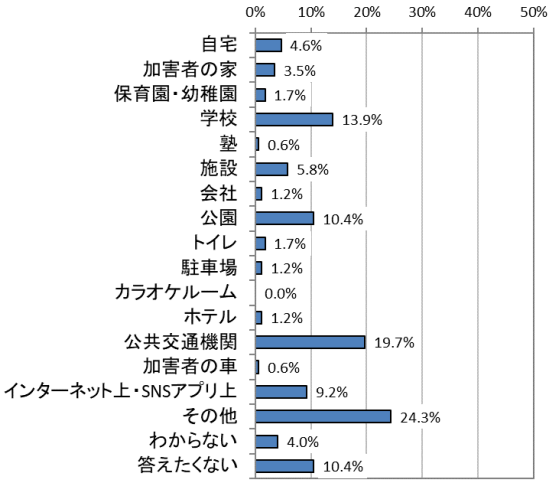
被害場所は、その他（24.3%。「通学路」、「道路」、「駐輪場」等の回答がみられる）が多く、公共交通機関（19.7%）、学校（13.9%）等が続く（下図左下）。被害は 1 回限り（70.5%）が多い（下図右下）。性暴力被害時の状況として、「自分に行われていることがよくわからなかった」（39.3%）が顕著に多く、「驚きや混乱、恐怖などで体が動かなかった」（17.9%）、「相手から、不意をつかれ、突然に襲いかかられた」（16.2%）、「電車内で逃げられなかった（痴漢）」（11.6%）等も多くなっている（下図上）。

図表 ２-４６ 【視覚による性暴力被害】性暴力被害の状況について（n＝173）

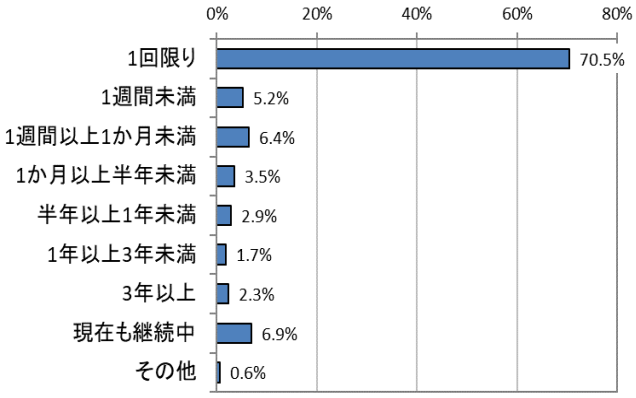
＜被害にあったときの状況（複数回答）＞



＜被害にあった場所（複数回答）＞



＜被害の継続期間＞



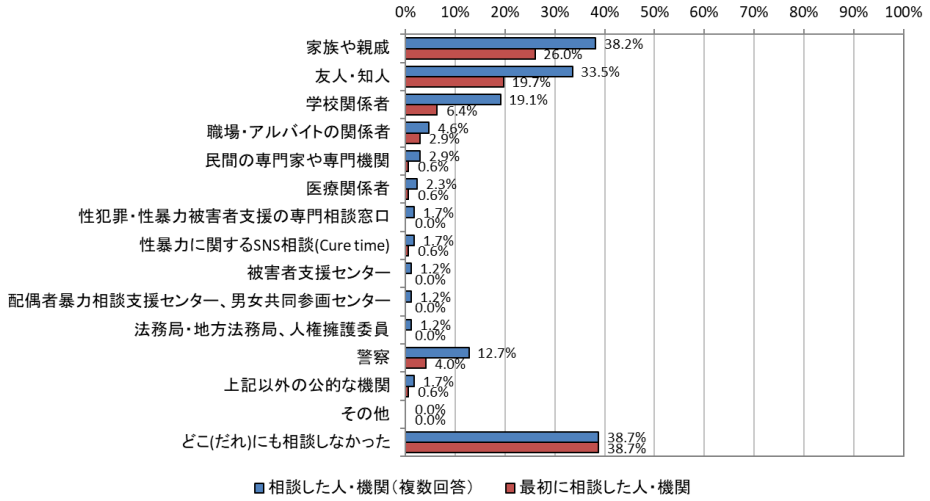
D.【視覚による性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこ（だれ）にも相談をしなかったケースは 38.7%と、他の性暴力被害分類と比してやや少ない（下図上）。相談できなかった理由としては、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」（47.8%）が顕著に多く、「どこ（だれ）に相談してよいのかわからなかったから」（28.4%）、「相談するほどのことではないと思ったから」（28.4%）等が多く挙げられた。また、他の性暴力被害分類と比して、「誰にも知られたくなかったから、心配させたくなかったから」もやや多くなっている（下図下）。相談に至る場合、被害から 3 日以内の

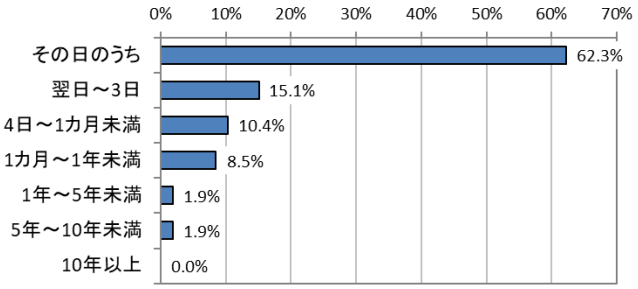
相談が 77.4%と他の性暴力被害分類と比して多く（下図左中）、相談した人は家族・親戚（38.2%）、友人・知人（33.5%）の順で多くなっている（下図上）。また、最初に相談した人は、話を聞く（51.9%）、慰め・励ます（32.1%）等の行動をとっている（下図右中）。

図表 2-47 【視覚による性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

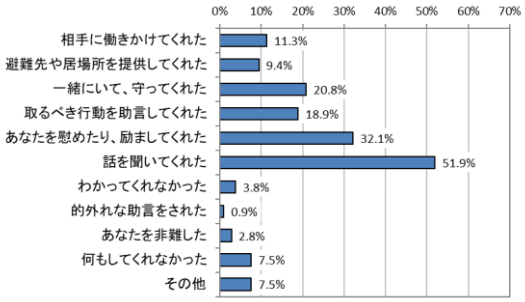
＜相談した人・機関（複数回答、n=173）、最初に相談した人・機関（n=173）＞



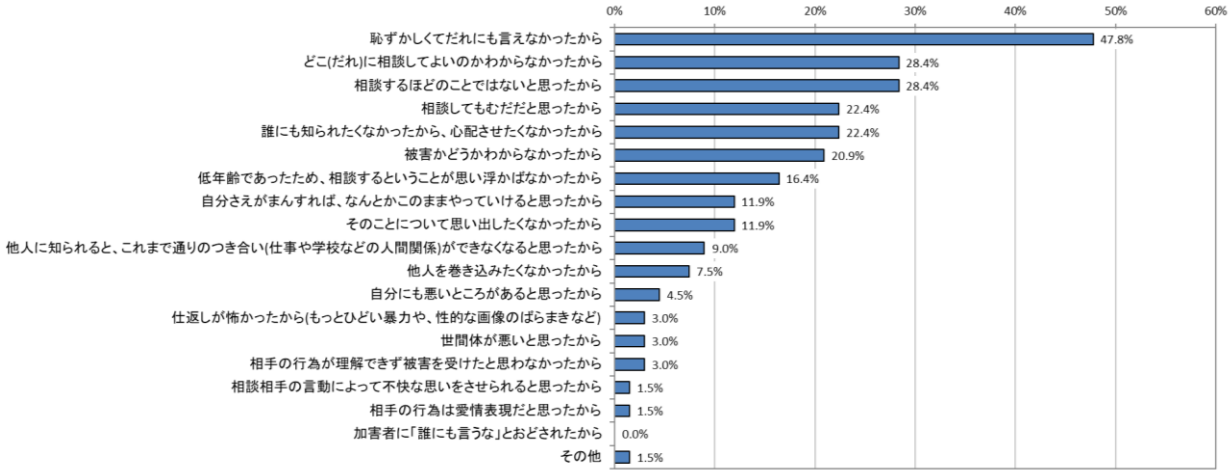
＜相談までに要した期間（n＝106）＞



＜最初に相談した相手がとった言動（n＝106）＞



＜相談しなかった理由（複数回答、n=67）＞

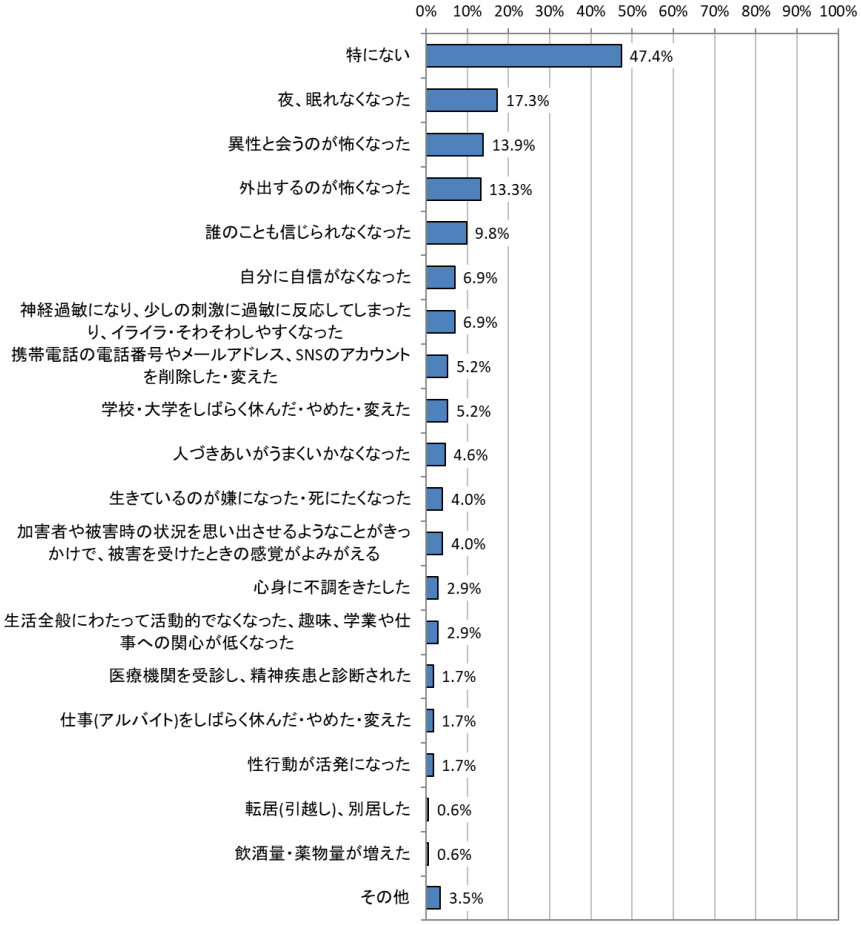


E.【視覚による性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

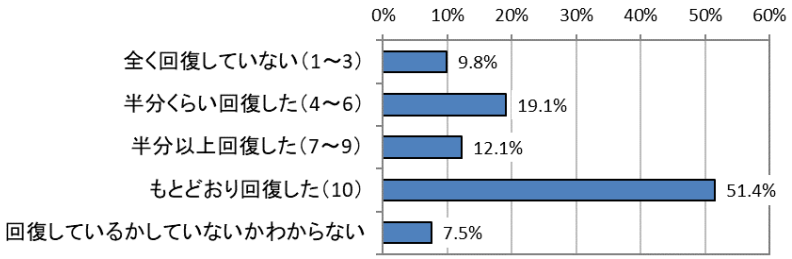
性暴力被害による生活の変化としては、「特にない」が 47.4%と他の性暴力被害分類と比しても多く、次いで、「夜、眠れなくなった」(17.3%)、「異性と会うのが怖くなった」(13.9%)、「外出するのが怖くなった」(13.3%) 等となっている (下図上)。性暴力被害からの回復状況は、「もとどおり回復した」が 51.4%になっており、他の性暴力被害分類と比してやや高い (下図下)。

図表 2-48 【視覚による性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について (n=173)

＜被害による生活の変化(複数回答)＞



＜被害からの回復状況＞



③身体接触を伴う性暴力被害

最も深刻な／深刻だった性暴力被害として、身体接触を伴う性暴力被害を挙げた 576 人（有効回答数）の回答結果を基に、身体接触を伴う性暴力被害の特徴をみる。

【ポイント】身体接触を伴う性暴力被害の状況

○被害者について

女性の被害者が多く、中学生、高校生の時に初めて身体接触を伴う性暴力被害にあった人が多い。

○加害者について

知らない人や学校の関係者が加害者であることが多く、異性及び社会的地位が上位の者による加害が多い。

○性暴力被害の状況について

公共交通機関、路上、学校等で被害にあうケースが多く、1 回限りの被害が多い。性暴力被害にあった際の状況として、突然に襲いかかられた、自分に行われていることがよくわからなかった、驚き・恐怖等で体が動かなかった、電車内で逃げられなかった等との回答が多い。

○性暴力被害の相談状況について

どこにも相談しなかったケースは他の性暴力被害分類と比してやや少ない。相談した人は友人・知人、家族・親戚の順で多く、比較的短期間で相談に至ったケースが多い。一方、相談できなかった理由としては、恥ずかしくて言えなかったが多くなっている。

○性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

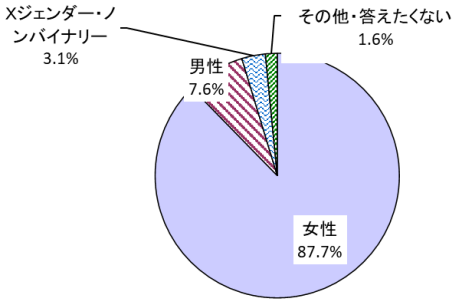
性暴力被害による生活の変化は特になしとの回答も多いが、異性と会うのが怖くなった、外出するのが怖くなった、被害を受けたときの感覚がよみがえる等との回答も多い。

A.【身体接触を伴う性暴力被害】被害者について

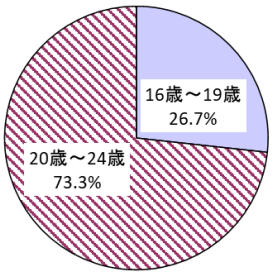
女性の被害者が 87.7%と多く、次いで男性が 7.6%となっている（下図左上）。年齢層は 20～24 歳が 73.3%と高く（下図右上）、所属・職業は大学生（27.8%）、勤め人（常勤、23.1%）の順で多い（下図中）。身体接触を伴う性暴力の他に、言葉による性暴力（48.8%）、情報ツールを用いた性暴力（27.4%）等にあっている人が多い（下図左下）。16～18 歳の時に初めて身体接触を伴う性暴力被害にあった人が 35.9%と最も多く、次いで 13～15 歳（20.3%）、19～20 歳（15.8%）と、中学生、高校生の時に初めてあった人が多い（下図右下）。

図表 ２-４９ 【身体接触を伴う性暴力被害】被害者について（n＝576）

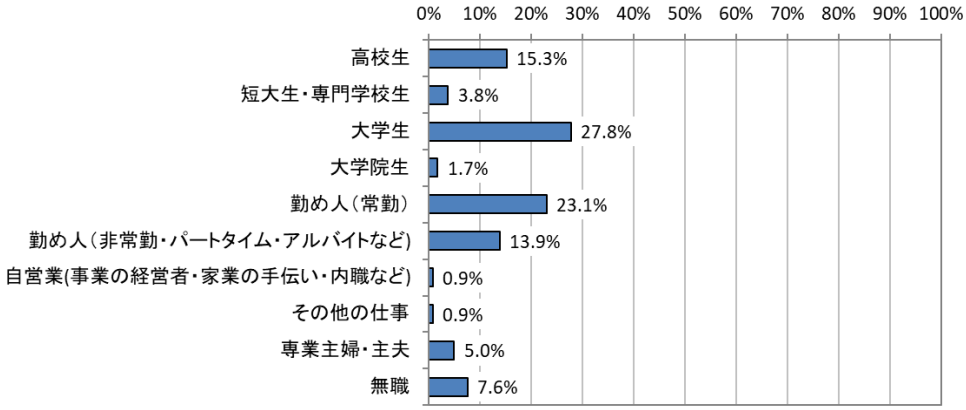
＜性自認＞



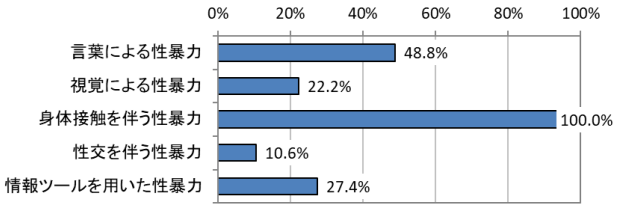
＜年齢層＞



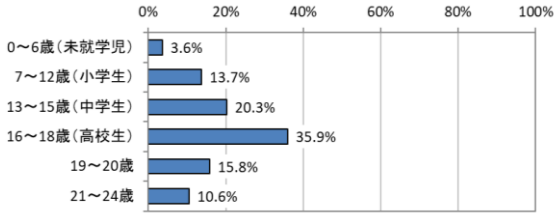
＜所属・職業＞



＜性暴力被害の遭遇の有無（複数回答）＞



＜身体接触を伴う性暴力被害に最初にあった年齢＞

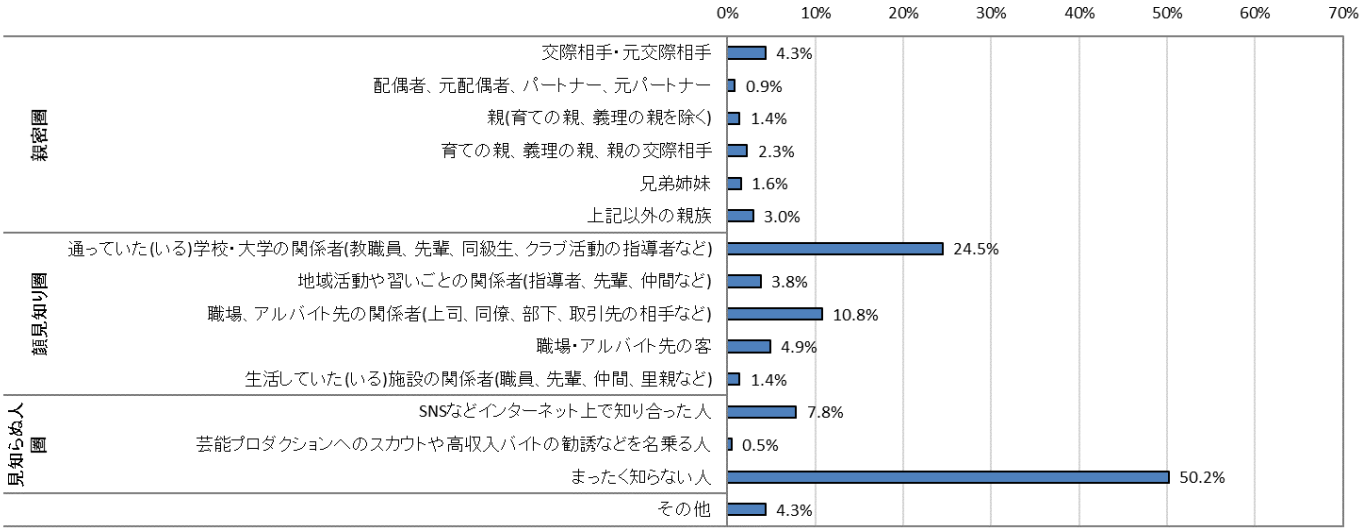


B.【身体接触を伴う性暴力被害】加害者について

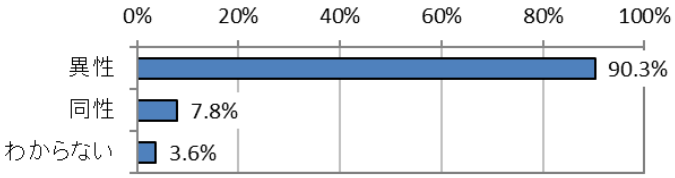
加害者としては、まったく知らない人（50.2%）が多く、学校・大学の関係者（24.5%）、職場・アルバイト先の関係者（10.8%）等がこれに次ぐ（下図上）。異性による加害が 90.3%と多い（下図左下）。加害者の社会的・職務上の地位等を上位の者とする回答が 59.1%と、他の性暴力被害分類と比して多くなっている（下図右下）。

図表　２-５０　【身体接触を伴う性暴力被害】加害者について

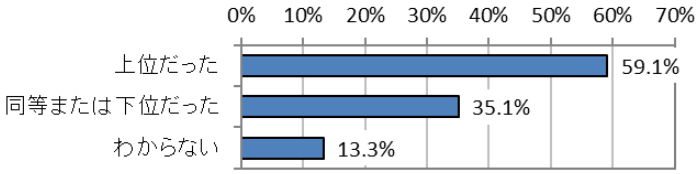
＜加害者との関係（複数回答、n＝576）＞



＜加害者の性別（複数回答、n＝576）＞



＜加害者の社会的・職務上の地位等（複数回答、n＝279）＞

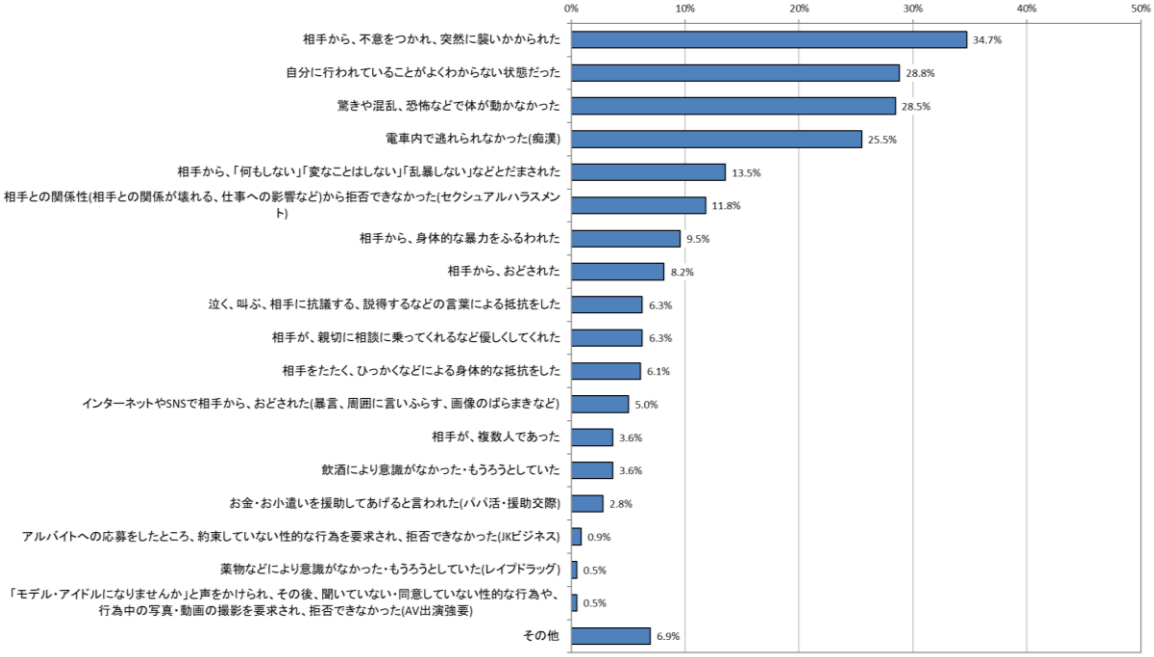


C.【身体接触を伴う性暴力被害】性暴力被害の状況について

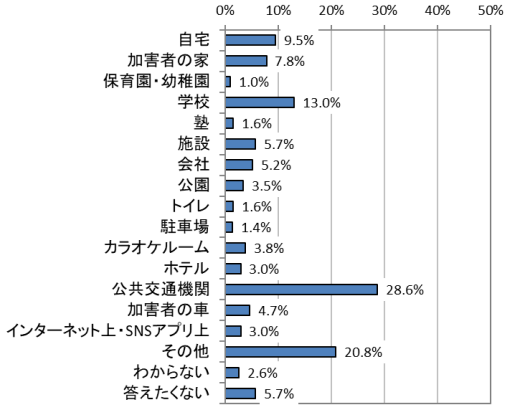
被害場所は、公共交通機関（28.6%）、その他（20.8%。路上、通学路、自宅近く等の回答がみられる）が多く、学校（13.0%）、自宅（9.5%）等が続く（下図左下）。被害は 1 回限り（67.7%）が多くなっている（下図右下）。性暴力被害時の状況として、「相手から、不意をつかれ、突然に襲いかかられた」（34.7%）、「自分に行われていることがよくわからない状態だった」（28.8%）、「驚きや混乱、恐怖などで体が動かなかった」（28.5%）、「電車内で逃げられなかった（痴漢）」（25.5%）等が多くなっている（下図上）。

図表 ２-５１ 【身体接触を伴う性暴力被害】性暴力被害の状況について（n＝576）

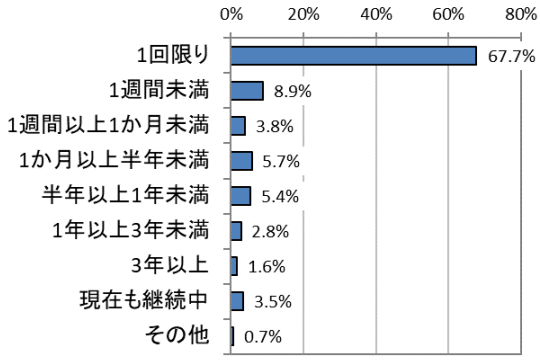
＜被害にあったときの状況（複数回答）＞



＜被害にあった場所（複数回答）＞



＜被害の継続期間＞



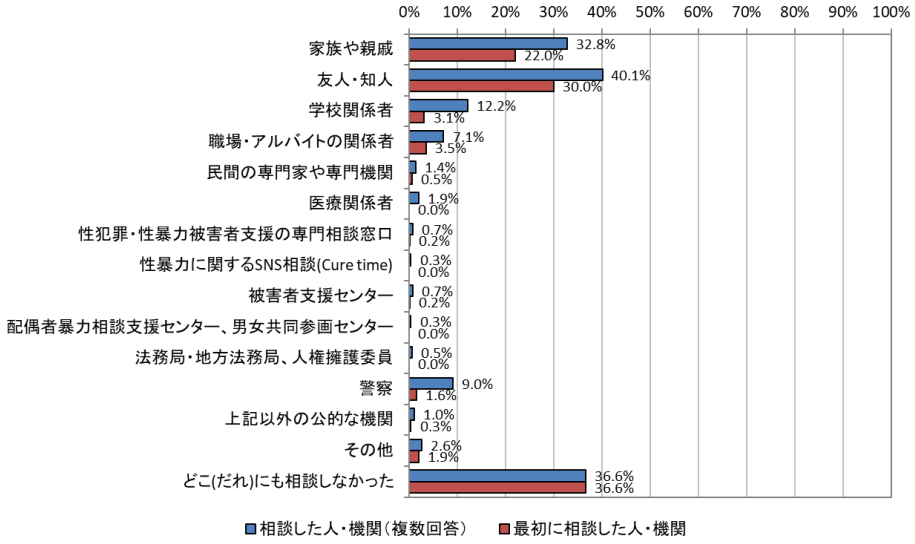
D.【身体接触を伴う性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこ（だれ）にも相談をしなかったケースは 36.6%と、他の性暴力被害分類と比してやや少ない（下図上）。相談できなかった理由としては、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」（38.9%）、「相談してもむだだと思ったから」（36.5%）、「相談するほどのことではないと思ったから」（32.7%）等が多い。また、他の性暴力被害分類と比して、「そのことについて思い出したくなかったから」、「誰にも知られたくなかったから、心配させたくなかったから」もやや多くなっている（下図下）。相談に至る場合、被害日から 3 日以内の相談が 72.6%と他の性暴力被害分類と比して多く（下図左中）、相談した人は友人・知人（40.1%）、家族・親戚（32.8%）が多くなっている（下図上）。また、最初に相談した人は、

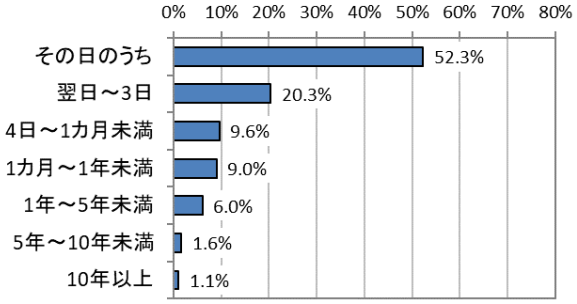
話を聞く（66.6%）、慰め・励ます（42.2%）等の行動をとっている（下図右中）。

図表 2-52 【身体接触を伴う性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

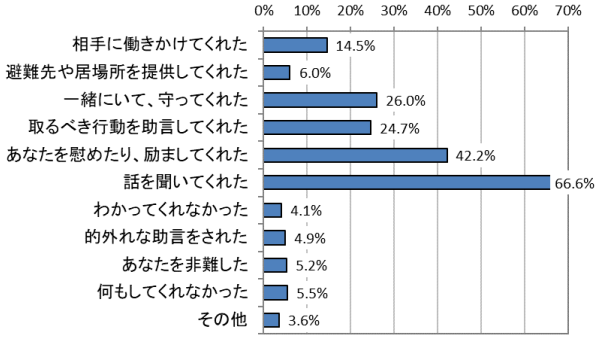
＜相談した人・機関（複数回答、n=576）、最初に相談した人・機関（n=576）＞



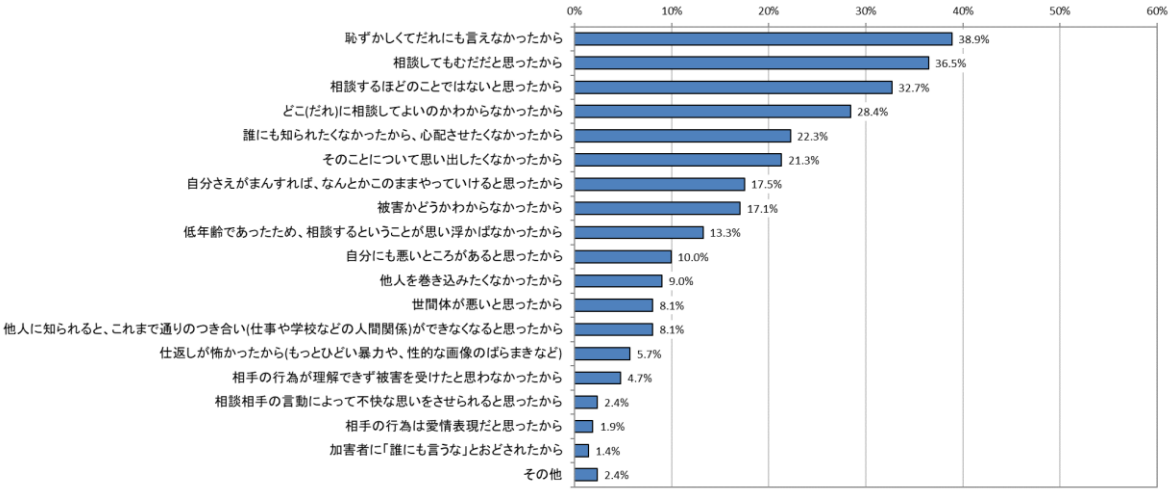
＜相談までに要した期間（n＝365）＞



＜最初に相談した相手がとった言動（n＝365）＞



＜相談しなかった理由（複数回答、n=211）＞

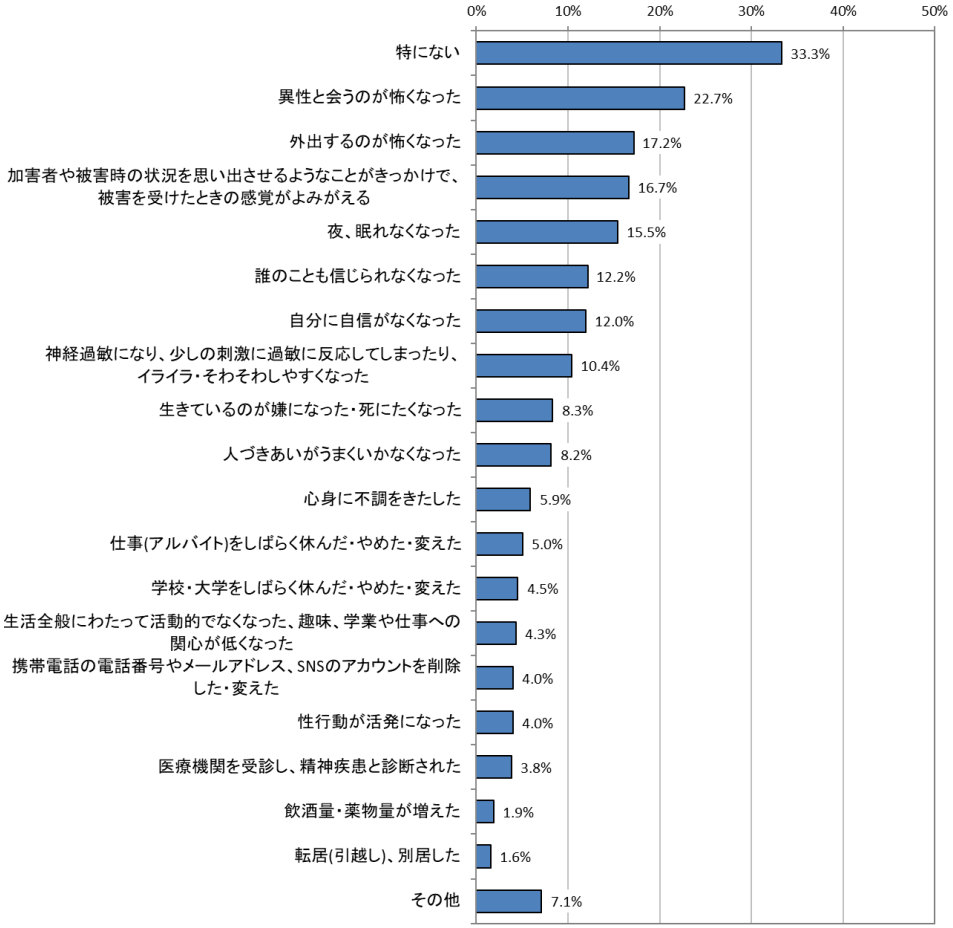


E.【身体接触を伴う性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

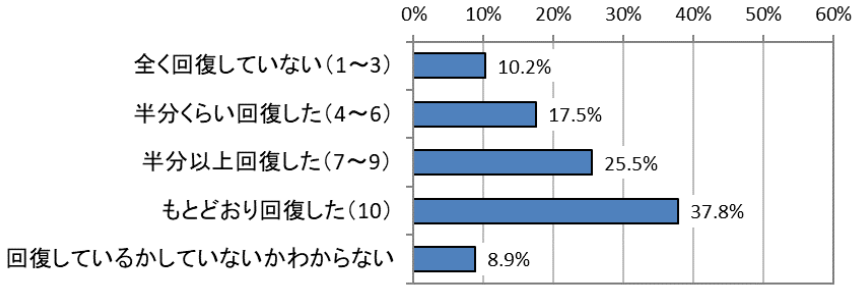
性暴力被害による生活の変化としては、「特にない」が 33.3%と最も多く、次いで、「異性と会うのが怖くなった」（22.7%）、「外出するのが怖くなった」（17.2%）、「被害を受けたときの感覚がよみがえる」（16.7%）等となっている（下図上）。性暴力被害からの回復状況は、「もとどおり回復した」が 37.8%、「半分以上回復した」が 25.5%となっている（下図下）。

図表 ２-５３ 【身体接触を伴う性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について（n＝576）

＜被害による生活の変化（複数回答）＞



＜被害からの回復状況＞



④性交を伴う性暴力被害

最も深刻な／深刻だった性暴力被害として、性交を伴う性暴力被害を挙げた 167 人（有効回答数）の回答結果を基に、性交を伴う性暴力被害の特徴をみる。

【ポイント】性交を伴う性暴力被害の状況

○被害者について

女性の被害者が多い。性交を伴う性暴力以外の性暴力にも高い割合で遭遇している。

○加害者について

加害者として、学校の関係者、(元)交際相手、インターネット上で知り合った人、知らない人等を挙げるケースが多い。他の被害分類と比して異性及び社会的立場が上位の者による加害が多い。

○性暴力被害の状況について

加害者の家、自宅、ホテル等での被害が多く、他の性暴力被害分類と比較すると被害が継続する率が高い。性暴力被害時の状況として、突然に襲いかかられた、相手から「何もしない」等とだまされた、驚き・恐怖等で体が動かなかった、自分に行われていることがよくわからなかった、相手との関係性から拒否できなかった等、多様な回答がみられる。

○性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこにも相談をしなかったケースが半数を超え、相談できたケースにおいても相談までに時間を要することが多い。相談できなかった理由としては、恥ずかしくて言えなかった、誰にも知られたくなかった・心配させたくなかった、相談してもむだ等をはじめ、多様な理由が挙げられた。

○性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

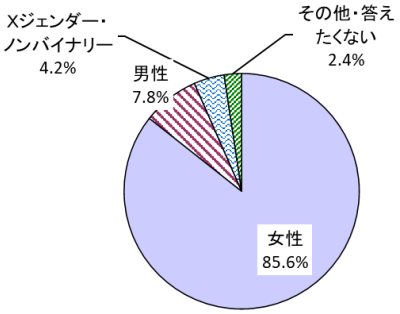
性暴力被害により、異性と会うのが怖くなった、誰のことも信じられなくなった、眠れなくなった、自信がなくなった、生きているのが嫌になった、外出するのが嫌になった等を訴える被害者が多く、全ての性暴力被害分類の中で最も性暴力被害からの回復状況が芳しくない。

A.【性交を伴う性暴力被害】被害者について

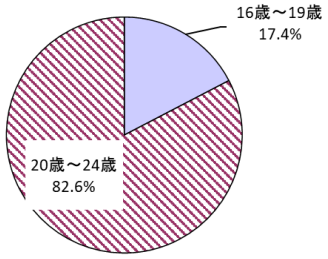
女性の被害者が 85.6%と多く、次いで男性が 7.8%となっている（下図左上）。年齢層は 20～24 歳が 82.6%と高く（下図右上）、所属・職業は大学生（26.9%）、勤め人（常勤、22.8%）の順で多い（下図中）。性交を伴う性暴力の他に、身体接触を伴う性暴力（74.3%）、言葉による性暴力（62.3%）、視覚による性暴力（49.7%）、情報ツールを用いた性暴力（43.1%）に高い割合で遭遇している（下図左下）。16～18 歳の時に初めて性交を伴う性暴力被害にあった人が 38.9%と最も多く、次いで 19～20 歳（24.6%）となっている（下図右下）。

図表 2-５４ 【性交を伴う性暴力被害】被害者について （n＝167）

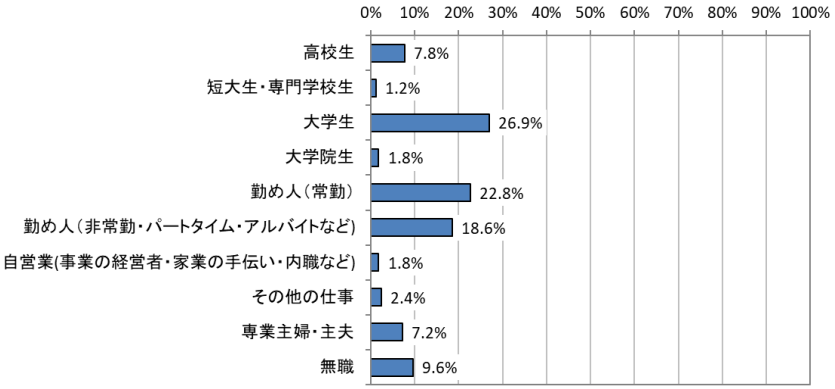
＜性自認＞



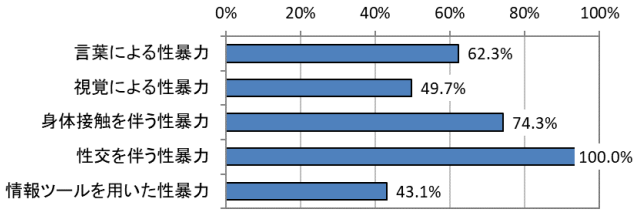
＜年齢層＞



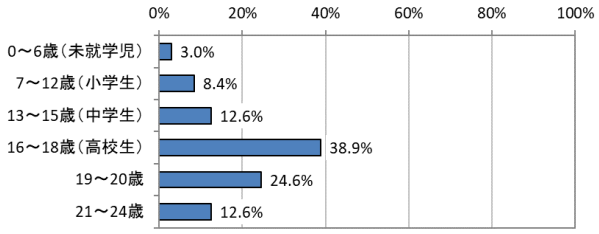
＜所属・職業＞



＜性暴力被害の遭遇の有無（複数回答＞



＜性交を伴う性暴力被害に最初にあった年齢＞

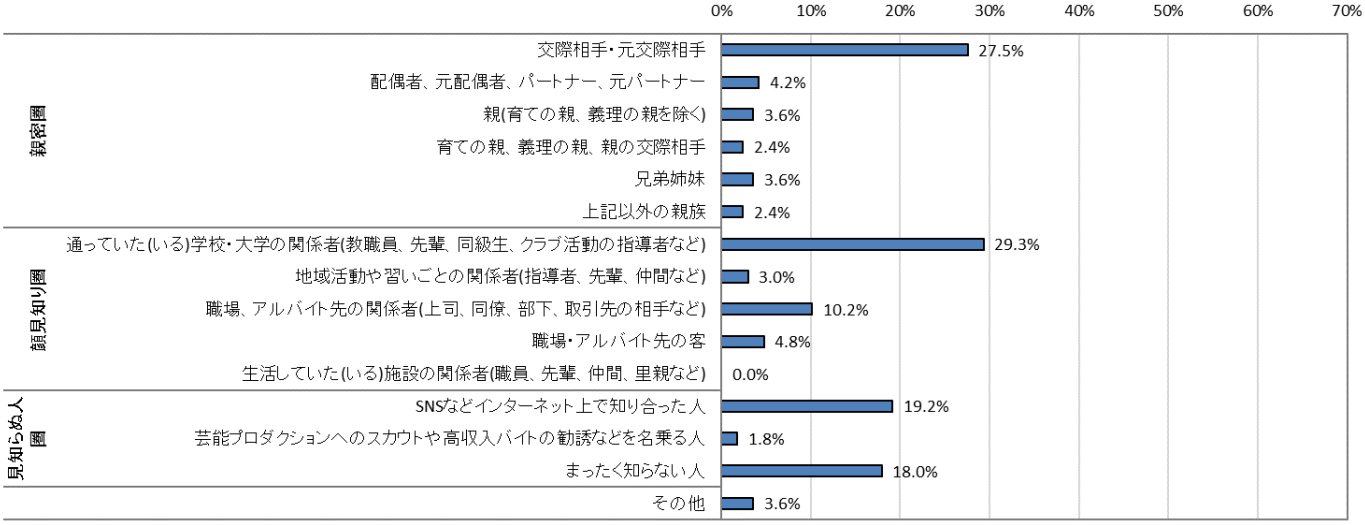


B.【性交を伴う性暴力被害】加害者について

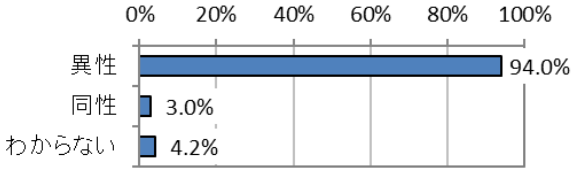
加害者としては、学校・大学の関係者（29.3%）、(元)交際相手（27.5%）が多く、SNS などインターネット上で知り合った人（19.2%）、まったく知らない人（18.0%）等がこれに次ぐ（下図上）。異性による加害が 94.0%と多い（下図左下）。加害者の社会的・職務上の地位等は上位が 51.5%と多くなっている（下図右下）。

図表 2-55 【性交を伴う性暴力被害】加害者について

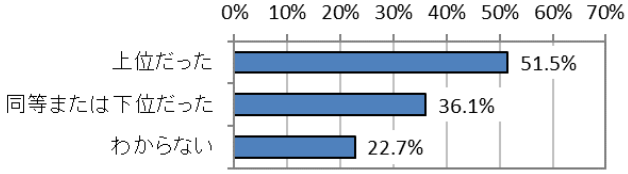
＜加害者との関係（複数回答、n＝167）＞



＜加害者の性別（複数回答、n＝167）＞



＜加害者の社会的・職務上の地位等（複数回答、n＝97）＞

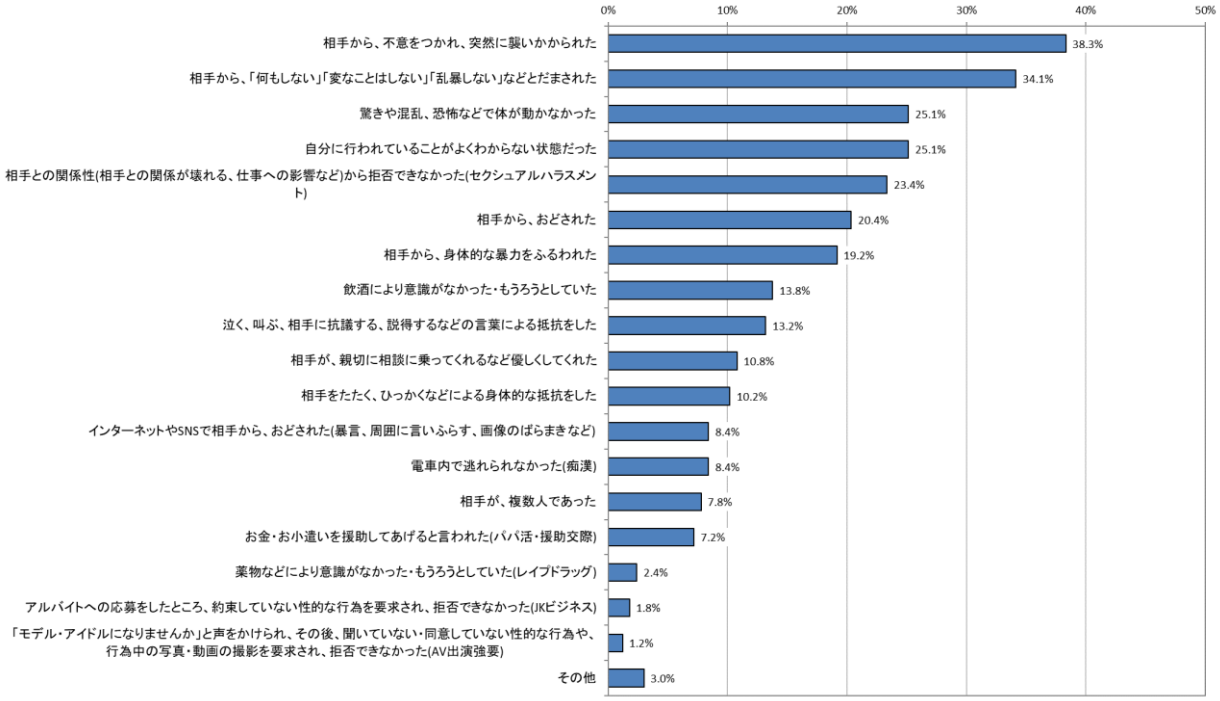


C.【性交を伴う性暴力被害】性暴力被害の状況について

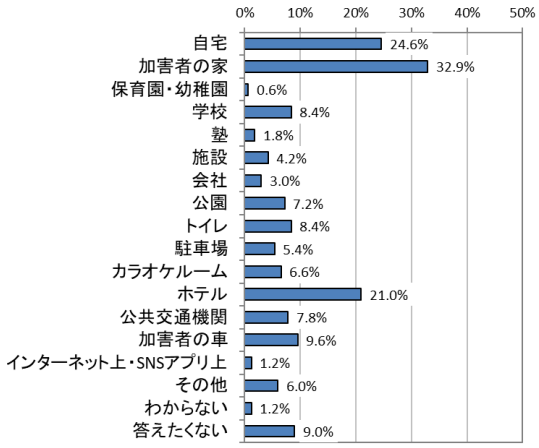
被害場所は、加害者の家（32.9%）、自宅（24.6%）、ホテル（21.0%）等が多くなっている（下図左下）。他の性暴力被害分類と比較すると継続被害（54.0%、1 週間未満～現在も継続中の和）の比率が多く、1 回限り（43.1%）を上回っている（下図右下）。性暴力被害時の状況として、「相手から、不意をつかれ、突然に襲いかかられた」（38.3%）、「相手から、『何もしない』『乱暴しない』などとだまされた」（34.1%）、「驚きや混乱、恐怖などで体が動かなかった」（25.1%）、「自分に行われていることがよくわからない状態だった」（25.1%）、「相手との関係性から拒否できなかった」（23.4%）等との回答が多い。また、他の性暴力被害分類と比して、身体的暴力をふるわれた、おどされた、飲酒により意識がもうろうとしていた、身体的な抵抗をした、言葉による抵抗をした、相手がやさしくしてくれたとの回答もやや多くなっている（下図上）。

図表 2-56 【性交を伴う性暴力被害】性暴力被害の状況について（n＝167）

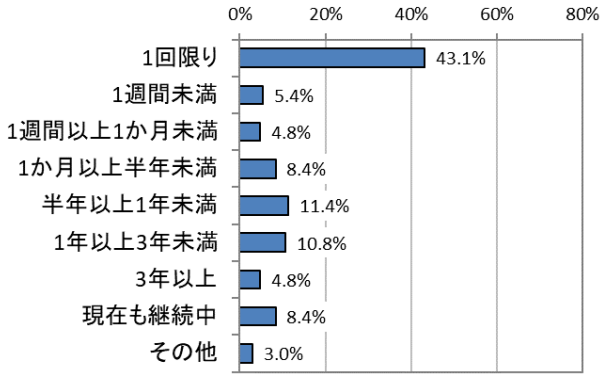
＜被害にあったときの状況（複数回答）＞



＜被害にあった場所（複数回答）＞



＜被害の継続期間＞



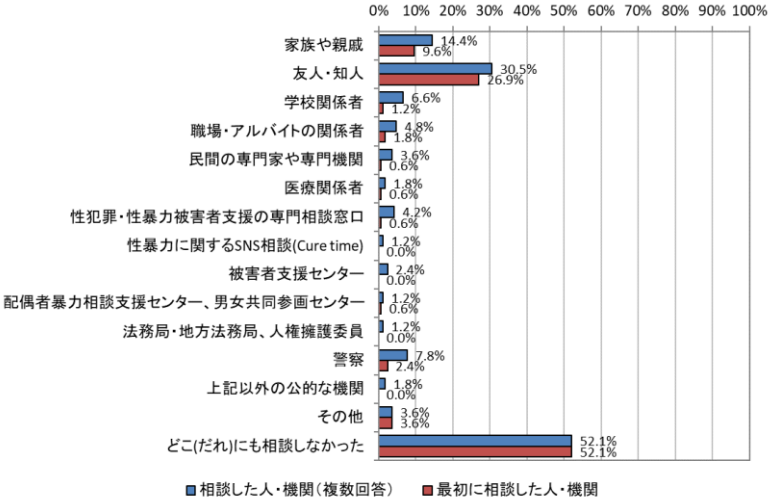
D.【性交を伴う性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこ（だれ）にも相談をしなかったケースは半数超（52.1%）（下図上）。その理由として、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」（47.1%）、「誰にも知られたくなかったから、心配させたくなかったから」（28.7%）、「相談してもむだだと思ったから」（27.6%）、「どこ（だれ）に相談してよいのかわからなかったから」（26.4%）等が多く挙げられている。また、他の性暴力被害分類と比して、「他人に知られるとこれまで通りの付き合いができなくなる」との回答が多く、がまんすればこのままやっていける、自分にも悪いところがある、そのことを思い出したくない、世間体が悪いもやや多くなっている（下図下）。

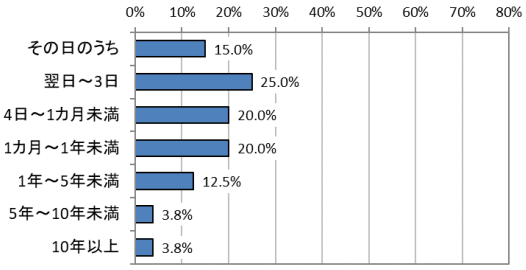
相談できたケースにおいても相談までに時間を要することが多く、被害から 3 日以内の相談は 40.0%と、他の性暴力被害分類と比して低くなっている（下図左中）。相談した人は友人・知人（30.5%）、家族・親戚（14.4%）が多いが、家族・親戚との回答は他の性暴力被害分類と比して顕著に低くなっている（下図上）。また、最初に相談した人は、話を聞く（63.8%）、慰め・励ます（41.3%）等の行動をとっている（下図右中）。

図表 2-57 【性交を伴う性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

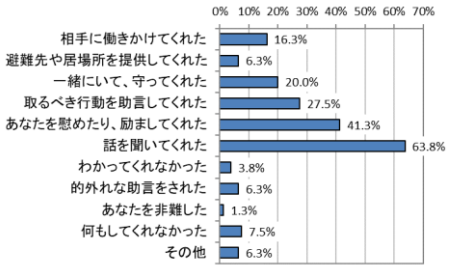
＜相談した人・機関（複数回答、n=167）、最初に相談した人・機関（n=167）＞



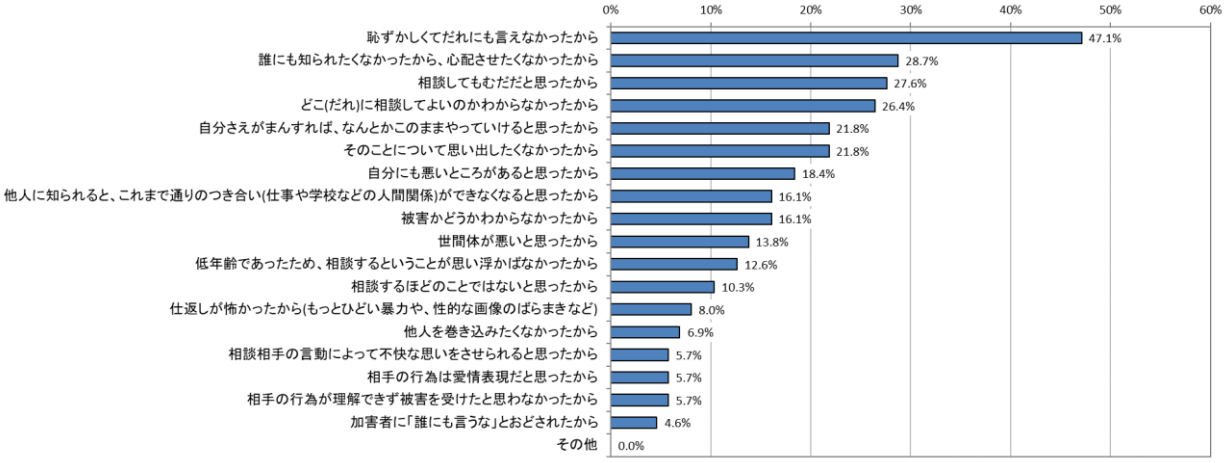
＜相談までに要した期間（n＝80）＞



＜最初に相談した相手がとった言動（n＝80）＞



＜相談しなかった理由（複数回答、n=87）＞

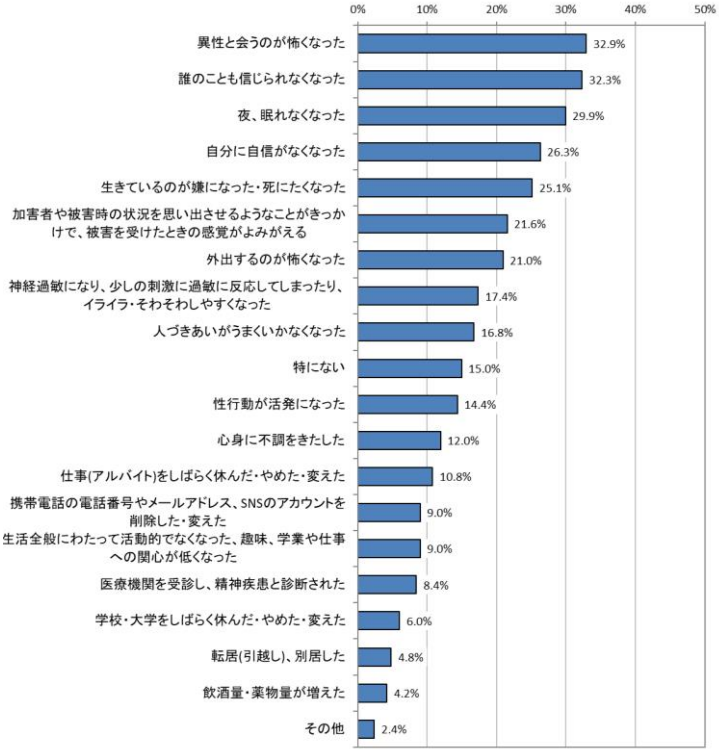


E.【性交を伴う性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

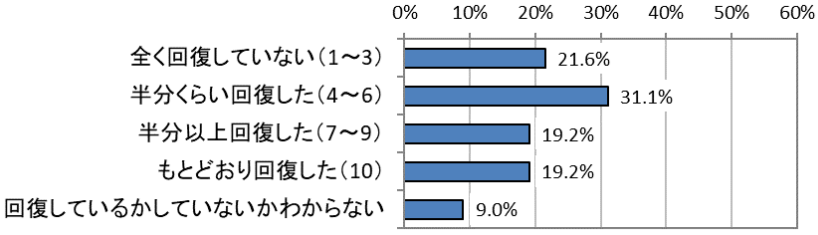
性暴力被害による生活の変化としては、「異性と会うのが怖くなった」（32.9%）、「誰のことも信じられなくなった」（32.3%）、「夜、眠れなくなった」（29.9%）、「自分に自信がなくなった」（26.3%）、「生きているのが嫌になった・死にたくなった」（25.1%）等の多様な変化を訴える被害者が多くみられる。また、他の性暴力被害分類と比して、被害を受けたときの感覚がよみがえる、性行動が活発になったとの回答が多くみられ、人づきあいがうまくいかなくなった、仕事を休んだ・やめた、神経過敏になったとの回答もやや多くなっている（下図上）。性暴力被害からの回復状況は、「もとどおり回復した」は 19.2%にとどまっており、全ての性暴力被害分類の中で最も性暴力被害からの回復状況が芳しくない（下図下）。

図表 2-58 【性交を伴う性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について（n＝167）

＜被害による生活の変化（複数回答）＞



＜被害からの回復状況＞



⑤情報ツールを用いた性暴力被害

最も深刻な／深刻だった性暴力被害として、情報ツールを用いた性暴力被害を挙げた 333 人（有効回答数）の回答結果を基に、情報ツールを用いた性暴力被害の特徴をみる。

【ポイント】情報ツールを用いた性暴力被害の状況

○被害者について

高校生、大学生の被害者が多い。情報ツールを用いた性暴力に初めてあったのは高校生の時と回答する人が半数程度となっている。

○加害者について

インターネット上で知り合った人や知らない人が加害者との比率が高い。異性及び社会的地位等が同等または下位の者からの加害が多いが、加害者の性別や地位がわからないとする回答も比較的多い。

○性暴力被害の状況について

被害場所はインターネット・SNS 上が多いほか、公共交通機関、自宅、学校、加害者の家等もみられている。性暴力被害にあった際の状況としては、インターネット・SNS 上で相手からおどされた、自分に行われていることがよくわからなかった等との回答が多い。

○性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこにも相談をしなかったケースが半数を超え、全ての性暴力被害分類の中で最多となっている。相談できなかった理由としては、恥ずかしくて言えなかった、相談するほどのことではない等が多く挙げられた。相談した人は友人・知人、家族・親戚の順に多い。

○性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

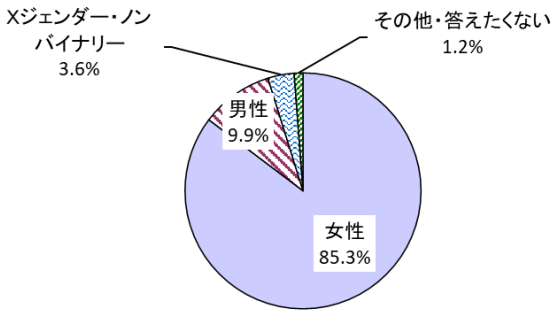
性暴力被害による生活の変化は他の性暴力被害分類と比して少なく、夜眠れなくなった、メールアドレス・SNS アカウントを削除・変えた等がみられている。性暴力被害から回復したとの回答も他の性暴力被害分類と比して多くなっている。

A.【情報ツールを用いた性暴力被害】被害者について

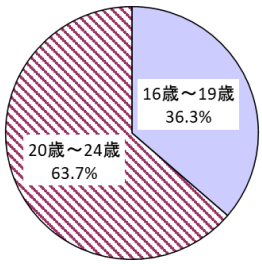
女性の被害者が 85.3%と多く、次いで男性が 9.9%となっている（下図左上）。年齢層は 20～24 歳が 63.7%と高いが、他の性暴力に比べ、16～19 歳が 36.3%と高くなっている（下図右上）。所属・職業は大学生（26.1%）、高校生（23.1%）の順で多い（下図中）。情報ツールを用いた性暴力の他に、言葉による性暴力（39.9%）、身体接触を伴う性暴力（23.1%）等にあっている人が多い（下図左下）。16～18 歳の時に情報ツールを用いた性暴力被害に初めてあった人が 48.9%と最も多く、次いで 13～15 歳（18.9%）となっている（下図右下）。

図表 2-59 【情報ツールを用いた性暴力被害】回答者属性 （n＝333）

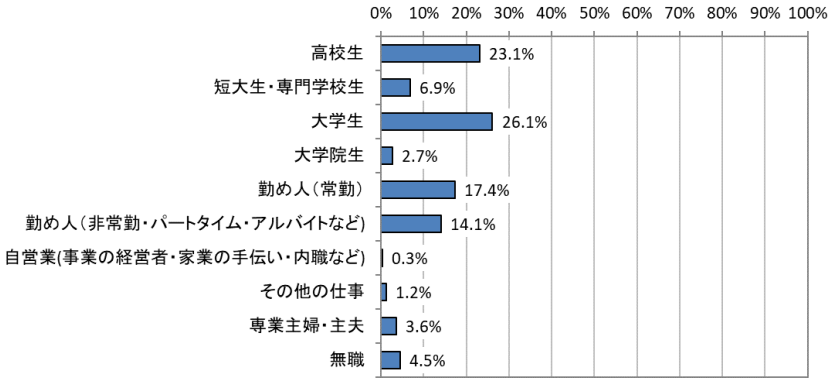
＜性自認＞



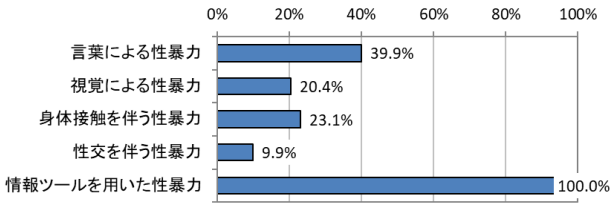
＜年齢層＞



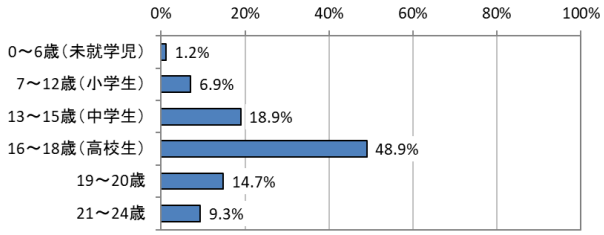
＜所属・職業＞



＜性暴力被害の遭遇の有無（複数回答）＞



＜情報ツールを用いた性暴力被害に最初にあった年齢＞

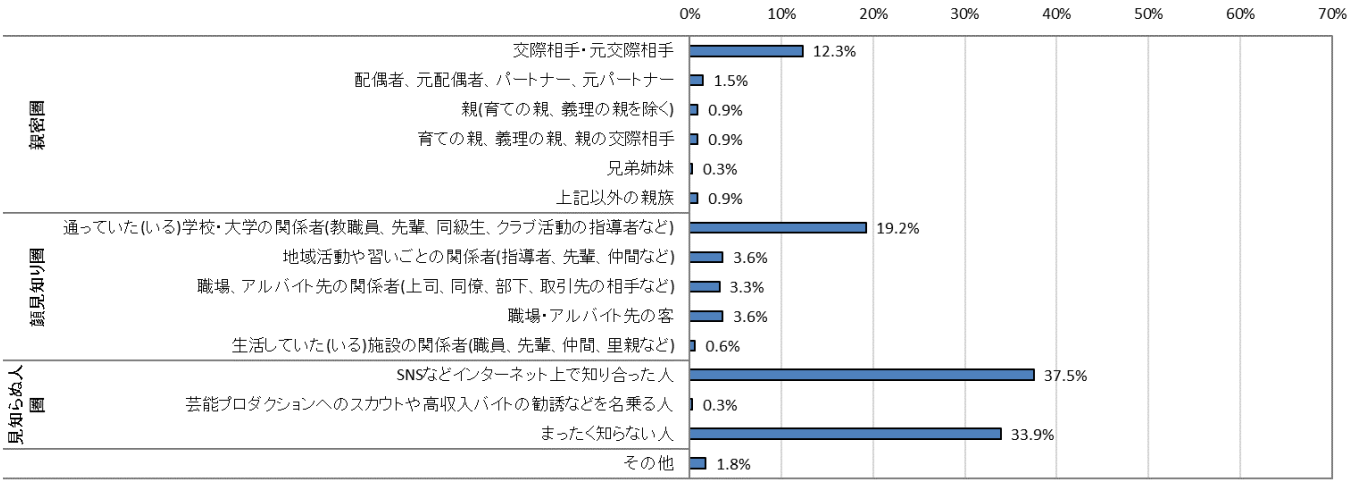


B.【情報ツールを用いた性暴力被害】加害者について

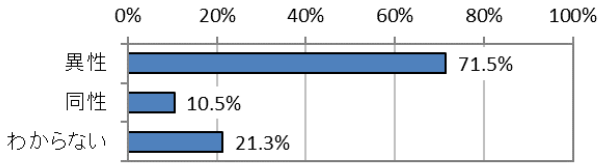
加害者としては、SNS 等インターネットで知り合った人（37.5%）、まったく知らない人（33.9%）が多く、学校の関係者（19.2%）、(元)交際相手（12.3%）等がこれに次ぐ（下図上）。異性による加害が 71.5%と多いが、わからないとの回答も 21.3%みられる（下図左下）。加害者の社会的・職務上の位置等は同等または下位が 39.2%と多くなっている（下図右下）。

図表 ２-６０ 【情報ツールを用いた性暴力被害】加害者について

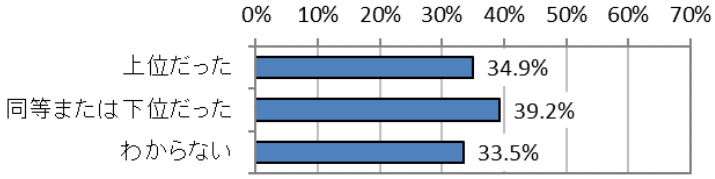
＜加害者との関係（複数回答、n＝333）＞



＜加害者の性別（複数回答、n＝333）＞



＜加害者の社会的・職務上の地位等（複数回答、n＝209）＞

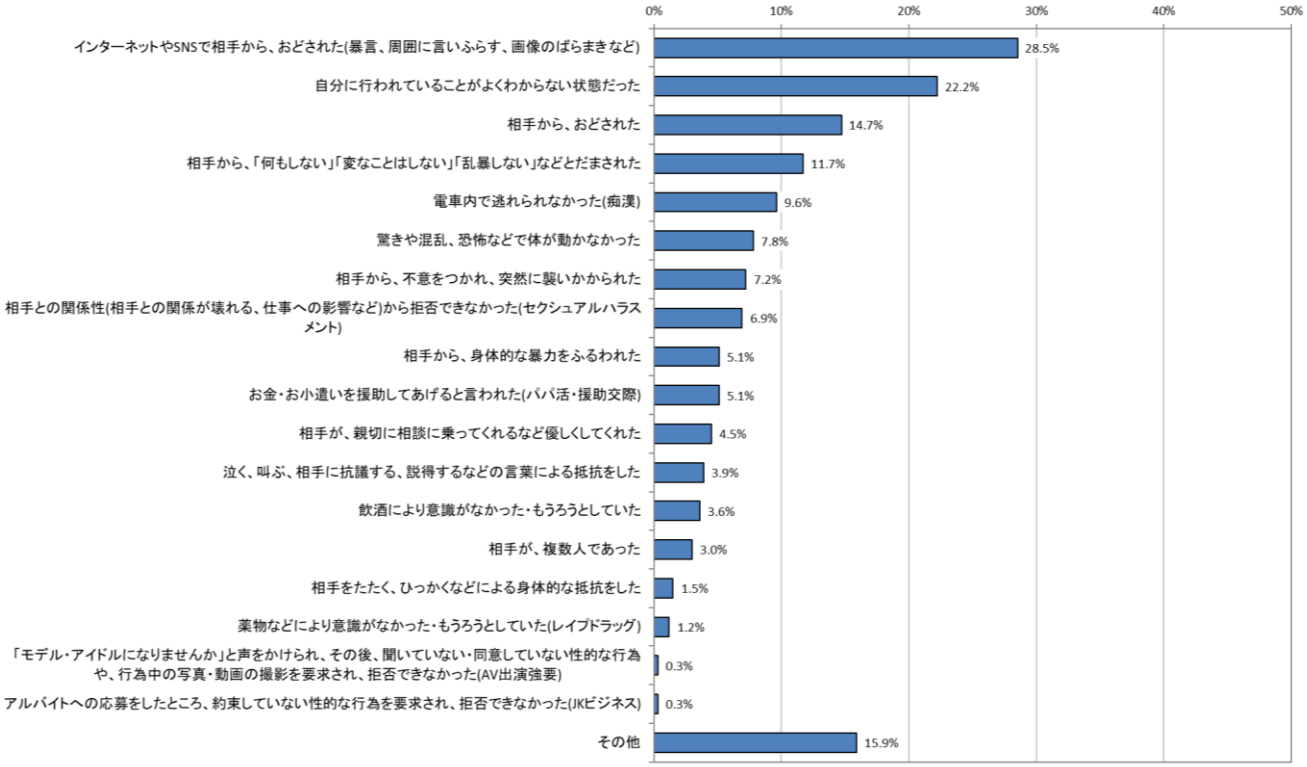


C.【情報ツールを用いた性暴力被害】性暴力被害の状況について

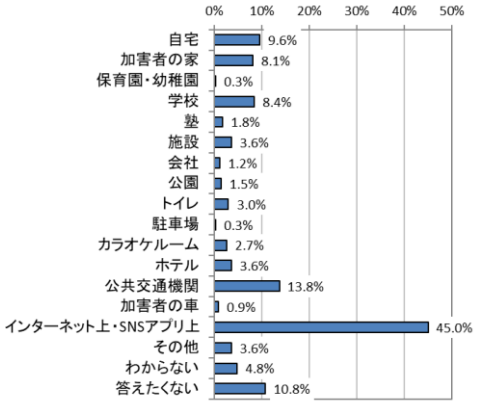
被害場所は、インターネット・SNS 上（45.0%）が顕著に多く、公共交通機関（13.8%）、自宅（9.6%）、学校（8.4%）、加害者の家（8.1%）でも行われている（下図左下）。被害は 1 回限り（63.7%）が多い（下図右下）。性暴力被害時の状況として、「インターネットや SNS で相手から、」おどされた」（28.5%）、「自分に行われていることがよくわからない状態だった」（22.2%）、その他（性的な画像・メッセージを送り付けられた、AirDrop 痴漢等。15.9%）等との回答が多い（下図上）。

図表 ２-６１ 【情報ツールを用いた性暴力被害】性暴力被害の状況について（n＝333）

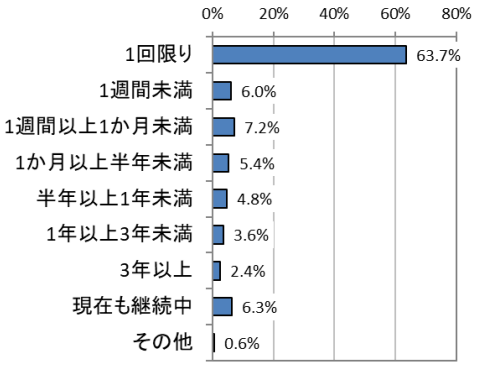
＜被害にあったときの状況（複数回答）＞



＜被害にあった場所（複数回答）＞



＜被害の継続期間＞



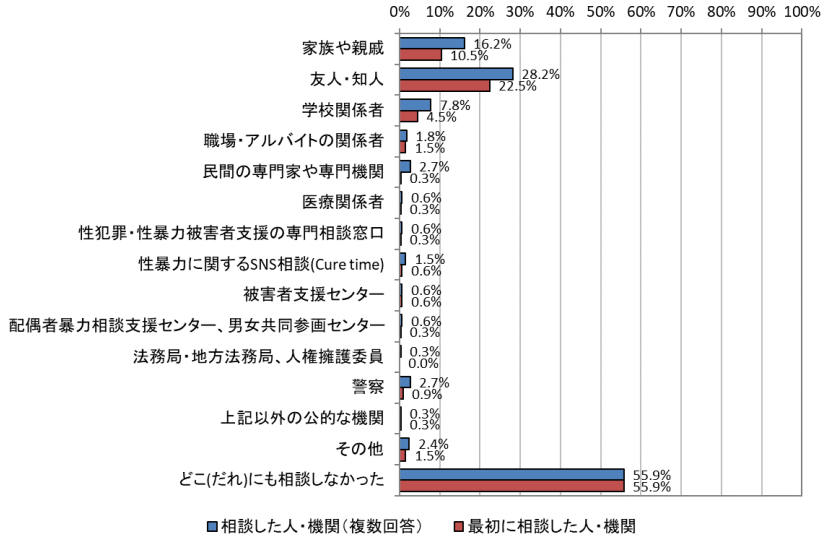
D.【情報ツールを用いた性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

性暴力被害をどこ（だれ）にも相談をしなかったケースは半数超の 55.9%であった（下図上）。その理由として、「恥ずかしくてだれにも言えなかったから」（40.3%）、「相談するほどのことではないと思ったから」（35.5%）等が多く挙げられた。また、他の性暴力被害分類と比して自分にも悪いところがあるが多くなっている（下図下）。相談に至る場合、被害から 3 日以内の相談が 63.3%となっており（下図左中）、相談した人は友人・知人（28.2%）、家

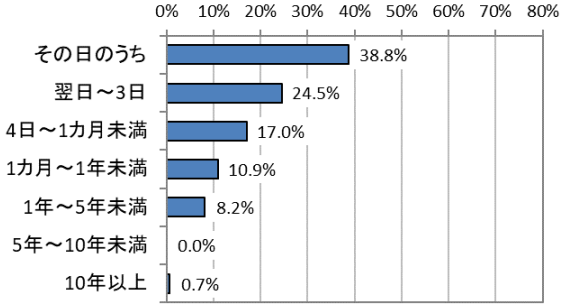
族・親戚（16.2%）の順に多くなっている（下図上）。また、最初に相談した人は、話を聞く（51.7%）、慰め・励ます（36.1%）等の行動をとっている（下図右中）。

図表 ２-６２ 【情報ツールを用いた性暴力被害】性暴力被害の相談状況について

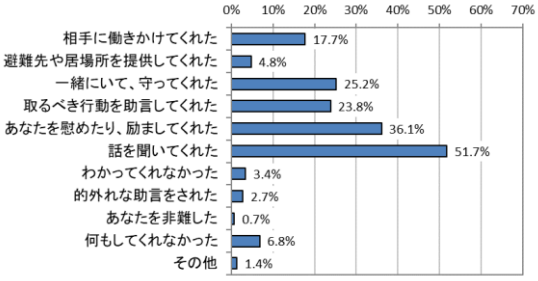
＜相談した人・機関（複数回答、n=333）、最初に相談した人・機関（n=333）＞



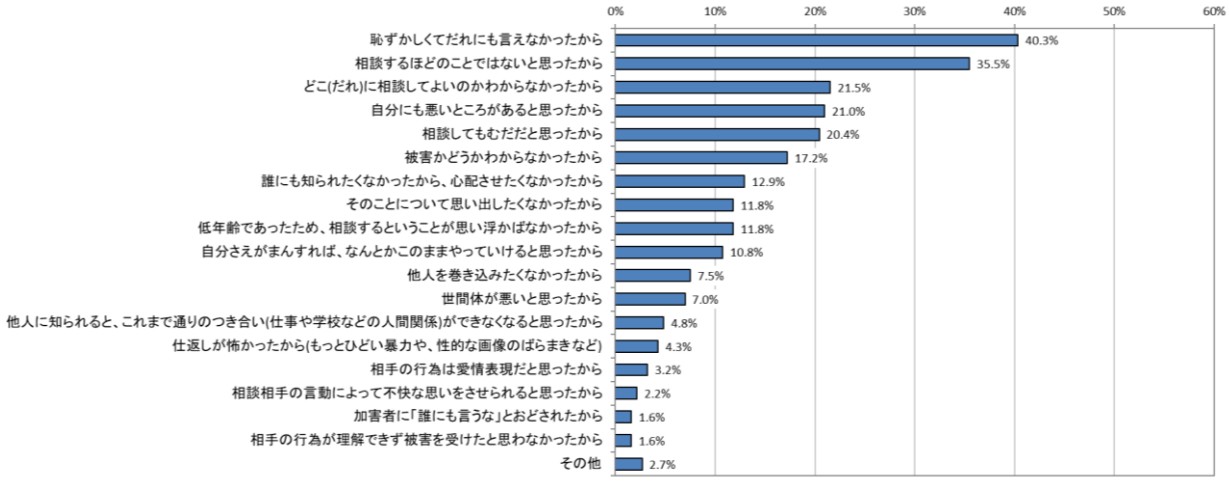
＜相談までに要した期間（n＝147）＞



＜最初に相談した相手がとった言動（n＝147）＞



＜相談しなかった理由（複数回答、n=186）＞

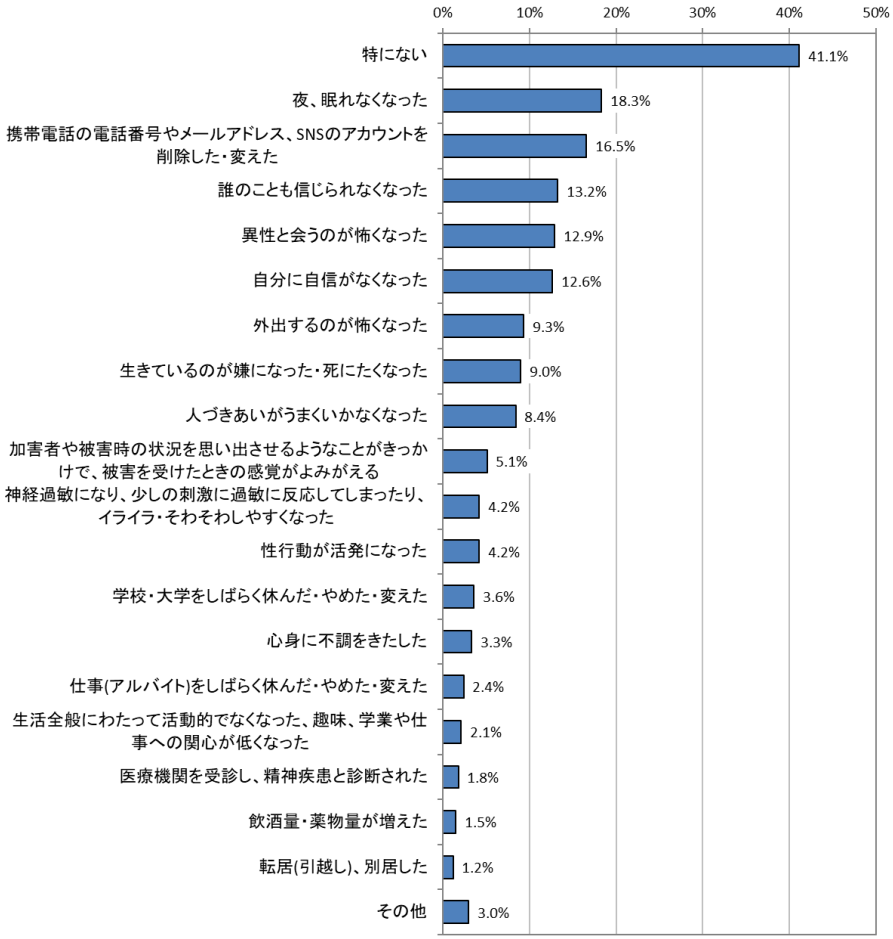


E.【情報ツールを用いた性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について

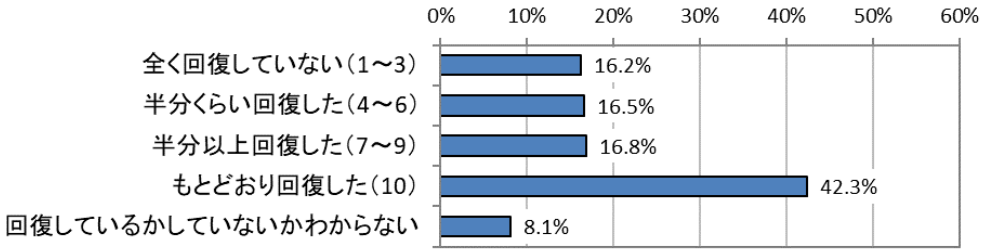
性暴力被害による生活の変化としては、「特にない」（41.1%）が他の性暴力被害分類と比してやや多く、「夜、眠れなくなった」（18.3%）、「携帯電話の電話番号やメールアドレス、SNS アカウントを削除した・変えた」（16.5%）等がこれに次いでいる（下図上）。性暴力被害からの回復状況は、「もとどおり回復した」は 42.3%となっている（下図下）。

図表 ２-６３ 【情報ツールを用いた性暴力被害】性暴力被害を受けた直後から現在までの生活の変化について（n＝333）

＜被害による生活の変化（複数回答）＞



＜被害からの回復状況＞



（３）その他の分析

本調査では、上記の性暴力被害分類別の状況の分析に加えて、下記等の分析も実施したが、ここでは紙面の制約から本報告書への掲載は割愛する。分析結果はデータ編に掲載しているため、参照されたい。

①性暴力被害分類別の状況

性暴力被害分類別に、性暴力被害状況、相談状況等について分析。下記等の状況・傾向を把握した（詳細はデータ編の p.10～参照）。

- 言葉による性暴力は学校であっているケースが多く、同性が加害者になっていることも多い（データ編　図表１２、図表１５）
- 視覚による性暴力では、まったく知らない人が加害者であることが多く、路上、公共交通機関、学校等で被害にあっていることが多い（データ編　図表１１、図表１５）
- 身体接触を伴う性暴力は、公共交通機関等で遭遇するケースが多く、1 回限りの被害が多い（データ編　図表１５、図表１６）
- 性交を伴う性暴力では、だれ（どこ）にも相談できなかった人が多く、回復状況は他の分類に比べ最も芳しくない（データ編　図表１７、図表１８、図表２３）
- 情報ツールを用いた性暴力では、インターネット・SNS 上で、被害者が中高校生の時に被害にあっていることが多い（データ編　図表１０、図表１５）

②性自認・年齢層別の状況

性自認・年齢層別に、性暴力被害の実態、相談状況等について分析し、下記等の状況・傾向を把握した（詳細はデータ編の p.21～参照）。

- 男性の被害者では学校での被害が多く、他の性自認と比して同性からの加害が多い（データ編　図表３０、図表３３）
- X ジェンダー・ノンバイナリーの被害者では、相談に至らない、性暴力被害からの回復状況も芳しくない傾向がある（データ編　図表３５、図表３６、図表４１）

③加害者別の状況

加害者を「親密圏」、「顔見知り圏」、「見知らぬ人圏」の 3 つに区分し、加害者区分別に、被害の特徴を分析。下記等の状況・傾向を把握した（詳細はデータ編の p.36～参照）。

- 親密圏の加害者は性交を伴う性暴力被害に多く、被害が継続しやすい（データ編 図表４７、図表５０）
- 顔見知り圏の加害者は言葉による性暴力被害で多く、被害が継続しやすい（データ編 図表４７、図表５０）
- 見知らぬ人圏の加害者は視覚による性暴力被害、情報ツールを用いた性暴力被害で多く、1 回限りの被害が多い（データ編 図表４７、図表５０）

④低年齢のときに受けた性暴力被害の状況

特に低年齢のときに受けた性暴力被害（0～15 歳までに受けた被害）に注目しつつ、性暴力被害を受けた年齢別に、性暴力被害の状況、生活の変化、回復状況等の特徴を分析し、下記等の状況・傾向を把握した（詳細はデータ編の p.40～参照）。

- 0～6 歳（未就学児）に受けた性暴力被害は、顔見知りからの継続被害が多く、心身に及ぼす影響が大きく回復しにくい（データ編　図表５４、図表５９、図表６６）

⑤性暴力被害からの回復に影響する要因

回答者に自己評価いただいた性暴力被害からの回復状況の回答を基に、性暴力被害からの回復に影響する要因を分析し、下記等の状況・傾向を把握した（詳細はデータ編の p.53～参照）。

- 加害者が親密圏の者、社会的地位が上位の者の場合に回復状況がよくない（データ編　図表７１、図表７３）
- 性交を伴う性暴力被害、重複被害、継続被害にある被害者ほど回復状況がよくない（データ編　図表２３、図表７６、図表８７）
- 相談した相手がプラスの対応（話を聞く、慰め・励まし、助言等）をとった場合に回復状況がよい（データ編　図表８０）

（４）必要な支援等について

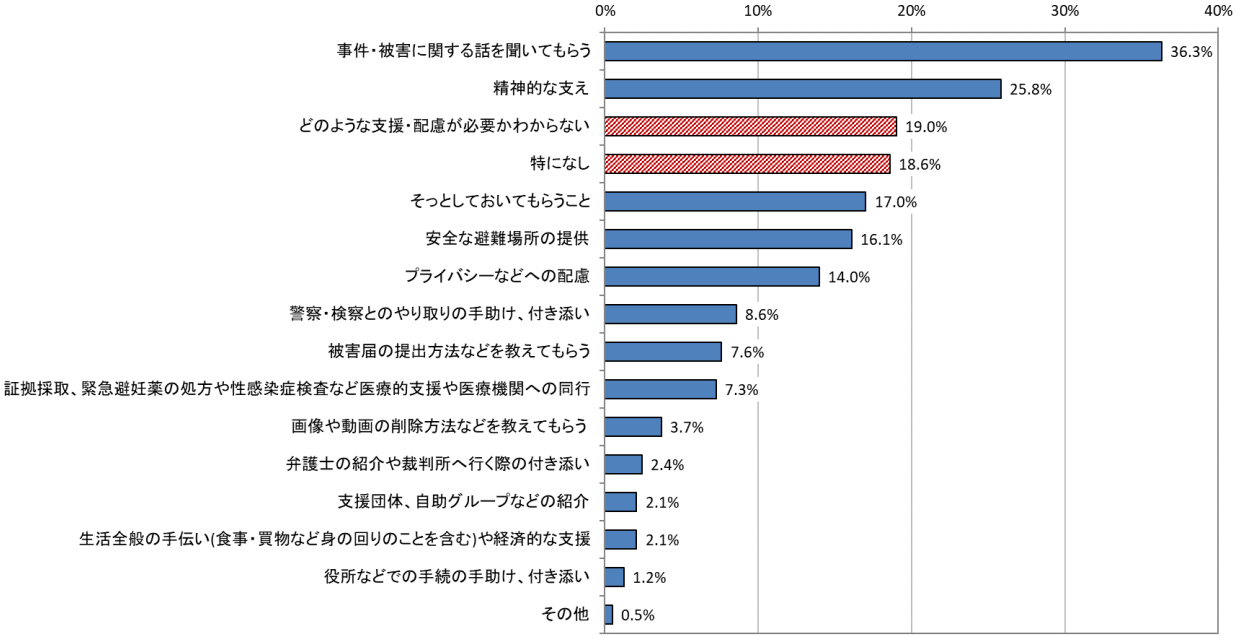
性暴力被害者が必要とする手助け・支援（被害を受けた直後及び現在）、性暴力のない社会にするために必要な取組、性暴力被害の相談をしやすくするために強化が必要な取組について、本調査の全回答者 2,040 人の回答結果から整理した（性暴力被害分類別に分析をしたが、支援策等については明確な差異が生じなかった）。

①必要とする手助け・支援

A.性暴力被害を受けた直後

性暴力被害を受けた直後に必要とする手助け・支援について、具体的支援としては「事件・被害に関する話を聞いてもらう」（36.3%）が最も多く、次いで「精神的な支え」（25.8%）、「そっとしておいてもらうこと」（17.0%）となっている。一方、「どのような支援・配慮が必要かわからない」（19.0%）、「特になし」（18.6%）も多い。

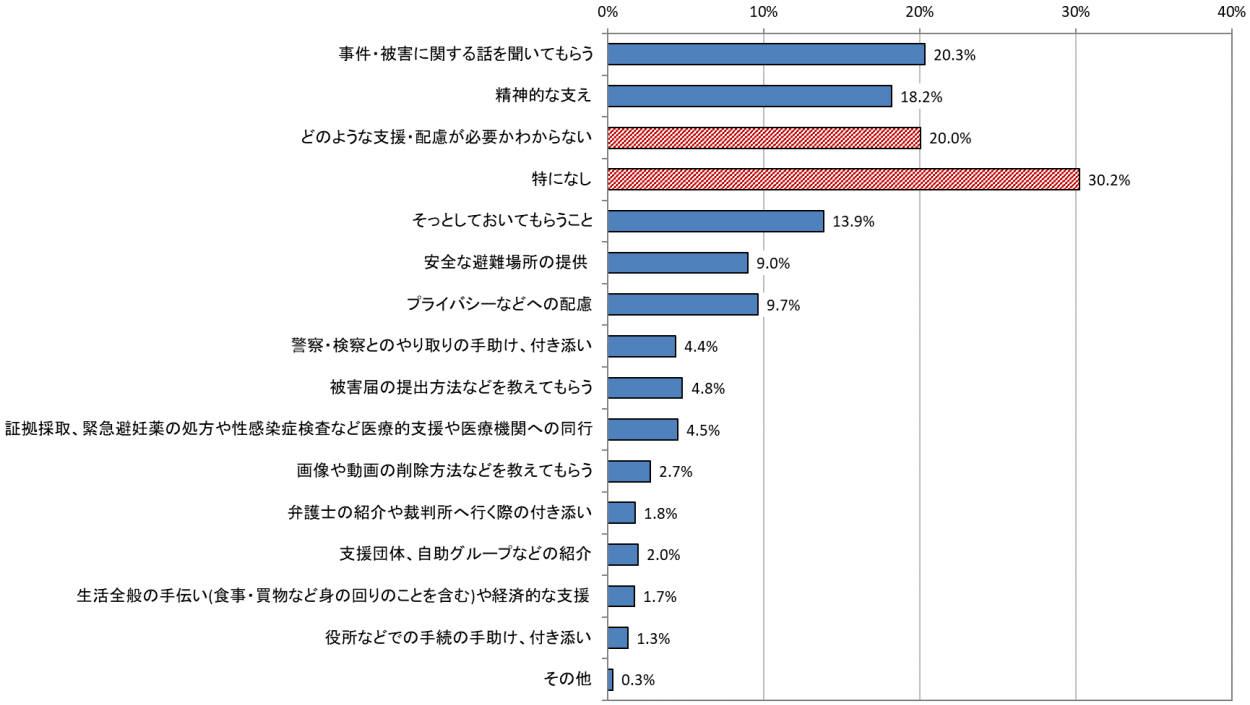
図表 ２-６４ 必要な手助け・支援（性暴力被害を受けた直後）（複数回答、n＝2,040）



B.現在

現在、必要とする手助け・支援については、「特になし」（30.2%）が最も多く、「どのような支援・配慮が必要かわからない」（20.0%）も多く、2 項を合わせると 50.2%に達している。具体的支援としては、「事件・被害に関する話を聞いてもらう」（20.3%）、「精神的な支え」（18.2%）、「そっとしてもらうこと」（13.9%）となっている。

図表 2-６５ 必要な手助け・支援（現在）（複数回答、n＝2,040）



【ポイント】必要な手助け・支援を「特になし」、「わからない」とする被害者の特徴

図表 2-６４、図表 2-６５にみられるように、性暴力被害を受けた直後及び現在において必要な手助け・支援としては、「事件・被害に関する話を聞いてもらう」、「精神的な支え」、「そっとしてもらうこと」が挙げられるとともに、「どのような支援・配慮が必要かわからない」、「特になし」との回答も多い結果となった。具体的な支援があまり思いつかず、情緒的なサポートに意見が集中している若年層の状況もうかがえる。

「事件・被害に関する話を聞いてもらう」、「精神的な支え」の二大ニーズについては、ほとんどの性被害分類、性・性自認に当てはまるものであった。そこで、被害を受けた直後に必要とした手助け・支援を例に、「特になし」と「どのような支援・配慮が必要かわからない」と回答した被害者について、さらに分析したところ、以下のような特徴がみられた（詳細はデータ編の p.67～参照）。

「特になし」との回答層

- 16～19 歳の若い層の被害者に多い（回答者全体 18.7%に対し、女性 16～19 歳 26.3%）。一方、性暴力被害分類による傾向はあまりみられない（データ編　図表２４、図表２５、図表４２、図表４３）。
- 性暴力被害の相談状況については、誰にも相談しなかったとの回答が多い。また、その理由としては、相談するほどのことではないと思ったからが多くみられてい

る（データ編　図表９２、図表９３、図表９８、図表９９）。

- 性暴力被害による生活の変化は特になしとの回答が多く、性暴力被害からもとどおり回復したとの回答も多くみられている（データ編　図表１００、図表１０１、図表１０２、図表１０３）。

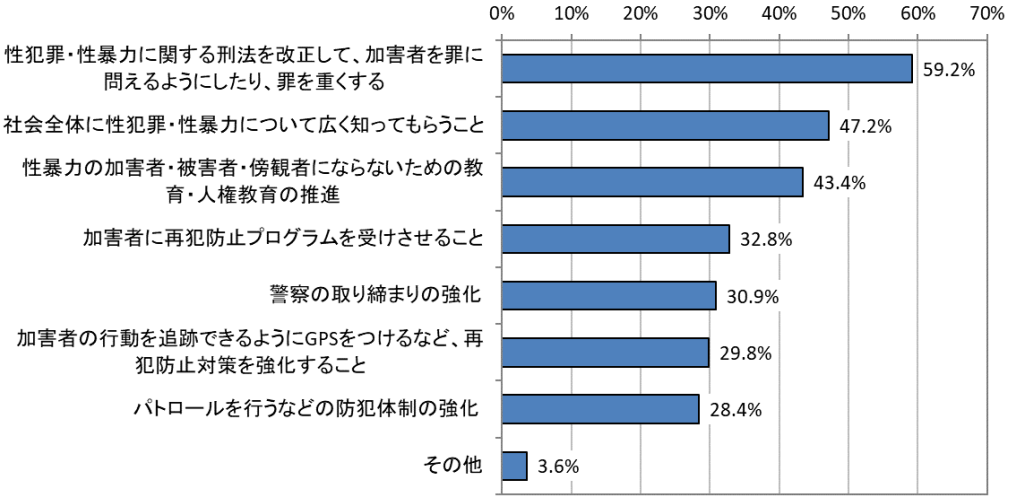
「どのような支援・配慮が必要かわからない」との回答層

- 性暴力被害分類による傾向はあまりない（データ編　図表２４、図表２５）。
- 性暴力被害時の状況としては、自分に行われていることがよくわからなかったとする回答が多く、被害を継続して受けた（継続中を含む）被害者や、複数分類の重複被害を受けた被害者が多くなっている（データ編　図表８８～図表９１、図表１０４、図表１０５）。
- どこにも相談できなかった回答者が多く、理由として、どこに相談してよいかわからなかった、相談相手の言動によって不快な思いをさせられる、相手の行為が理解できず被害を受けたと思わなかった、低年齢で相談することを思い浮かばなかった等が多くみられている。また、相談に至った場合でも相談相手が何もしてくれなかったとの回答比率が高くなっている（データ編　図表９２、図表９３、図表９６～図表９９）。
- 性暴力被害からの回復状況は、全く回復していない、半分くらい回復した、回復しているかしていないかわからないが多く、回復状況はよくないと言える（データ編　図表１０２、図表１０３）。

②性暴力のない社会にするために必要な取組

性暴力のない社会にするために必要な取組としては、「性犯罪・性暴力に関する刑法を改正して、加害者を罪に問えるようにしたり、罪を重くする」（59.2%）が最も多く、次いで、「社会全体に性犯罪・性暴力について広く知ってもらうこと」（47.2%）、「性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための教育・人権教育の推進」（43.4%）、「加害者に再犯防止プログラムを受けさせること」（32.8%）と続いている。

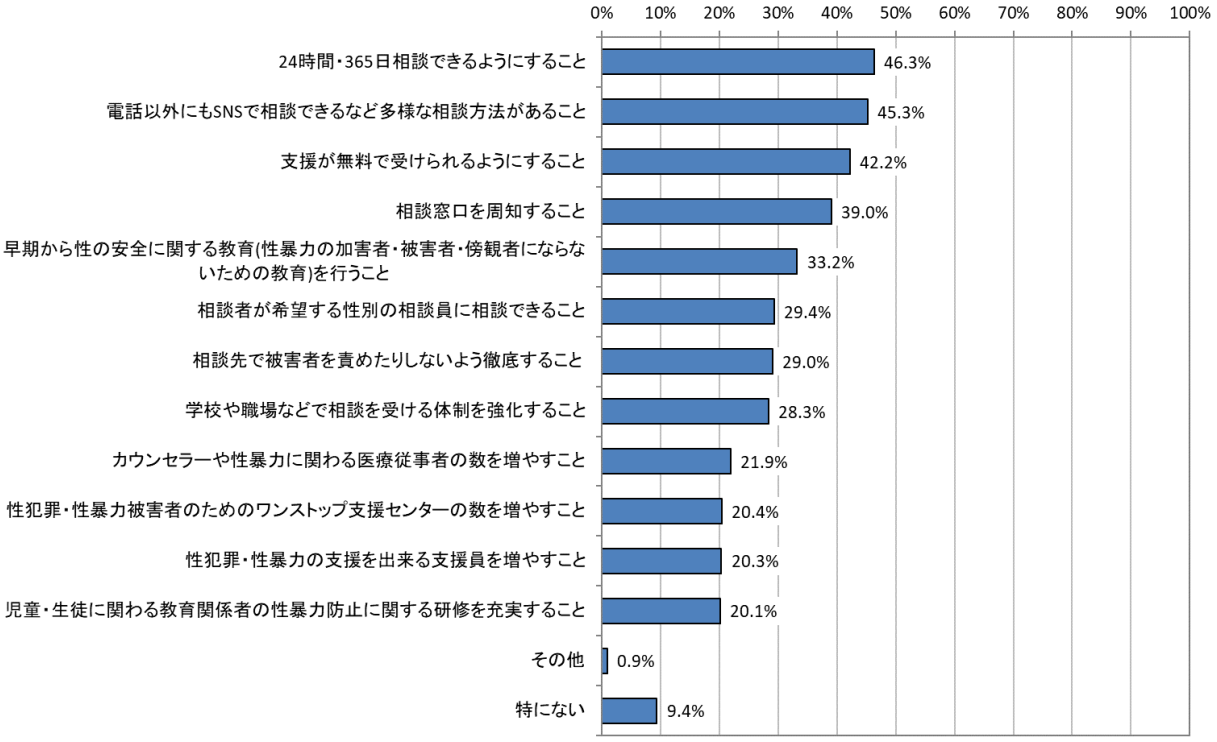
図表 ２-６６　性暴力のない社会にするために必要な取組（複数回答）（n＝2,040）



③性暴力被害の相談をしやすくするために強化が必要な取組

相談しやすくするために強化が求められる取組としては、「24 時間・365 日相談できるようにすること」（46.3%）、「電話以外にも SNS で相談できるなど多様な相談方法があること」（45.3%）、「支援が無料で受けられるようにすること」（42.2%）が多く、これに「相談窓口を周知すること」（39.0%）、「早期から性の安全に関する教育（性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための教育）を行うこと」（33.2%）が続いている。

図表 ２-６７　性暴力被害の相談をしやすくするために強化が必要な取組（複数回答）（n＝2,040）



（５）アンケート対象者（性暴力被害者）からの自由意見

アンケート（本調査）の最後に、「アンケートで答えきれなかった被害のこと、今後の取組で期待することなどあれば自由にお書き下さい」との自由記述設問を設けたところ、多くの意見をいただいた。①アンケートで答えきれなかった被害のこと、②今後の取組で期待することに分類の上、主な意見を抜粋・紹介する。詳細はデータ編の p.92～を参照。

※下表には、具体的な性暴力被害の内容に触れる記述が多く含まれます。読むことでストレスを感じたり、気分が悪くなったりすることもあるかもしれませんので、その場合には、読むのをやめたり、中断して休むなどしてください。

①アンケートで答えきれなかった被害のこと

図表 ２-６８　自由意見（アンケートで答えきれなかった被害のこと）

性暴力であることを認識できなかった
・被害にあっている時は、自分があっているという実感がなく、何もできず悔しかった。 ・性教育は受精の理屈を教えるだけでは意味がないのではないか。私は被害にあった小学 4 年のとき、受精が体のどの部分で、何をしたら達成されるのかも知らなかった。男女の愛撫行為も知らなかった。故に、被害にあった当時は、自分に降りかかっているリスク（妊娠等）や、自分の口の中に何を挿れられ、自分が何を舐めまわし、飲み込んだものが精液だったとか本当に何も知らなかった。私は、性教育の具体化、低学年からの性教育を期待する。 ・小学生の頃の出来事で、自分は一体何をされたのかさえ理解できていなかった。修学旅行先でそばに親もおらず、だからなのか、被害届など出しておらず、事件にもなっていない。犯人は野放し。あの時自分に知識があったら必ず警察に行ったのに。犯人を罰してほしかったとずっと後悔している。他人が怖く信じられない。でも被害に遭ったのが隣で寝ていた友人たちでなくてよかったとは思ってる。難しいかもしれないが今後は私のような子はでないようにしてほしい。 ・「あの日の出来事」が性被害だったと気付くには 2 年ほど掛かり（気付いたきっかけは大学の担当カウンセラーに相談した際、「それは性被害だよ」と言ってもらえたこと）、被害に遭ってから少なくとも 2 年間は「自分が悪かった」「自分にも責任がある」「自分も共犯者だ」「人生の汚点」と、本来加害者に向けるべき感情を全て自分自身に向けて苦しんでいた。被害直後よりも、2 年後に「あれは性被害だった」と気付いてからのほうがずっと苦しかった。被害体験のフラッシュバックなど、精神的不調はそこから始まった。自分の中の拭い切れない記憶と否が応でも向き合わされる、きつくて長い闘いを強いられた。そんな中で、何度も話を聴いてくれて、辛い状況から抜け出す方法を一緒に考えてくれたスクールカウンセラーの方々には頭が上がらない。行政には、「性被害に遭ったあなたは悪くない」「悪いのは加害者であって、被害を受けたあなたではない」というメッセージを発信し続けてほしい。性的同意年齢の引き上げは絶対に必要だと思う。あの日断り切れなかったことで、20 歳前後の自分でも苦しいのに、13 歳の子にこんな苦しい辛い思いはとてもさせられない。私が 13 歳の頃は、妊娠のメカニズムも性行為の具体的な内容（生殖器を触りあったり、生殖器を挿入されることなど）もヴェールに隠された状態で、ほとんどと言っていいほど知らなかった。相手からの提案に本当の意味で同意できるのは、その中身を理解できてからだというのは当然のことではないか。

被害を訴えることができなかった、相談できなかった
・社会人になるまでは自分には遠い存在だと感じていた性的犯罪でしたが実際に起こった時に恐怖で何もすることができませんでした。職場の上司ということもあり、相手と気まずくなるのが悩みでなかなか信頼のできる同僚に言い出せなかったのですが言ってみると周りの人は真剣に話を聞いてくれて守ってくれました。1 人で抱え込むのはとても辛く孤独感がありました。なので今後は相談しやすい環境がすぐそばにあればとても安心できますし、否定もせずに聞いてくれるような環境だとなお話しやすいです。 ・私は小学生のときに経験して恥ずかしく思い誰にも言えず 1 人抱え込んでしまいました。抵抗できない小中高生が狙われ、今も悩んでいる人がいると思います難しい問題ですがどうか被害者が 1 人でも減るよう願っています。 ・何年経っても、理由は分からないがそのことに意識を向けると涙が出る。その時は我慢してしまったし、被害に遭ったということを人に言うことが恥ずかしく、また自分の行動にも悪いところがあると思って責められるかもしれないことは怖かった。自分を守ってやれなかったことを悲しく思う。相手にとってはそんなに大きいことだとも思ってないのかもしれない。また当時の中学校の性教育が、当時の異性交際は手を繋ぐところまででそれ以上はしてはいけない、というものだった。そのような教育をしていた先生の担任する男に性暴力を振るわれた。その先生に対して、そのようなことがあったことを知らしめたい。 ・痴漢被害にあった当時、どのように対処すべきかといった知識がなかったために、未だに心残りがあります。私は、相談などにより恐怖をはじめとした精神面に寄り添ってほしかったというような希望ではなく、加害者が現在何事もなかったようにのうのうと生活が送れていることが、ただただ腹立たしく感じてしまうため、性犯罪を罰するために被害者がとることの可能な対処法について周知してほしいです。また、警察署等にお勤めの方々がお忙しいことは重々承知ですが、性犯罪を取り締まる体制も強化してほしいです。そして、未成年だからといって、犯罪者が守られる世の中は変わってほしいと思います。本人のみ（ご家族までも責められる社会は苦に感じるため)、犯罪を犯してしまった事実や、その重みを背負って生きねばならないと自覚してほしいです。
警察・学校・職場・相談機関等の対応に不満がある
・その時はどうしたらいいのかわからない精神状態なので気軽に話をできる場所がほしかったと思いました。警察に電話したら軽く流されたのもトラウマです。 ・直接的な被害ではなくても、恐怖を感じたということに対して理解してほしい。特に男性警察官はわかっていないと感じた。当時心療内科に通っている精神状態だったのでそれが原因のように言われて不快だったが面倒だったので話を切り上げた。 ・校内に知的障害者用の学級があり、加害者がそこに所属していたため、教員に訴えても有耶無耶にされる可能性が高かったので友人以外に相談できなかった。加害者にハンデがあろうとなかろうと健常者と同じように責任を追わせてほしい。 ・医療関係者は患者さんからいろいろとセクハラを受けているがそれが普通のような風習がみられる。相談してもその人にとってはそこまで？というような感覚の差があり相談しても解決しないことが多い。 ・各種相談機関でたらい回しにされ、訴えたり法的措置をとることを諦め、泣き寝入りしてしまいました。家に行った、家に入れてしまった、車に乗った＝合意ではないということの理解を徹底してほしいです。また性被害は近しい人(親族、親代わりの人、仕事先の上司など)から受けやすいです。受けてもその人を敵に回すことで自分の生活が安定しなくなるというリスクも多々あることで訴えづらいという人もいると思います。そういう被害者を

	精神的にも物理的（仕事、生活面 etc）にも支える世の中の仕組みが必要不可欠だと思いました。
今でも思い出してしまう	
	・性犯罪は本当に恐ろしいです。犯人がまた同じことをするのではと思うと恐怖心が強いです。後遺症は酷くありませんが、犯人の顔と名前、当時の年齢も覚えています。たまに思い出すことがあります。性犯罪をなくす勢いで社会をつくってほしいです。今でも犯人を許しません。 ・小学生の頃、知らないおじさんに駐車場に連れ込まれかけたことがある。たまたま友達の親が通って未遂で済んだが、まだ思い出す。被害を共有できる互助会のようなものがあれば多少経験を消化する助けになるかもしれない。 ・高校の同級生の男に加害された。周りの男は笑っていた。気持ち悪い。被害内容は言いたくないけど他の人からしたら「え？それだけ？」て感じだと思う。でも私は一生忘れないし、一生気持ち悪いと頭の片隅で思い続けるだろう。これを書いてる今も無意識に緊張して寒気を感じ震えていた。今思い出して当時自分で感じていた怖さよりもっと怖かったんだなと思って泣きそうになった。最初はアンケートでこんなこと聞いてくんのかよと思ったけど、性被害にあった女性への支援に少しでも繋がるならと思ってこれを書いた。

②今後の取組で期待すること

図表 2-69 自由意見（今後の取組で期待すること）

性犯罪・性暴力に関する刑法を改正して、加害者を罪に問えるようする、罪を重くする	
	・痴漢の加害者に対する罰や見守り強化など、きちんとした制度を確立させてほしい。痴漢はほとんどの女性が経験している一方で、警察に相談するなど実際に声を上げている人はほんの一部です。些細なことすぎて声をあげにくい環境も変えてほしいと思いました。 ・性犯罪に対して下される判決が軽すぎる。性犯罪は相手の人生を狂わせる犯罪であることがもっと世間全体の認識として広まってほしい。 ・再犯防止プログラムは刑務所から出るために加害者が頑張るものであって、解決策どころか再犯を増やす手助けとなっている。諸外国では GPS 義務化で再犯率が激減した例もある。無駄なことに税金をかけるより、厳罰化する方が早い。 ・セカンドレイプ被害への対策を期待する。例えば、罰則化など。 ・ストーカー行為に発展するような加害者だと、裁判所で被害者に加害を起こそうとすることがあり、これを防ぐために刑事裁判を行わず不起訴になった為、直接加害者と被害者を会わせない裁判を開ける制度がほしい。被害者の身ながら家族からは非難を受けたり、信用を得られなくなったり、どれだけ警察側が被害者への理解を進める説明やパンフレットを見聞きさせても考え方を変えてもらえなかった。家庭内でも孤立した場合の居場所、避難先もほしい。
早期における性教育の実施	
	・幼稚園や保育園の頃から性教育をしてほしいと思う。 ・相手は悪意を持たずに好奇心や楽しさだけで性被害の加害者となっている場合がある。性被害に対する正しく深い知識を義務教育課程の早い段階で教えるべき。 ・全体の認識として、合意の上ではない行為等、相手が嫌がればそれは犯罪行為になりうることをもっと小学生などから、話の意味が分からなくても話をするべきだと考えます。 ・小学校など比較的年齢が低い時から当たり前のように性教育をすべきだと思う。私が女性としての立場で思うことは、今の社会は、女性の生理や妊娠について理解がある人が少なすぎ

て結果的に性被害、性暴力に繋がってしまうと思う。性教育を徹底してもっと受け入れやすい社会にしてほしい。今はどうかわからないけど最初に生理の授業をしたとき、男女別に分かれていたけどそうする必要は絶対ない。まるで聞いてはいけないことみたいにするから、からかいなどが起こってしまうと思いました。子ども（特に小学生以下の年齢）は性的な暴力を悪事や犯罪だと考えず、面白半分でそのような行為に及ぶことがほとんどだと思うので、学校である程度知識をつけさせるべきだと思う。また、自分がされたように、登下校時（特に郊外の人通りの少ない道を歩く生徒）は大人の目が行き届かないので被害にあいやすい。精神的に負った傷は一生治らないので、被害者が減少することを望みます。

相談しやすい環境の整備

・明らかに性被害だと認識できない類のこともある。小さなことも相談できるように、拾えるような体制にしてほしい。大切なのは被害者のカウンセリングもあるが、加害者側のカウンセリングは見落とされがちだが、加害者側をケアしないと被害者は生まれ続ける。
・本当に辛くて悩んでいる人は相談窓口やカウンセラーの方に話すのは抵抗があるかもしれません。また、家族に相談すると心配されると思い、話せないと思います。一番話せるのは信頼できる親友や友達だと思います。
・相談したい時にすぐに対応してくれる場所。以前電話相談に電話したら人が足りないのか、繋がらなかった。
・真剣な相談を、まだ中学生だから、などと甘く受け取らないで、真摯に対応してほしい。
・公共の相談窓口は雑で事務的と聞いたことがあるので、もっと親切に対応するようにしてほしい。
・どんなに些細なことでも気軽に相談できる場がほしい。
・たとえ電話でも相談するには少しハードルがある。
・24 時間相談できる環境。

性犯罪・性暴力について社会全体に広く知ってもらいたい

・被害に遭わないために、信用できない人や相手のことを深く知らない人と密室で二人きりにならないことの大切さを、多くの女性に知ってほしい。自分の身に起こるわけがないという固定観念を取り払い、自分事として一度考える機会を持つ（あるいは学校などで機会を提供する）ことが大事だと思う。
・男女平等の社会へ向けた意識的な取組が被害を減らすと思うし、女性から男性へも性暴力は成り立つことを普及してほしい。
・性被害は知らない人からだけではなく、身近な人から受けることもあるということを広く周知してほしい。
・加害者側の軽い気持ちで行った行動が、被害者にとって深刻な影響をもたらすことがあるというのを覚えていてほしい。
・セクハラは女性のみでなく男性にもあるだという認識を周知すること。
・この程度で？という周囲の態度をなくす活動。

被害者にも非があるといった風潮をなくす

・痴漢を受けた、セクハラをされた、などと周りに言うと「あなたが誘ったんでしょう」と一蹴されることが多いので、その風潮だけでもどうにかならないかなとずっと思っています。悪いのは相手なので、加害者を責めることができるようになればいいと思います。
・痴漢に対する世間的な罪の重さの認識が低すぎると思うので、痴漢の減少と被害者がどんな服装や見た目をしていても非が全くないという認識が増えればいいと思う。
・加害者も悪いだろうけど被害者にも非はあった、だからお前も悪いという風潮があるから

相談したくてもしきれない人がたくさんいる。その風潮を消せば、相談する人も、防ぐことができることも沢山出てくる
・スカートが短い、肌を出している、愛嬌を振りまいているなど、被害者側にも問題があったと思われていることがある。しかし、性被害は加害者の都合でしか発生しない犯罪である。被害者は何も悪くない。その意識が浸透しないと、被害者側も相談することができない。相談しても「あなたにも責任があるよね？」と言われてしまったら、二次被害を起こしかねない。被害者は何も悪くない。その意識が社会に浸透するような取組を期待します。そして、性犯罪が起きてしまった後、二次被害を生まないような対応を警察など、支援者側に徹底することを期待します。

支援内容・対応策の充実

・未成年が出会い系サイトなどに入り込むと悪用される可能性があるため徹底的に対策するべき。
・被害後は本人が異性と話すことを希望しない場合、できるだけ同性スタッフのみで対応させる。
・被害まではいかないけれど、声がけなどもあるので、被害までいってからでは遅いので未然に防げるものがあればいいと思います。
・緊急避妊薬の無償提供化か保険適用化、ピルなど月経に関するものの無償化。
・パトロールや周りの方の援助などしてほしい。
・サポートの間口を広げてほしい。
・電車の車両ひとつひとつに防犯カメラを設置してほしい。
・いろいろな場所に監視カメラを置くようにしてほしい。被害にあった人に補助金など出ると嬉しい。

性暴力防止に関する研修の実施

・被害者が証拠や状況説明をしないと動いてもらえない現状が最も辛いことです。その事を性犯罪を取り締まる方や被害者支援に当たられる方には十分に熟知していただいた上で、対応していただきたいです。
・年配の人は特にセクハラの自覚がない人が多い気がするので一番訴えにくいのが問題だと思います。私は耐えられずにバイトを変えましたが、今後そういう人が出ないようにするためにも企業の研修などでセクハラに対することをもう少し取り扱ってほしいです。
・学校内でのハラスメント防止研修の充実が必要だと思います。
・どこか密室とかではなく、通りすがりの道や混んでいるお店などで痴漢され、加害者が分からない状態のことが多い。その場合、誰に言えばいいのか分からないこと。また、遊園地では係員が安全ベルトを閉める時に痴漢してくることがあった。企業の性に対する教育も徹底してほしい。

第3章　若年層の性暴力被害の実態に関するヒアリング

3－1．ヒアリングの実施状況

1）目的

性暴力被害者への支援を行っている機関・団体の支援者・関係者が経験している若年層の性暴力被害の実態及び若年層の被害者支援における課題について把握し、関係者による様々な若年層への適切な対応や支援の検討に資することを目的に、内閣府が実施した。

2）実施状況

下記の要領で実施した。

■ 実施方法：オンラインヒアリング

■ 対　　象：若年層の性暴力被害者への支援者・関係者
（性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センター及び支援団体等、下表参照）

■ 実施時期：2022 年 1～2 月

図表 3-1　ヒアリング対象一覧

種別	対象機関・団体
ワンストップ支援センター	・センターA ・センターB ・センターC ・センターD ・センターE
支援団体等	・団体 F ・団体 G ・団体 H ・団体 I ・団体 J

３）質問項目

下記を質問の基本項目として設定し、ヒアリングの際には、対象団体等の目的・活動等に合わせて項目をカスタマイズしながら質問を行った。

（１）若年層（概ね 16～24 歳）の性暴力被害及び相談・支援状況に関する実態把握

①若年層の性暴力被害の状況・傾向

- 性暴力被害の内容・特徴
- 頻発・増加している性暴力被害ケース（手口、場所・時間帯、加害者との関係性等）
- 性暴力被害が心身に及ぼす影響、身体的・精神的被害等の度合い
- SNS 等の影響、低年齢化の状況、男性・LGBT・障害者・外国籍の方等の性暴力被害の状況　等

②相談状況

- 近年の相談件数の推移
- 相談者・相談経路
- 相談機関の認知ルート
- 性暴力被害継続の期間、性暴力被害から相談までに要する期間
- 相談手段の状況・ニーズ（電話、メール、SNS 等）　等

③支援状況

- 支援内容（面談、同行支援、医療支援、心理的支援、法的支援）
- 近年の支援件数の推移

（２）相談や支援につなげるための活動・工夫・連携等

（３）課題及び行政に求めること

- 若年層の性暴力における課題と行政に求めること
- 相談・支援対応における課題と行政に求めること

３－２．若年層の性暴力被害の状況（ﾜﾝｽﾄｯﾌﾟ支援ｾﾝﾀｰへのﾋｱﾘﾝｸﾞより）

ワンストップ支援センター5 団体へのヒアリングにより、若年層の性暴力被害全体に関する状況について把握した。

本節では、若年層の性暴力被害及び相談・支援状況の実態を中心に整理する。課題及び行政に求めることについては、3－4 項にまとめる。

【ポイント】若年層性被害の状況

※センターによっては、統計の区分が未成年、20 歳台等となっているところもみられた。

○若年層の性暴力被害の状況・傾向

ワンストップ支援センターへの相談者が受けた性暴力被害の内容としては、強制性交、強制わいせつが多く、性的虐待、監護者性交等がこれに続く。

若年層への性暴力の手口は巧妙化（エントラップメント、集団暴行、監禁、盗撮、画像・動画拡散、グルーミング等）。SNS を通じた性暴力被害が増加している。また、家庭内での性暴力・性的虐待、立場を利用した性暴力、酒・ドラッグ等により意識がない中でのレイプ、交際相手からの日常的な性暴力、不意を襲っての／自宅へ侵入しての性暴力等の被害が頻発・増加している。加害者は、知人、親族、(元)交際相手、SNS で知り合った人、面識のない人等が多い。

ステイホームによる家庭内性暴力被害、被害者の孤立、バイト・就業機会を求めての性暴力被害等、新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」）の影響が生じている。

性暴力被害者の心身に及ぼす影響（不安・恐怖、フラッシュバック、不眠、自己肯定感の低下、希死念慮、PTSD 等）が深刻であり、性暴力被害後に精神科を受診する被害者も少なくない。

性暴力被害の低年齢化の進行（保育園児、小中学生の被害増）、男性・トランスジェンダーや障害者等の被害増加への対応も喫緊の対応課題となっている。

○相談状況

相談件数は、2019 年度までは明確な増加基調にあったセンターが多い（コロナの影響で、2020 年度からは横ばい・減少に転じるセンターもみられる）。相談件数増加の要因として、10～20 代の相談割合の増加も挙げられている。一方で、一度相談につながっても、その後連絡が途絶える等、「つながりにくく、途切れやすい」若年層の傾向に沿った対応が必要とされている。

性暴力被害から 72 時間以内の相談が増えており、HP 検索後の迅速な連絡、緊急避妊薬の知識浸透等が影響している可能性がある。一方で、性暴力被害後 1 か月後～半年での相談も多く、そのような性暴力被害者では心身の不調から PTSD へとつながるケースも多い。

365 日 24 時間対応の電話相談のみならず、若年層向けにはメール、SNS 等のオンライン相談が重要になるとの意見が多い。性暴力被害のオンライン相談窓口「Cure time」との連携、独自の SNS 相談窓口の準備等を進めるセンターもみられる。

１）若年層の性暴力被害の状況・傾向

（１）被害の内容・特徴

○　ワンストップ支援センターへの相談者が受けた性暴力被害の内容においては、強制性交、強制わいせつが多くなっており、性的虐待、監護者性交等がこれに続いている。

（２）頻発・増加している被害ケース（手口、場所・時間帯、加害者との関係性等）

○　若年層への性暴力の手口は非常に巧妙化しており、エントラップメント、集団暴行、監禁、盗撮、画像・動画拡散、グルーミング等がみられている。

○　SNS を通じた性暴力被害も増えている（後述）。

○　家庭内での性暴力・性的虐待、先生・コーチ・先輩等の立場を利用した性暴力、酒・ドラッグ等により意識がない中でのレイプ、交際相手からの日常的な性暴力、不意を襲っての／自宅へ侵入しての性暴力等の被害が頻発・増加している。

○　加害者は、知人（同級生・先輩、上司等）、親族（実父・継父、きょうだい等）、交際相手・元交際相手、SNS で知り合った人、面識のない人等が多くなっている（センターにより差異はみられる）。中でも顔見知り（親族、友人・知人、知人の知人、元交際相手等）からの被害が多く、16～17 歳では親族が加害者のケースが多い。

○　コロナの影響が生じている。①ステイホームにより家庭内・子ども間の性暴力被害が生じている（きょうだいからの被害も増えている）、②孤立する被害者が、過去に関係があった人から連絡を受け、直接会いに行き性暴力被害にあう、③アルバイト・就業機会が減った学生や社会人が、インターネット上でのバイト・仕事探しや援助交際・パパ活探し等の中で騙される等のケースも増えている。

○　アルコールを進められて、意識や記憶が薄れる中で性暴力被害を受けるケースも多くなっている。薬物が使用されるケースもある。

○　デート DV が日常的にあり、嫌だと思いつつ加害者が怖くて、避妊しない性行為を強要されるケースも多く、その中で妊娠するケースもみられる。

○　被害の場所は、自宅、加害者宅、ホテルが多い。時間帯は、夜から深夜早朝にかけてが多くなっている。

図表　３-２　頻発・増加している性暴力被害ケース・手口

種類	被害ケース（例）
家庭内 の性暴力	• コロナ禍で在宅時間が長くなり、悩みを打ち明ける友人等とも会えない中、家庭内で起きる性暴力が潜在化する傾向。 • 被害を開示することで家庭内秩序の乱れ、家庭崩壊の懸念等により、誰にも言えず我慢して潜在化しているケースも。 • 親から被害を受けていて家を出た方がいいとわかっていても、家を出た後に学校に行けなくなるかもしれない、家族が壊れるかもしれない等、母やきょうだいの生活破綻を気遣う子ども、家を出られない子どもが多い。

種類	被害ケース（例）
	• 親・きょうだいからの性的虐待は、グルーミングで言えない状況になり、長期化、親族間の二次被害につながりやすい。
立場を 利用した 性暴力	• 16～24 歳は人間関係や社会が広がる年齢。先輩・友人等から性暴力被害を受けるケースも。 • コーチ、部活の先輩等、立場を利用して性交を強要するケースがある。 • 先生など信頼する人からの性暴力被害は二重に深刻。
SNS を 利用した 性暴力	• 援助交際等、金銭的な目的として SNS でつながり、性暴力被害にあうケースが多い。 • SNS で知り合った年上の男性からの性暴力被害がみられる（アルコールを勧められて酔ったところで性的暴行、飲み物に睡眠薬を入れる等のレイプドラッグ被害。意識がない、朦朧としている時に性的暴行を受ける）。 • SNS へ画像・動画をアップする性暴力被害。被害者は拡散を恐れ、日常生活に大きく支障をきたしがち。 • 便利さと怖さの二面性が SNS には存在。画像の強要。特に家庭内に居場所がない子どもに多い。
交際相手から の性暴力	• 交際相手からのレイプ、デート DV が日常化し、嫌だと思いつつ、怖くて避妊しない性行為を断れない状況。 • 優しい言葉かけや好意があるように思わせる、または彼氏と思わせている。加害者は「同意の上」と主張。 • 心の支配が深刻。
見知らぬ人 からの性暴力	• いきなり襲われる。 • 自宅への侵入。

（３）性暴力被害が心身に及ぼす影響、身体的・精神的被害等の度合い

○　あるセンターの統計（対象：16～24 歳、期間：2021 年 4～11 月）によると、性暴力被害者の 6 割超に心身の症状がみられたとされている。その内容は、不安・恐怖、フラッシュバック、不眠、自己肯定感の低下、希死念慮、過呼吸、悪夢、食欲不振、PTSD、自傷行為、摂食障害、やる気の低下、離人・解離、頭が真っ白、オーバードーズ、発達性トラウマ障害等となっている。

○　また、他のセンターの統計（対象：10～29 歳、期間：2021 年 4～11 月）によると、性暴力被害者の約 3 割が被害後に精神科を受診している。

○　性暴力被害の影響により、学業・仕事・アルバイトを中断・やめる等のケースもみられており、心身に及ぶ被害は社会生活等にも影響を及ぼしている。

（４）SNS等の影響

○　あるセンターの統計（対象：全年齢、期間：2020 年度）では、SNS を通じた性暴力被害者を年齢別にみたところ、16～24 歳は全体の半数強を占め、なかでも 16 歳の性暴力被害が突出して多くなっている。

○　SNS で知り合った人に対して、自分自身が居心地のよさを求め、話が合う、優しい、いい人等の印象を持ち、安心感を持ってしまう。その結果、数回のやり取りしかしていなくても、誘われたら会ってみようという気になってしまっている。また、SNS でつながった人に優しい言葉をかけられて信頼し、頼まれて性的な画像・動画を送ってしまうケースもみられる。

○　これには、子どもが家庭内で居場所を失っていること、コロナ禍で外出の機会が制限されていること等が影響している可能性がある。家庭・学校に居場所がない子どもが、SNS で仲間を求め、つながって若者たちのたまり場へ向かうという流れができている。

○　SNS で知り合った人からの性暴力被害はレイプ被害が多い。待合せ後、すぐにホテルに連れていかれて性交や撮影に至るケースがみられる。また、送信してしまった性的画像・動画を取引材料に、性交や AV 出演を強要されるケースがみられる。

○　マッチングアプリが使われるケースが増えている。

○　被害者に性暴力被害の認識がなく、加害者を彼氏と思い込む等、手なずけられているケースもある。

○　画像・動画を消すために、警察につながるケースも増えている。事件化できる・できないに関わらず、警察が加害者を呼び出し、画像・動画を消させるケースもみられている。

（５）低年齢化の状況

○　近年の SNS の普及により、性暴力被害の低年齢化が進んでいる。

○　中高生では、性的画像・動画を撮られた被害が多くみられる。撮影されたかどうかを不安に感じている人、学内で拡散してしまった／拡散してしまうのではないか不安との人が多くなっている。

○　あるセンターの統計（対象：全年齢、期間：2021 年 4～11 月）では、新規相談者のうち 16%は 15 歳以下の被害者となっている。その性暴力被害の内容も、レイプ、強制わいせつ、性的虐待等となっている。

○　本オンラインアンケートの対象である若年層（16～24 歳）よりもさらに若い、小中学生、保育園児の被害が増加しているとするセンターもみられる（親族からの被害、職員からの被害、子ども同士の被害等）。

（６）男性・LGBT・障害者・外国籍の方等の性暴力被害の状況

①男性・LGBT の性暴力被害

○　刑法改正以降、男性からの相談も増加傾向にある。あるセンターでは、電話相談の 2 割程度が男性からの相談となっている（若年層に限らない全数）。他のセンターでも継続的に男性からの相談が寄せられている。

○　被害内容は強制性交が多くなっており、加害者の多くは男性である。

○　男性ゆえに、「人に言えない」、「情けない」との自責の念にある方が多く、自分で抱え込み、トラウマ等がひどい状況になってから相談に来るケースが多い。また、妊娠リスクがないためもあり、性暴力被害後すぐに開示しないことが多い。

○　男性被害においては、被害者に知的・発達等の障害のある方が多いとするセンターが複数みられる。障害のない性暴力被害者の被害開示が進んでいないことが影響している可能性もある。

○　相談に至った人においても、1 回の電話相談で途切れてしまう、支援を案内しても決断がつかない等の傾向にある。男性にとっても病院受診はハードルが高く、証拠採取に至らないことが多い。

○　精神科を受診していても性暴力に関する適切なケアがされておらず、精神状態が落ち着かないため、何度も電話で相談するケースも見られる。

○　また、ワンストップ支援センターの相談員側も男性支援に慣れていない、支援ノウハウが十分でない状況がみられる。男性相談員の関与も重要とされるが、一方で、加害者が男性で被害者のトラウマがひどい場合には男性相談員に恐怖心を抱くこともあり、対応に留意が必要となっている。

○　あるセンターでは、トランスジェンダーの方からの相談が頻回にみられている。

図表 3-3　男性の性暴力被害のケース例

種類	被害ケース（例）
職場の上司からの被害	• 被害にあう度に「やめてください」とは言っていたが、正社員になりたいという思いもあり、強く言えずにいるうちにどんどん悪化し、休職を余儀なくされた。 • 会社にも味方してもらえず、休職中に契約期間が満了となり退職となった。 • 酷いトラウマを抱え、相談・来所した。
学校の先輩からの被害	• 学生の頃、同性からのレイプ被害（先輩と後輩で上下関係があった）。

②障害者の性暴力被害

○　発達障害や知的障害をもつ方は性暴力被害にあいやすい傾向にある。

○　あるセンターの統計（対象：10～29 歳、期間：2021 年 4～11 月）では、直接支援をした方のうち、診断がある障害者は約 2 割となっている。診断はないが相談員がやり取りの中で障害の可能性を感じる方はさらに多くなっている。

○　他のセンターでも、親族等から複数回のレイプ被害がある知的・発達障害者、数年間の性的虐待を受けていた精神障害者からの相談がみられている。障害者の場合、特に普段から世話になっている人から性行為を強要された場合、断れないことがある状況が指摘されている。

○　ワンストップ支援センターでは、事前予約制として障害者への相談対応に備える等の努力をしているが、飛び込み来所等もあることから、対応力の向上が課題とされている。

③外国籍の方の性暴力被害

○　外国籍の方の被害への対応においては、言語が障壁となることが多い。

○　病院拠点型センターの場合には、（費用負担の問題はあるが）医療通訳を頼むことで言語問題の解消を図っている。

○　外国人対応が可能な弁護士を紹介するケースもみられる。

２）相談状況

（１）近年の相談件数の推移

①若年層からの相談件数の状況

○　全国的にみると、コロナの影響により、2019 年以降 2021 年上半期まで過去の被害についての相談が増加しており、全国のワンストップ支援センターに寄せられた相談は増加傾向にあるが、今回ヒアリング対象となったワンストップ支援センターにおいては、2020 年からは相談が増加基調から横ばいないしは減少に転じるセンターもみられた。

②増加の要因

○　相談件数増加の背景としては、10～20 代からの相談割合の増加や、二回目以上の相談者（リピーター）数の増加、性暴力被害者の周辺関係者（教職員、スクールカウンセラー、友人、親等）の相談に関する知識・意識の向上等が挙げられた。

③新型コロナウイルス感染症の影響

○　コロナや緊急事態宣言の下で、相談件数が増加したとするセンターと、減少したとするセンターがみられる。加害者とともに暮らしている性暴力被害者からの相談が多いか否かが増減をわける一要因となっていると考えられる。

○　コロナの下で増加したとするセンターでは、コロナ禍で孤立感が高まる中、過去の被害に関する相談が増えた（トラウマ等）、何度もかけてくる人が増えた等との意見がみられている。

○　コロナの下で減少したとするセンターでは、加害者が同居する性暴力被害者等において、相談がしにくくなっている状況が懸念されている。

④若年層からの相談の特徴

○　1 回相談につながっても、その後連絡が途絶えるケースが多い。「つながりにくく、途切れやすい」若年層の傾向に沿った対応が必要とされている。

（２）相談者・相談経路

○　本人からの相談が多いセンターと、本人以外からの相談が多いセンターにわかれる。

○　センターにより、統計の年齢区分が異なるため一概には言えないが、10 歳未満を含む区分（例：18 歳未満等）となっているセンターや、病院拠点型のセンターでは本人以外からの相談が多い傾向もうかがえる。

○　本人以外の内訳では、母親が多くなっている。親からの相談は徐々に増えてきている。

○　本人からの相談の場合、電話相談後につながらなくなることも多いため、親も含めることで継続的な支援が行いやすくなる。

○　本人の相談が多い背景として、親に助けを求められない状況（監護者性交等）にあることも懸念される。親に言えない場合には学校の先生に相談することが多く、学校から親に連絡が入るケースも多い。

○　一方、親や教師から相談が入るケースでは、開示が遅れる場合も少なくない（家庭や校内で被害が無視されたり隠されたりすることも）。

（３）相談機関の認知ルート

○　ワンストップ支援センターを認知したルートとしては、インターネット・HP 経由や、他機関・児童相談所等からの紹介が多くなっている。

○　警察との連携が進むセンターでは、警察からの情報提供も多くなっている。

（４）性暴力被害から相談までに要する期間

○　性暴力被害から相談までに要する期間として、72 時間以内の相談が多くみられるようになってきている。あるセンターの統計（対象：16～24 歳、期間：2021 年 4～11 月）では 4 割強、他のセンターの統計（対象：10～29 歳、期間：2020 年 4 月～2021 年 11 月）では約 2 割となっている。早期に相談につながった背景には、HP で検索しての迅速な連絡や、緊急避妊薬の知識浸透等が影響している可能性があるという。

○　一方で、性暴力被害後 1 か月後～半年での相談も多く、あるセンターの統計（対象：10～29 歳、期間：2020 年 4 月～2021 年 11 月）では約 3 割となっている。これらの性暴力被害者は、急性期はどうにか堪えたが、約 1 か月後から精神的に限界を感じたり、体調不良を起こして生活に影響が出てきたりして、相談に至ったケースが多くなっている。精神症状が継続し、PTSD へとつながるケースもみられる。

（５）相談手段の状況・ニーズ（電話、メール、SNS等）等

○　多くのセンターで、電話相談の 365 日 24 時間対応が進んでおり、夜間・休日の相談者に数多く対応している。

○　一方で、若年層向けにはメール、SNS 等のオンライン相談が重要になるとの意見が多い。特に若年層では、電話が苦手な人、加害者に携帯電話をチェックされている人、生活困窮者（スマートフォンはあるが SIM カードがなく、フリーWi-Fi 下でしかつながることができない人）等がみられることを背景としている。

○　（若年層とは関係なく）聴覚障害者向けにもテキスト相談が有効と認識されている。

○　現時点でオンライン相談窓口はないが、つながった相談者とメールでやり取りするケースや、性暴力に関する SNS 相談「Cure time」と連携しているケースもみられる。また、SNS 相談窓口を準備中のセンターもあった。

３－３．性暴力被害及び対象者別の状況（支援団体等へのヒアリングより）

若年層の性暴力被害者への支援団体等 5 か所へのヒアリングにより、①10 代女性の性暴力被害、②SNS・インターネットにおける性暴力被害、③痴漢被害、④LGBT の方の性暴力被害、⑤大学内における性暴力被害の 5 分野に関する状況について把握した。

本節では、各分野における被害の実態・傾向、相談状況について整理する。課題及び行政に求めることについては、3－4 項にまとめる。

【ポイント】性暴力被害及び対象者別の状況

〇10 代女性の性暴力被害

SNS で知り合った人、性売買斡旋業者（スカウト）、ホスト等からの加害がみられる。中でも、SNS で知り合った人からの性暴力被害が頻発している。

性暴力被害者の特徴としては、貧困・虐待を背景に家に居場所がない、家を出たい人が多い。また、公的支援機関へ不信感を持つ被害者も多い。家にも帰れない、お金もない、一時保護所にも行きたくない状況下で、危険とわかっていても、警察に見つかって家に戻されたり、一時保護所に入ったりするよりはましだと思い、見知らぬ人、スカウト、ホスト等について行ってしまっている。

コロナ禍で、親のステイホーム等で居場所がなくなる、経済的困窮が厳しくなる等の影響もあり、相談数は急増している。

相談は、HP、メール、SNS 等のインターネット経由が多い。音信不通になりやすいので「待ち」の姿勢にならず、定期的な連絡に努めることが重要である。

〇SNS・インターネットにおける性暴力被害

スマートフォンの普及、ポルノ動画投稿プラットフォームの存在により、素人でも性的動画をアップロードして収益化できる状況となっており、対象は性的画像から性的動画に移行。加害者は、事業者（AV 産業、性産業等）、個人に大別できるが、近年後者による加害が増加している。

アップロードされた画像・動画の削除依頼をプロバイダーに行うが、海外に本拠を持つ企業で日本にオフィシャルな窓口がない場合には削除要請に応じてもらえないことも。

相談件数は急増傾向にあり、特に中高生からの相談が増えている。10 代の場合、性的な画像を送信してしまった、盗撮をされて拡散してしまった等が多い。

公開されてしまった画像・動画等への対応に疲れ切った性暴力被害者や、自分を責めている性暴力被害者からの相談が多い。親にも相談できずにいる性暴力被害者が多い。匿名で相談してくるケース、警察への相談を提案するとフェードアウトしてしまうケースも多くみられる。

〇痴漢被害

全国における痴漢の検挙件数は 2019 年までは横ばい傾向にあったところ、2020 年には

約 3 割の減少をみせているが、これは、コロナ禍において通勤や外出の機会が減少したことが一因になっていると思われる。東京都では、10～20 代で検挙件数の 7 割超。男性の被害者も約 3%みられている。

犯行場所は、駅・乗物内が多く、路上、商業施設等でもみられている。犯行時間は通勤時間帯で約半数を占める。

○LGBT の方の性暴力被害

若年層の LGBT の性暴力被害には、根幹に差別がある事案が多く（加害者が差別的な言動をとる、知人・友人に相談・開示する中で性暴力被害にあう等）、身近な人（家族、学校・職場関連等）からの性暴力被害がほとんど。また、家族との関係が悪い場合、家を出て生活のために性産業に近いところで働く中で性暴力被害にあう状況や、友人探し等を目的に LGBT 向けの SNS サイトを利用する中で狙われる手口がみられる。

他に相談できるところがない、他に相談したところ十分な対応をしてもらえなかったこと等を理由に、LGBT 支援団体への相談が増えている。差別的発言・対応を受け、嫌な思いをしたり、パニック状況に陥ったりしている性暴力被害者からの連絡も。また、言いにくい、相談しにくいことから、相談までに時間がかかることが多い。

○大学内における性暴力被害

大学内で行われた調査によると、女子学生の約半数、男子学生の 2 割弱が、キャンパスで不快になる性的発言・ジョークを経験している。加害者は、先輩・後輩、教師・学生等の地位関係性を背景とした者が多い。性暴力は、飲み会やサークル活動中に発生しやすい。

不特定多数との接触が可能になる、チャットでの被害が起こりやすい、無責任な書き込みによる誤った知識・理解が拡がりやすい等の特性から、SNS が性暴力を発生しやすくしている状況がみられる。

学内等の環境・状況に関しては、学生が性暴力の正しい知識を学ぶ機会を得られていない、性に関する話題がタブー視されている、友人・家族等に無関心層が多い、学内相談所の認知度が低く利用率が低い等の課題がみられる。

１）10代女性の性暴力被害

主に 10 代の女性（家庭や学校に居場所がない、経済的に困窮している等）を対象に、性搾取や性暴力の被害に行き着くことのないように支援を行う団体から、10 代女性の性暴力被害の実態・傾向、相談の状況等についてヒアリングした。

（１）性暴力被害の実態・傾向

①性暴力被害ケース

○　性暴力の手口は多様・巧妙となっている。下記等の手口が挙げられる。中でも、SNS で知り合った人からの被害が頻発するようになってきている。

図表　３-４　10 代女性の性暴力被害ケース例

加害者	手口
SNS で 知り合った人	家に居場所がない 10 代女性が SNS で「＃家出、＃家に帰りたくない」と投稿すると数十秒間に 50～100 人の男性から「支援します」、「家に泊めてあげるよ」、「最寄駅までの電車代も出します」等のメッセージがくる。支援のフリをして性的行為を目的にしている。
性売買斡旋業者（スカウト）	路上で性売買斡旋業者（スカウト）から「今日泊まるところある」、「簡単にできる仕事あるよ」等と声をかけられ、買春につながるケースが多い。
ホスト	SNS でホストとつながり、優しく話を聞いてくれて、「お店の外で合おう」と言われると、自分は特別で大事にされていると錯覚してしまう。ホストの寮に宿泊したら罰金を払わなければならなくなった等といちゃもんを付けられ、その支払いに風俗で働くよう仕向けられる。

②性暴力被害者の特徴

○　性暴力被害者の特徴としては、貧困・虐待を背景に家に居場所がない、家を出たい人が多い。

○　SNS 等により性暴力被害が低年齢化する傾向にある。被害者には知的・発達障害、精神疾患をもつ人も少なくない。

○　性暴力被害者には避妊なしの性行為をしている人も少なくない。避妊をしてほしいと相手に伝えることが失礼なのではないか、嫌われてしまうのではないかと思っている。また、相手も避妊に対する拒絶感や、緊急避妊薬を飲めばいいとの安易な考え方を持つことが多い。

○　公的支援機関へ不信感を持つ人が多い。児童相談所の一時保護所に入ったが刑務所のようで安心して過ごせなかった、児童相談所は保護した子どもが置かれた背景（虐待により家に居場所がない等）を考慮せずに「指導」してきて、両親が心配しているとして家に帰された等の過去の体験を背景とする。児童相談所を嫌う子どもは、「SNS 等で声

をかけてくる男の方がまし」と考えがちになっている。

○　保険証を持ち歩いていない、家に置いてあるが帰りたくないため、性暴力被害後の緊急避妊措置時にも自費での診療が必要となるケースが多い。

③性暴力被害が生じる環境・状況

○　貧困・虐待を背景に家に居場所がない中で、路上に居ざるを得ないが、警察による巡回、民間警備会社による警備等により補導される可能性も高い。

○　補導された子どもたちが、児童相談所で一時保護されることが増えているが、一時保護所では安心して過ごせない上に、結局は危険な家に帰されてしまっている。

○　家にも帰れない、お金もない、一時保護所にも行きたくない状況下で、危険とわかっていても、警察に見つかって家に戻されたり、一時保護所に入ったりするよりはましだと思い、見知らぬ人、スカウト、ホスト等について行ってしまっている。

○　警察等は、子どもでなく、子どもに声をかけている大人をパトロールすべきである。

（２）相談の状況

①相談件数

○　コロナ禍で、親のステイホーム等で居場所がなくなる、経済的困窮が厳しくなる等の影響もあり、相談数は急増している。

○　10 代が中心だが、20 代からの相談も増加している。

②相談の特徴等

○　相談内容は多岐にわたり、複合的である。相談者は、貧困・虐待等を背景に家を出たいという人がほとんどである。

○　性暴力被害者本人からの相談がほとんどである。

○　HP、メール、SNS（LINE、インスタグラム、Twitter 等）等のインターネット経由が多い。相談者がアクセスしやすい方法を用意している。

○　音信不通になりやすいので「待ち」の姿勢にならず、定期的な連絡に努めることが重要である。

２）SNS･インターネットにおける性暴力被害

SNS･インターネットに関連して生じている人権侵害や性暴力･性搾取（リベンジポルノ、AV 出演強要等）の被害者支援を行う団体から、SNS・インターネットにおける性暴力被害の実態・傾向、相談の状況等についてヒアリングした。

（１）性暴力被害の実態･傾向

①性暴力被害ケース

○　スマートフォンの普及、ポルノ動画投稿プラットフォームの存在により、近年では素人でも性的動画をアップロードして収益化できる状況となっている。

○　最近は、対象が性的画像から性的動画に移行。動画により性的価値がさらに高まっている状況にある。

○　性暴力の手口は多様化・巧妙化の一途をたどっている。下記等の手口が挙げられる。

○　加害者は、事業者（AV 産業、性産業等）、個人に大別できる。近年、事業者による加害は横ばい傾向にあるが、個人による加害が増加している。

図表　３･５　SNS・インターネットにおける性暴力被害ケース例

	手口
1	出会い系で会った人とホテルに行き、性的画像・動画を撮られ、販売された。
2	交際相手に「私的な動画記録」と言われて撮影された動画が、AV として販売された。
3	高収入バイトをインターネット検索して知った「アダルトチャット」に出てみたが、視聴者リクエストに応えて行った性的様子を録画され、アダルトサイトで販売された。
4	インターネットで探したアルバイト（モニター、モデル等）には詳しい仕事内容が書かれていなかったが、実際は AV、デリヘルだった。
5	SNS で知り合い、優しくされ、やり取りの中で送った顔写真、性的画像を基に、勝手に性的なアカウントが作成された。

②性暴力被害が生じる環境･状況

○　ポルノ動画投稿プラットフォームの存在により、上記の手口で撮られた画像・動画をアップロードすることで簡単に収益化できる構造ができ上っている。また、これらのプラットフォームがリベンジポルノ、児童ポルノの温床にもなっている。

○　コロナ禍で学生がアルバイトできる場がなくなり、インターネットでアルバイトを探している時にひっかかってしまうケースも多い。また、両親等を失望させたくないとして、誰にも相談せず、泣き寝入りしてしまうことも少なくない。

○　SNS にアップロードされた画像・動画の削除依頼をプロバイダーに行うが、海外に本拠を持つ企業で日本にオフィシャルな窓口がない場合には削除要請に応じてもらえず、その間に画像・動画が拡散してしまう。

（２）相談・支援の状況

①相談件数

○　性的搾取、デジタル性暴力の相談は全国から寄せられている。

○　スマートフォン等の普及により、素人でも性的画像・動画の撮影が容易となったことから、相談件数は急増傾向にある。

○　特に、中高生からの相談が増えている。10 代の場合、性的な画像を送信してしまった、盗撮をされて拡散してしまった等のスマートフォンに関係する相談が非常に多い。

○　相談増加の要因として、本団体の相談窓口が周知されたことも大きい。性暴力被害者として声をあげていいことが少しずつ周知されてきている。加えて、他の相談機関・団体からの相談も増えている。

②相談の特徴等

○　相談の特徴として、①公開されてしまった画像・動画等への対応に疲れ切った性暴力被害者からの相談が多い、②自分を責めている性暴力相談者が多い、③親にも相談できずにいる人が多い、④被害により、学校にいられない、地元に帰れない、就職できないとの相談が寄せられる等の特徴がみられる。

○　昔（例えば 10 年前）撮られた／送った写真が今どうなっているか怖いという相談も増えている。

○　10 代を中心に、親にも相談できずにいる人が多い。また、匿名で相談してくるケース、警察への相談を提案するとフェードアウトしてしまうケースも多くみられる。

○　画像・動画が流通してしまい、被害が広まると、もう普通の生活はできず、「性産業でしか生き残れない」と考える被害者も出てくる。

○　男性ポルノの市場性も高く、アルバイトと称して、体育会の男性大学生等を狙った撮影会が催され、画像・動画が流出している。男性被害は軽視されがちであることも課題である。

３）痴漢被害

痴漢被害の対策対応を担当する行政機関から、痴漢被害の実態・傾向等について現状をヒアリングした。

（１)性暴力被害の実態・傾向

①検挙件数

○　痴漢（盗撮は含まない）の全国の検挙件数は、2019 年までは横ばい傾向にあった。2020 年には約 3 割の減少をみせているが、これは、コロナ禍において通勤や外出の機会が減少したことが一因になっていると思われる。

②若年層の被害

○　東京都における 2018 年～2020 年の痴漢の検挙状況から、被害者を年齢別にみてみると、10～20 代で全体の 3/4 を超えている。この状況は過去 3 年間あまり変わらない。

○　また男女別には、男性の痴漢被害者も約 3%みられている。

③被害の傾向

○　全国における 2018 年～2020 年の痴漢の検挙状況をみると、犯行場所は、駅・乗物内が５割超と最も多く、次いで路上、商業施設がそれぞれ 1 割～２割程度となっている。

○　犯行時間は 6～9 時が約 3 割、18～21 時が約 2 割と、通勤時間帯で約半数を占める。一方、その他時間帯も一定水準でみられている。

４）LGBT の方の性暴力被害

LGBT（性的マイノリティ）の性暴力サバイバーにとって生きやすい社会づくりのため、政策提言、相談事業等を行う団体から、LGBT の方の性暴力被害の実態・傾向、相談の状況等についてヒアリングした。

（１）性暴力被害の実態・傾向

○　若年層の LGBT の性暴力被害には、根幹に差別がある事案が多い（加害者が差別的な言動をとる、知人・友人に相談・開示する中で性暴力被害にあう等）。

○　本団体への相談者のうち約 8 割が、24 歳までに 1 回目の性暴力被害にあっている。

○　身近な人（家族、学校・職場関連等）からの被害がほとんどである。

○　家族との関係が悪い場合、家を出て、生活のために性産業に近いところで働く中で性暴力被害にあう状況がみられる。

○　また、初めて LGBT コミュニティに来た若者を狙って、優しく近づき加害する昔ながらの手口もみられている。

○　友人探し等を目的に LGBT 向けの SNS サイトを利用する人が多いが、性別を偽りながら近づいてきて、レイプに至る手口がみられている。

（２）相談・支援の状況

①相談者の傾向

○　本団体への若年層からの相談では、トランスジェンダーからの相談が圧倒的に多くなっている。他に相談できるところがない、他に相談したところ十分な対応をしてもらえなかったこと等を理由とする。ほぼすべてが本人からの相談である。

○　相談者は、日常生活が可能な人から精神病院への強制入院が必要な人まで多様である。発達障害のある人からの性暴力被害相談も増えている。

○　相談機関での相談、警察・病院・弁護士の対応において、差別的発言・対応を受け、嫌な思いをしたり、パニック状況に陥ったりしている性暴力被害者が連絡をしてくるケースもある。

②性暴力被害から相談までに要する期間

○　トランスジェンダー層では相談までに時間がかかることが多い（言いにくい、相談しにくい）。また、時間が経ってから過去の被害が性暴力被害だったと認識し、相談してくるケースも少なくない。

○　件数的に多くはないが、過酷な DV 被害にあう最中での連絡もある。その際には、迅速な対応が必要となる。

５）大学内における性暴力被害

所属大学内での性暴力や性差別をなくすための取組をしている団体から、大学内における性暴力被害の実態・傾向等についてヒアリングした。

（１)性暴力被害の実態･傾向

①性暴力被害ケース

○　本団体の調査結果（2020 年実施）によると、女子学生の約半数、男子学生の 2 割弱が、キャンパスで不快になる性的発言・ジョークを経験している。

○　大学生になると、金銭面・行動面での自由度が高まり、交友関係も広くなる一方で、性暴力に関する知識が少ないため、性暴力被害にあいやすい年代と言える。

○　加害者は、先輩・後輩、教師・学生等の地位関係性を背景とした者が多い。1 年生の被害者の多くは先輩が加害者となっている。

○　性暴力は、飲み会やサークル活動中に発生しやすい。

図表　３･６　学内における性暴力被害ケース例

	手口
1	地位関係性を背景
2	カップル間、サークル、塾・バイト先の知り合いからの被害
3	スマホ、SNS 経由（SNS の DM を利用し、性器露出画像が送られる等）
4	酔わせて性行為／避妊なしの性行為／リベンジポルノ　等
5	痴漢被害、盗撮被害

②SNSの影響

○　不特定多数との接触が可能になる、チャットでの被害が起こりやすい、無責任な書き込みによる誤った知識・理解が拡がりやすい等の特性により、SNS が性暴力を発生しやすくしている状況がみられる。この背景には、正しい知識の情報提供源が少ないこと、性教育が不足していること、性犯罪を助長するような危険な性表現に対する規制がないこと等が挙げられる。

○　SNS の特徴である、インプレッション（閲覧）が多い投稿を優遇する（目につきやすくする）ことが影響する等、単なるユーザー側のリテラシーの有無に留まらない構造的課題が指摘されている。

○　一方で、正しい情報を発信するインフルエンサーの存在が、性暴力に関する正しい知識の取得や、性暴力を見逃さない環境の構築に好影響を及ぼす効果もある。

③心身への影響

○　本団体の調査結果によると、性暴力被害後の心身への影響は「特に変化なし」が多くなっているが、一方で、心身不調、自己肯定感低下等もきたす性暴力被害者もみられる。

○　フラッシュバック、公共のトイレが使えなくなる、ズボンのジッパー開閉音が怖くなる、生理が来ない恐怖等のほか、学校をやめるケースもみられている。

④学内等の環境・状況

○　本団体の調査の結果、性暴力に該当する行為としてどのようなものを認識しているかについて、レイプ、セクハラは約 95%、デート DV、盗撮は約 8 割となり、性暴力の正しい知識が周知されていない可能性がある。

○　大学で性暴力に関する説明会等を受講したことがない学生は、2 年生以上で約 7 割、1 年生で 8 割存在しており、性暴力の正しい知識を学ぶ機会を得られていない。

○　また、性暴力被害者からの相談に向け、学内相談所が設置されているが、認知度は低く、あまり利用がみられていない。学内相談所は事前申請が必要であること、平日昼間のみの対応であること、相談員が教員等であること等が、利用が少ない要因として挙げられる。

○　トピック的に性に関する話題がタブー視されている。また、友人・家族等に無関心層が多いことなどから、性暴力に対する問題意識がなかなか浸透していかない状況にある。

３－４．若年層の性暴力被害への対応課題及び行政･関係者に求めること

ワンストップ支援センター5 か所及び若年層の性暴力被害者への支援団体等 5 か所へのヒアリングから、若年層の性暴力被害への対応課題及び行政・関係者に求めることについて整理する。

下表に、若年層の性暴力における課題・要望、センター・団体等の相談・支援対応における課題・要望の二つに分けて取りまとめる。

図表 ３-７ 課題及び行政・関係者に求めること

課題	行政・関係者に求めること
若年層の性暴力における課題・要望	
性暴力に関する知識の不足 ・ 若年層では性暴力・性犯罪についての正しい知識が不足。学ぶ機会も不足。 ・ 知識不足により、自らを守れない、早期相談･支援につながらない、性暴力被害者の望まない妊娠の防止や安全確保につながらないケースがある。 ・ 加害者側に知識不足、間違った知識がみられる。 ・ 家族、友人等の無関心が、相談機会の喪失、性暴力被害者の孤立につながっている。 ・ 若年層の性暴力の背景に差別意識がみられる。	・ 早期からの／年齢に応じた性教育 早期から性暴力やセクシュアル･リプロダクティブ・ヘルス／ライツの知識を身につけ、早期相談や対応につなげる。 ・ 地域の関係者全体への周知・啓発 性暴力被害者の関係者の意識向上を図り、被害の顕在化、加害の抑制につなげる。 ・ 親や家庭への教育・啓発 家庭環境が自己肯定感、被害のあいやすさに影響することから、親や家庭への教育・啓発を行う。 ・ 加害予防教育、加害者向け啓発 正しい教育、啓発により、加害意識の薄い加害者をなくし、加害をさせないメッセージを発信する。 ・ ジェンダー教育等 生命（いのち）を大切にする、正しい教育・啓発により差別意識をなくす。
孤立する／居場所がない性暴力被害者 ・ 誰にも相談できず、信頼できず、孤立する性暴力被害者がいる。 ・ 家にも学校にも居場所がなく、繁華街･SNS 等に居場所を求める若年層が増えている。	・ 居場所の設置拡充 家にも学校にも居場所がない、性暴力被害遭遇リスクの高い若者のための居場所を増やす。 ・ パトロール（オフライン＋オンライン）の強化 若者がたまり場とする繁華街や SNS での声掛けやパトロールを強化する。

課題	行政・関係者に求めること
<u>法制度の改善</u> ・ 性暴力・性被害の撲滅に向けた法的措置が必要。 ・ 性交同意年齢、暴行・脅迫要件等により、望まない性行為を性犯罪に結び付けられないケースが少なくない。 ・ 関係諸機関のさらなる連携が必要。 ・ 加害の減少につながる制度設計が必要。 ・ 性暴力被害時の証拠採取等の処置が初診料に含められる現状。 ・ 成年年齢引き下げで18～19歳の性暴力被害リスクが上昇。	・ <u>刑法の改正</u> 性交同意年齢の引き上げ、暴行・脅迫要件の緩和、夫婦間における強制性交等罪の明文化等。 ・ <u>都道府県における条例の整備</u> 性暴力撲滅の実現に向けた条例整備。 ・ <u>性的搾取産業の需要減を図る制度見直し</u> 売り手ではなく、買い手を処罰し、需要を減退・縮小させていく制度見直し（ノルディックモデルの導入） ・ <u>診療報酬制度の見直し</u> 性暴力被害者の診療、証拠採取への適正な対価の設定等。 ・
相談・支援対応における課題・要望	
<u>アウトリーチの不足</u> ・ 若年層性暴力被害者は、相談窓口につながりにくく、つながっても途絶えやすい。 ・ 相談窓口の認知度の低さ、行政機関への心理的距離等から、早期相談に結び付かない。 ・ 公的支援機関も「待ち」の姿勢をとっている。	・ <u>アウトリーチ活動の強化</u> 若年層がいる場所（繁華街、SNS 等）で、オフライン（繁華街等での声掛け、居場所の設置等）、オンライン（SNS 等による広報等）の双方から、相談ができることを伝えていく。
<u>若年層・多様な被害者への対応力不足</u> ・ 若年層では SNS・メール等が普及、電話は一般的でない。 ・ 男性、LGBT 被害者への対応力の向上が必要。 ・ 障害者等への対応力が限られている。	・ <u>若年層にあわせた相談手段の提供</u> 若年層に馴染みのあるオンラインによるテキストコミュニケーションでの相談窓口が必要。 ・ <u>多様な相談者への対応力向上</u> 男性・LGBT 対応の経験値向上と性暴力被害者が安心して受診できる医療機関との連携、視覚・聴覚障害者対応の環境整備、発達・知的障害者への手厚い支援等。
<u>地域におけるトラウマケア体制の不足</u> ・ 若年層は性暴力被害を被害と認識するのが難しく、成長とともに社会的不適応にいたるケースもある。 ・ 地域に、性暴力被害者のトラウマケアを継続実施するシステムが不足。 ・ 児童心理のケアができる精神科医が少ない。	・ <u>心理カウンセリングの継続的・安定的な提供</u> 地域の精神科医・公認心理師等と連携した心理カウンセリングの定期的な提供と、カウンセリング費用の補助が望まれる。

課題		行政・関係者に求めること
	<u>避難場所の不足</u> ・ ワンストップ支援センターや支援団体内にシェルター機能がなく、避難場所の確保が難しい。	・ <u>官民シェルター等との連携の拡充</u> 女性センター、児童相談所、民間シェルター等と連携した避難場所の確保。 ・ <u>シェルター数の増大</u> 従来型シェルターに加えて、宿泊施設等を活用したシェルター機能の拡充と宿泊費用の助成が望まれる。
	<u>若年層性暴力被害者をとりまく関係機関の連携不足</u> ・ 若年層性暴力被害者を中心に、関係機関が連携して支援をする体制の強化が必要。 ・ 公的支援窓口による二次被害防止、性暴力被害者からの信頼向上が重要。	・ <u>協力病院の確保</u> 産婦人科、精神科、小児科、開業医等との連携、信頼関係構築、受診調整等。 ・ <u>学校との連携強化</u> 学校との連携による迅速・的確な支援体制の実施等。 ・ <u>警察との連携強化</u> 警察との連携による早期相談・支援等。 ・ <u>児童相談所との連携強化</u> 児童相談所との連携や役割分担による早期相談・支援等。 ・ <u>法律事務所との連携強化</u> 法律事務所との連携による迅速・的確な法的支援の実施等。 ・ <u>医療機関を拠点とした支援体制の構築と医療体制の充実</u> 性暴力被害者の診療等に精通し、24 時間対応できる医療機関を中心とした支援体制（病院拠点型ワンストップセンター）の拡充。

第4章　まとめ

最後に、本アンケート及びヒアリングにより得られた回答の考察と今後の政策課題について、検討会委員の分析・見解をとりまとめる。

4－1．若年層性暴力被害の実態に関する考察と今後の政策課題

本アンケート及びヒアリングは、必ずしも十分に把握されていない若年層（主に 16～24 歳）の性暴力（望まない性的な言動）被害の実態に関する情報収集を行うことにより、様々な支援関係者が若年層への適切な対応や支援を検討・実施する際の基礎資料として活用いただくことを目的に実施した。

対象となる支援関係者として 2 つの群を意識して分析を進めた。一つ目の群は、若年層の被害者を含む性暴力被害に対して、情報発信・予防活動に携わっている関係者である。関係者が若年層の状況を理解し、若年層に対してより効果的な早期発見とケアの開始、さらには性暴力被害への予防教育を進めていくことができるように、具体的な課題像を示すことを意識した。もう一つの群は、深刻な性暴力被害を含む現実の被害者に対して、支援活動を行っている関係者である。関係者の支援活動に役立つように、性暴力被害者の被害実態とともに、支援につながっていない性暴力被害者の実態とその人たちが支援につながるための具体的な情報や条件等についての把握に努めた。先の p.7 に挙げたリサーチクエスチョンの諸項目を意識に留めながら、以下のまとめを行う。

1）オンラインアンケート

若年層の性暴力被害の遭遇状況について

アンケートでは、若年層に焦点を当て、スクリーニング調査においては性暴力被害の分類や手口ごとに遭遇率を把握するよう目指した。Web アンケートモニターの対象特性、及び全回答率の低さから、一般母集団の特性を反映する疫学的なデータとは言えず、任意の回答に基づいた結果ではあるが、得られた結果（言葉による性暴力被害：17.8%、視覚による性暴力被害：7.4%、身体接触を伴う性暴力被害：12.4%、性交を伴う性暴力被害：4.1%、情報ツールを用いた性暴力被害：9.7%）は、一定の参考値としての意味を持つものと考える。

このようなアンケートへの回答は心理的負担が大きく、回答に至ることができなかった方がいる可能性も念頭に置く必要があるが、回答からは、多くの人が性暴力被害にあっており、かつ相談に至っていない現状がわかった。

若年者の性暴力被害経験者と支援機関

性暴力被害経験者を対象に、若年層における性暴力被害の実態把握を目指した本調査においては、多様な性暴力被害にあわれた被害者 2,040 名（有効回答）からの率直な回答を得ることができた。ただし、性暴力被害者である回答者の多くが、ヒアリング対象となったワンストップ支援センター等の相談機関にはアクセスできていない人たちであることに留意が必要である。

全体でみると、警察（5.6%）、ワンストップ支援センター（1.2%）等の官民の専門機関に被害相談できたのは 14.1%である（p.28、図表 ２-３２）。医療機関への受診が必要など心身のリスクが高い性交を伴う性暴力被害者でも、警察（7.8%）、ワンストップ支援センター（4.2%）等の官民の専門機関に被害相談できたのは 25.2%である（p. 55、図表 ２-５７）。

若年者の性暴力被害経験者の被害状況

性暴力被害分類別の被害実態の分析の中では、性暴力被害分類ごとの加害者、被害状況、相談状況、性暴力被害が生活や心身に及ぼす影響等について分析した。

性暴力被害分類ごとの特徴として、「言葉による性暴力」は学校で起こることが多いこと、「視覚による性暴力」や「身体接触を伴う性暴力」は路上や公共交通機関で見知らぬ人から受けることが多いこと、「性交を伴う性暴力」は社会的立場が上位の者による加害が多く、相談に至りにくく、性暴力被害からの回復状況が芳しくないこと、「情報ツールを用いた性暴力」はインターネットや SNS で被害にあうことが多く、相談に至りにくいこと等の実態が認められている（第 2 章を参照されたい）。ここで強調しておきたいことは、一般的には軽いとされている「言葉や視覚による性暴力」等も、性暴力被害からの回復状況をみると、もとどおりに回復したとの回答者は 37.2%しかなく、残りの 54.4%は回復途上にあり、8.5%は回復したかどうかわからないと回答しており、被害の程度が軽いとは言えない状況にあることである（p.38、図表 ２-４３）。

また、男性や X ジェンダー・ノンバイナリーの方の性暴力被害の遭遇率の高さ、相談の難しさが改めて明らかになった。男性被害者は、もちろん女性被害者同様、精神的後遺症が強いと指摘されているが、今回の調査では、「生活の変化は特にない」、「被害を相談していない」との回答が多かった。その背景には、「男性は性暴力被害にはあわない」、「被害にあったとしても精神的影響は少ない」といった、男性のレイプ神話の影響、あるいは「男は強くあらねばならない」といったジェンダーバイアスを内在化しているため、「相談しない」という問題があるのかもしれない。さらに、X ジェンダー・ノンバイナリーの方の性暴力被害遭遇率が高い一方で相談につながっていない状況がある。背景には、相談機関（資源）の乏しさに加えて、相談機関に自己のジェンダーを説明することが難しかったり、ジェンダーアイデンティティをめぐる傷つきがあるため相談できない可能性が示唆された。本調査における男性や X ジェンダー・ノンバイナリーの回答者は、そうした偏見や社会的圧力の中での困難を感じつつも、あえて、このアンケートに積極的に回答しようという明確な意思を持った方々に限られている可能性もある。

重篤な性暴力被害の状況と支援について

性暴力被害の重篤さ、性暴力被害からの回復状況の観点からは、低年齢時点での被害、継続被害、様々な性暴力の重複被害の悪影響が大きいことが明らかである（データ編　図表６６、図表７６、図表８７）。

まず、未就学時に受けた性暴力被害は、加害者が親や兄弟などからの性的虐待が 28.8%、通っていた学校や地域活動などの関係者が 53.8%と、身近な大人からの被害が多く、現在でも 23.1%が「全く回復していない」と答えており、予後は極めて悪いことが読み取れる（データ編　図表５４、図表６６）。

この背景には、低年齢の子どもにおいては、いわゆるグルーミングという「近づいてきて可愛がる手なずけ行為から始まり、徐々に性暴力に発展していく」加害行為がしばしば行われていることが推測される。子どもは、それが被害とは気づかず、断ることもできないことが知られている。また被害者自身が可愛がられていると認識しているため、自らから加害者に接近することもあり、大人になって被害だったと認識した際に、自分を責めることが多い。低年齢の性暴力被害者は、専門機関へ被害相談に至る比率が低く、アンケートからも「どこに相談してよいのかわからなかった」、「被害かどうかわからなかった」、「低年齢で相談することを思い浮かばなかった」等の回答が多くみられた。このような被害が多いことを社会全体で認識し、低年齢層の子どもと関わる大人の中に子どもへの加害者が混じる危険性を充分に意識すると同時に、子どもの被害を見落とさないように周囲が見守ることが必要である。

また、言葉や視覚による性暴力で身体的な接触に至っていない被害であっても、フラッシュバックを起こすことがある。社会的には身体接触や強制性交に至る性暴力被害よりは軽く扱われやすい被害であっても、実際はそうではなく、性的な暴力が人に与える影響は深刻な場合がある。調査の結果からは、たとえ社会的には軽微な出来事だと認識されていても、被害当事者自身の主観的な受け止めが軽いものであっても、本当に影響が軽いとは限らないことがわかる。性暴力被害にあったらそれが被害であると認識でき、相談にスムーズにつながることができるようにする、あるいは周囲が SOS を適切にキャッチし対応できるようにするための方策が求められる。

性暴力被害における当事者の支援ニーズ：支援アプローチ上／政策上の課題

性暴力被害者にとって、最初に相談した相手が、「話を聞く、慰め・励ます、助言をする」等のポジティブの対応をした際には、回復状況がよくなる傾向が認められる（データ編　図表８０）。

一方で、慰める、励ます、助言をするという行動は、被害当事者の状態や意向に沿わない方向の場合、二次的被害を与える可能性もある。しかし、周囲の人が傍観者にならず、その状況に積極的に介入したり、その後、声をかけたりサポートしたりする“アクティブ・バイスタンダー”の概念が今後ますます重要になることは疑いない。

性暴力被害を受けた直後及び現在において被害者が希望する必要な手助け・支援としては、「話を聞いてもらう」、「精神的な支え」が挙げられるとともに、「わからない」、「特になし」との回答も多くみられた。特に、「わからない」と回答した被害者を詳細にみると、重複被害、継続被害を受けている人が多く、回復状況がよくないために具体的な支援について

考えることができない状況が推察される（p65-66、図表　2-６４、図表　2-６５、データ編図表９０、図表９１、図表１０２～図表１０５）。

このように、性暴力被害者、特に今回の調査対象である若年層の性暴力被害者においては、具体的・社会的な支援が思いつかず、どちらかと言えば、プライベートな情緒的なサポートを求めるところで立ち往生しているように読み取れる。背景には、低年齢・若年層の性暴力被害者に対して、どのような支援が重要で、どのような支援を受けられるのかといった情報が届いていない状況があるように思われる。

支援者側は、令和3年度から開始された「生命（いのち）の安全教育」（文部科学省）等の情報を、学校教育等の中でより広く若年層に届けることが重要である。性暴力被害者は、自分の被害を恥じ、そのことで自分の周囲の人たちを驚かせたり、悲しませたり、怒らせたりすることをおそれ、また、自分の「落ち度」を指摘されて責められたり、信じてもらえる確信が得られないことが多いので、支援者はその心理状況を理解し、被害者が性暴力被害の継続から離脱し、安全を保障され、安心して支援を受けられることを伝えていくアプローチのあり方を熟慮する必要がある。

また、アンケートで、特に「言葉による性暴力」は学校・大学で多く起こっていること、その他の性暴力においても加害者が学校関係者（教職員、先輩、同級生、クラブ活動の指導者など）が多いこと、一方で性暴力被害者は、学校関係者（教員、養護教諭、スクールカウンセラーなど）にも多く相談していることより、若年層の性暴力の防止・予防に向けては、学校・大学が担う役割が期待される。若年層が多くの時間を過ごす学校や大学等の教育現場での取組の充実は、今後の重要なポイントといえる。

さらに被害者へのアンケートでは、性暴力被害を相談しやすくするために、「社会全体における性犯罪・性暴力への認識の向上」、「性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための教育」、「早期からの性の安全に関する教育」等が求められている。性暴力被害者自身やその家族がただちにワンストップ支援センターに相談するのはハードルが高くても、被害に気付いた友人・知人、学校教員やスクールカウンセラーが寄り添って相談・支援につなげていくことができるように、社会全体で性暴力を防ぐ環境の醸成に向けた、周知・啓発活動が必要である。

なお、本報告書には一部抜粋掲載としているが、回答者の自由意見は貴重な情報であり、支援者にとって参考となる情報である。データ編をぜひ参照されたい。

２）ヒアリング

若年層への性暴力の手口の複雑化・巧妙化と被害状況、相談ニーズ

性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターのヒアリングからは、若年層への性暴力の手口が複雑化・巧妙化していること、性暴力が「家庭内の性的虐待、立場を利用した性暴力、酒・ドラッグ等の使用、交際相手からの性暴力、痴漢、レイプ」等多様化していることがうかがえた。さらに、スマートフォンや SNS の普及、コロナ禍による孤立等が

この状況を促進しており、複雑な影を落としていることも指摘された。一方、警察との連携、性暴力被害に関する周囲の人々の理解、緊急避妊薬の知識浸透等が進んでおり、相談につながるケースもあることがわかった。

支援団体等へのヒアリングでは、様々な被害ケース、手口があることがわかり、性暴力被害・被害者分野別に、若年層の性暴力被害の構造や機序とその対応・支援策等が明らかになった。例えば、「貧困・虐待を背景に家に居場所がないために繁華街にいる 10 代女性にとっては、補導・一時保護されて家に戻されるよりも、危険を承知で見知らぬ人についていくほうがまだ良いと感じられるような状況」、「差別を受けている若年層 LGBT が友人に悩みを打ち明けたり、友人を探して LGBT 向け SNS を利用したりする中で性暴力にあってしまう状況」、「動画をアップロードすることで素人でも簡単に稼げてしまうポルノ動画投稿プラットフォームが存在し、そのために苦しむ若年層被害者がいること」などに対し、各支援団体がきめ細やかに支援している現状がわかった。これらの若年層に対して、行政が民間機関の知見を参考に、今後、支援関係者及び地域社会は何ができるのか、すべきなのか等を考える必要がある。

若年層性暴力被害者の相談へのつながりを維持・強化するためのオンライン窓口、アウトリーチ活動

ヒアリングで併せて指摘されたのが、若年層の「つながりにくさ、途切れやすさ」である。一度、相談につながっても、その後連絡が途絶えることが多いが、期間をおいて再びつながることもあるという。このような若年層とのつながりを維持・強化するための方法として、SNS 相談・チャット相談窓口の提供への意識が高まっていることがうかがえた。支援団体では、音信不通になりやすい若年層に対して、「細い糸でもよいのでつながりを保つため」に、若年層がアクセスしやすい SNS、HP 等を用いた相談への 24 時間対応や、「待ち」の姿勢に留まらず、定期的なプッシュ連絡、オンライン（SNS 等）やオフライン（繁華街、関連コミュニティ等）へのアウトリーチ活動等に積極的に努めていることが重要との指摘があった。

若年被害者に対するアンケート結果からも、性暴力被害を相談しやすくするための要素として、24 時間・365 日対応、オンライン対応、相談無料の相談窓口など、若年層がアクセスしやすい相談窓口の推進・周知が求められている。

今後、性暴力に関する SNS 相談「Cure time」との連携や、支援団体独自の SNS 相談窓口の準備等が進んでいくことが期待される。

性暴力撲滅に向けた法制度等の対応

ヒアリング対象機関・団体が行政や地域に求める事項として、法制度等の整備に関する意見が多くみられた。性交同意年齢の引き上げ、暴行・脅迫要件の緩和、夫婦間など親密な関係における強制性交等の明文化等を核とした刑法改正や、性暴力撲滅の実現に向けた都道府県等の条例整備が挙げられた（アンケートでも、性暴力のない社会にするために、刑法の

改正・厳罰化が必要とする意見は約 6 割に達している)。

４－２．最後に

以上、本アンケート及びヒアリングでは、それぞれに限界性はあるものの、日本における一般若年層における性暴力被害の実態については貴重な情報を得たと確認している。

若年層の性暴力被害者への支援においては、本報告書の後に挙げる詳細な個々のデータ、自由記述に記載された回答者の声をぜひ参照していただきたい。

自由意見に述べられた回答者の思いに応える取組が今後、広く共有・展開することを強く期待する。

参考資料　アンケート質問票

下記にアンケート質問票を示す。

1）スクリーニング調査

図表 0-1　スクリーニング調査 質問票

アンケート画面開始

Page 1

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0　50　100(%)

このアンケートは、性暴力(ここでは、「あなたが望まない性的な言動」をさします)により、被害を受けた若い世代の人の状況について調べ、よりよい施策(例えば、被害を受けた人が一人で悩んだり、難しい状況におかれたりせず、十分な支援を受けるための効果的な制度など)を検討することを目的に、内閣府が行うものです。
このアンケートが上記目的以外に使われることは一切ありません。

アンケートへの回答はご負担かと思いますが、ご協力いただけますと大変ありがたいです。アンケートは、多くは選択式で、約10分で終了する内容となっています。

ご協力をいただける方は、このページをよくお読みください。そして、同意いただける場合には「アンケートに回答する」をご選択の上、次のページに進んでください。

【アンケートへのご協力について】
・このアンケートでは、あなた自身があわれた性暴力被害についておたずねします。
・この先、被害内容を具体的に質問します。そのため、負担に感じる場合もあるかもしれません。回答するのがつらいと感じた場合には、回答をやめ、休む時間を取ってください。もしくは、アンケートへの回答自体をやめても構いません。
・決して無理をせず、あなたのこころとからだを一番大切にしてください。
・なお、回答により、気分が不安定になったり、誰かに相談したくなったら、最寄りの性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターにつながる全国共通短縮番号「#8891(はやくワンストップ)」、性暴力に関するSNS相談「Cure time(キュアタイム)」までご連絡ください。
●#8891(はやくワンストップ)
https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/consult.html
●Cure time(キュアタイム)
https://curetime.jp/

【プライバシーについて】
・このアンケートでは、個人が特定される内容はうかがいません。
・回答の内容の多くの項目は、統計的にまとめられます。
・自由に記述いただく項目についても、個人が特定されかねない情報が含まれていた場合、すべて削除した上で取り扱います。

【アンケート実施・お問い合わせ先】(受付時間 平日 9:30～18:00)
株式会社リベルタス・コンサルティング 担当:富永(とみなが)
TEL:070-3243-7593(直通)

SC0
以上の内容を確認いただいて、同意していただける場合は下記の「上記を確認し、アンケートに回答する」をご選択の上、以降の質問に回答をお願いいたします。

1 ○ 上記を確認し、アンケートに回答する
2 ○ 回答しない

次へ

0　50　100(%)

Page 2

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

F1
あなたの性別または性自認をご記入ください。

1 ○ 女性
2 ○ 男性
3 ○ Xジェンダー・ノンバイナリー
4 ○ その他
5 ○ 答えたくない

F2
現在の年齢をご記入ください。

[ ] 歳

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 3

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

F3
あなたの所属または職業は次のどれにあたりますか。

1 ○ 高校生
2 ○ 短大生・専門学校生
3 ○ 大学生
4 ○ 大学院生
5 ○ 勤め人(常勤)
6 ○ 勤め人(非常勤・パートタイム・アルバイトなど)
7 ○ 自営業(事業の経営者・家業の手伝い・内職など)
8 ○ その他の仕事
9 ○ 専業主婦・主夫
10 ○ 無職

次へ

0 50 100(%)

Page 4

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

SC1
あなたは今まで下表に示すような出来事にあったことがありますか。(それぞれひとつずつ)

	回答方向	ある	ない
1	言葉による性暴力 (言葉で性的な嫌がらせを受けた、体の特徴についてからかわれた、いやらしいことを言われた など)	1○	2○
2	視覚による性暴力 (相手の裸や性器を見せられた など)	1○	2○
3	身体接触を伴う性暴力 (体を触られた、抱きつかれた、キスをされた、相手の体を触らせられた、服を脱がされた・脱がせられた、性器を押し付けられた、体液をかけられた など)	1○	2○
4	性交を伴う性暴力 (相手の身体の一部や異物を無理やり膣や口、肛門に挿入された、避妊なしに性交させられた など)	1○	2○
5	情報ツールを用いた性暴力 (インターネット・携帯電話・スマホなどで性的に嫌な経験をした、見たくない画像や動画を見させられた、下着や裸を撮影された、下着姿や裸の写真を送るよう強要された、なりすました相手から性的な嫌がらせを受けた など)	1○	2○

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 5

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

SC2
SC1で選んだ被害の分類のうち、あなたにとって最も深刻なもの/深刻だったものはどれですか/どれでしたか。

1 ○ 言葉による性暴力
(言葉で性的な嫌がらせを受けた、体の特徴についてからかわれた、いやらしいことを言われた など)

2 ○ 視覚による性暴力
(相手の裸や性器を見せられた など)

3 ○ 身体接触を伴う性暴力
(体を触られた、抱きつかれた、キスをされた、相手の体を触らせられた、服を脱がされた・脱がせられた、性器を押し付けられた、体液をかけられた など)

4 ○ 性交を伴う性暴力
(相手の身体の一部や異物を無理やり膣や口、肛門に挿入された、避妊なしに性交させられた など)

5 ○ 情報ツールを用いた性暴力
(インターネット・携帯電話・スマホなどで性的に嫌な経験をした、見たくない画像や動画を見させられた、下着や裸を撮影された、下着姿や裸の写真を送るよう強要された、なりすました相手から性的な嫌がらせを受けた など)

次へ

0 50 100(%)

Page 6

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

SC3
前問で選んだ最も深刻な/深刻だった被害の分類について、その被害に最初にあったとき、あなたは何歳でしたか。
あなたが選択した分類
【○○○(SC2回答テキスト再掲)】

SC3
SC1で選んだ被害の分類について、その被害に最初にあったとき、あなたは何歳でしたか。
あなたが選択した分類
【○○○(SC2回答テキスト再掲)】

[ ] 歳

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 7

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

SC4
あなたは今までに下表に示すような出来事・手口にあったことがありますか。
(それぞれひとつずつ)

	回答方向	ある	ない
1	AV出演強要 (「モデル・アイドルになりませんか」と声をかけられ、その後、聞いていない・同意していない性的な行為や、行為中の「写真」や「動画」の撮影をされた)	1○	2○
2	JKビジネス (アルバイトへの応募をしたところ、約束していない性的な行為を要求された)	1○	2○
3	レイプドラッグ (薬物などにより意識がない・もうろうとした状況で、性的行為をされた)	1○	2○
4	酔わせて性的行為を強要 (飲酒により意識がない・もうろうとした状態で性的行為をされた)	1○	2○
5	SNSを利用した性被害 (インターネットやSNSなどで相手から性的な写真を送るよう要求された、画像をばらまくと言われた、なりすました相手から性的行為を強要された など)	1○	2○
6	セクシュアルハラスメント (学校や職場で性的な嫌がらせをされた)	1○	2○
7	痴漢 (電車などで体を触られた、相手の体を押し付けられた など)	1○	2○

次へ

0 50 100(%)

2）本調査

図表 0-2　本調査 質問票

アンケート画面開始

Page 1

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0　50　100(%)

性暴力は日常的に起こっていて、多くの人が様々な被害にたびたびあっています。
このアンケートでは、あなたがあった被害のうち、ひとつ(あるいは継続的な被害の場合はそのひとまとまり)の被害にしぼって、回答いただきます。

■あなた自身が過去にあわれた、<○○○(SC2回答テキスト再掲)>のことについておうかがいします。
これ以降は、その被害についてお答えください。

Q1
加害者はあなたとどのような関係でしたか。
2人以上から被害にあった方については、すべての加害者についてお答えください。
(いくつでも)

1 ☐ 通っていた(いる)学校・大学の関係者(教職員、先輩、同級生、クラブ活動の指導者など)
2 ☐ 地域活動や習いごとの関係者(指導者、先輩、仲間など)
3 ☐ 職場、アルバイト先の関係者(上司、同僚、部下、取引先の相手など)
4 ☐ 職場・アルバイト先の客
5 ☐ 交際相手・元交際相手
6 ☐ 配偶者、元配偶者、パートナー、元パートナー
7 ☐ 親(育ての親、義理の親を除く)
8 ☐ 育ての親、義理の親、親の交際相手
9 ☐ 兄弟姉妹
10 ☐ 上記以外の親族　(具体的に　　)
11 ☐ 生活していた(いる)施設の関係者(職員、先輩、仲間、里親など)
12 ☐ SNSなどインターネット上で知り合った人
13 ☐ 芸能プロダクションへのスカウトや高収入バイトの勧誘などを名乗る人
14 ☐ その他　　(具体的に　　)
15 ☐ まったく知らない人

次へ

0　50　100(%)

Page 2

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q2
加害者の性別はどちらでしたか。(いくつでも)

1 ☐ 異性
2 ☐ 同性
3 ☐ わからない

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 3

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q3
加害者は自分よりも社会的な地位、職務上の地位、その他人間関係などにおいて上位な立場にある者(職場・アルバイト先の上司や先輩、取引先の相手、学校・大学の教職員や先輩、クラブ活動や習い事の指導者や先輩など関係が優位な立場にある者)でしたか。(いくつでも)

1 ☐ 上位だった
2 ☐ 同等または下位だった
3 ☐ わからない

次へ

0 50 100(%)

Page 4

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q4
被害にあったときの状況について、あてはまるものをお選びください。(いくつでも)

1 ☐ 相手から、身体的な暴力をふるわれた
2 ☐ 相手から、おどされた
3 ☐ インターネットやSNSで相手から、おどされた
(暴言、周囲に言いふらす、画像のばらまき など)
4 ☐ 相手から、「何もしない」「変なことはしない」「乱暴しない」などとだまされた
5 ☐ 相手から、不意をつかれ、突然に襲いかかられた
6 ☐ 相手が、複数人であった
7 ☐ 飲酒により意識がなかった・もうろうとしていた
8 ☐ 薬物などにより意識がなかった・もうろうとしていた(レイプドラッグ)
9 ☐ 相手との関係性(相手との関係が壊れる、仕事への影響など)から
拒否できなかった(セクシュアルハラスメント)
10 ☐ 驚きや混乱、恐怖などで体が動かなかった
11 ☐ 相手をたたく、ひっかくなどによる身体的な抵抗をした
12 ☐ 泣く、叫ぶ、相手に抗議する、説得するなどの言葉による抵抗をした
13 ☐ 相手が、親切に相談に乗ってくれるなど優しくしてくれた
14 ☐ 電車内で逃れられなかった(痴漢)
15 ☐ 「モデル・アイドルになりませんか」と声をかけられ、
その後、聞いていない・同意していない性的な行為や、
行為中の写真・動画の撮影を要求され、拒否できなかった(AV出演強要)
16 ☐ アルバイトへの応募をしたところ、約束していない性的な行為を要求され、
拒否できなかった(JKビジネス)
17 ☐ お金・お小遣いを援助してあげると言われた
(パパ活・援助交際)
18 ☐ 自分に行われていることがよくわからない状態だった
19 ☐ その他(具体的に [　　])

次へ

0 50 100(%)

Page 5

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q5
どこで、性暴力を受けましたか。(いくつでも)

1 ☐ 自宅
2 ☐ 加害者の家
3 ☐ 保育園・幼稚園
4 ☐ 学校
5 ☐ 塾
6 ☐ 施設
7 ☐ 会社
8 ☐ 公園
9 ☐ トイレ
10 ☐ 駐車場
11 ☐ カラオケルーム
12 ☐ ホテル
13 ☐ 公共交通機関
14 ☐ 加害者の車
15 ☐ インターネット上・SNSアプリ上
16 ☐ その他(具体的に [ ])
17 ☐ わからない
18 ☐ 答えたくない

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 6

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q6
その被害(被害そのもの。被害による後遺症などは含まない)はどのくらい長く続きましたか。

1 ○ 1回限り
2 ○ 1週間未満
3 ○ 1週間以上1か月未満
4 ○ 1か月以上半年未満
5 ○ 半年以上1年未満
6 ○ 1年以上3年未満
7 ○ 3年以上
8 ○ 現在も継続中
9 ○ その他(具体的に [ ])

次へ

0 50 100(%)

■被害にあったときの相談状況についておたずねします。

Q7
あなたはこれまでの被害について、だれかに打ち明けたり、相談したりしましたか。
(いくつでも)
また、そのうち最初に相談した人や機関をお選びください。(ひとつだけ)

回答方向	1 相談した人・機関	2 うち、最初に相談した人・機関
家族や親戚	1□	1○
友人・知人	2□	2○
学校関係者(教員、養護教諭、スクールカウンセラーなど)	3□	3○
職場・アルバイトの関係者(上司、同僚、部下、取引先など)	4□	4○
民間の専門家や専門機関(弁護士・弁護士会、カウンセラー・カウンセリング機関、民間シェルターなど)	5□	5○
医療関係者(医師、看護師など)	6□	6○
性犯罪・性暴力被害者支援の専門相談窓口(いわゆるワンストップ支援センター)	7□	7○
性暴力に関するSNS相談(Cure time)	8□	8○
被害者支援センター	9□	9○
配偶者暴力相談支援センター(婦人相談所など)、男女共同参画センター	10□	10○
法務局・地方法務局、人権擁護委員	11□	11○
警察	12□	12○
上記以外の公的な機関(市役所など)	13□	13○
その他 (具体的に [　　])	14□	14○
どこ(だれ)にも相談しなかった	15□	15○
	相談した人・機関	うち、最初に相談した人・機関
	1	2

次へ

改ページ

Page 8

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q8
被害にあってから、だれかに打ち明けたり、相談したりするまでの期間はだいたいどれくらいでしたか。

1 ○ その日のうち
2 ○ 翌日～3日
3 ○ 4日～1カ月未満
4 ○ 1カ月～1年未満
5 ○ 1年～5年未満
6 ○ 5年～10年未満
7 ○ 10年以上

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 9

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q9
相談した人がいる方におうかがいします。
<○○○(Q7_2回答テキスト再掲)>はその後、何をしましたか。(いくつでも)

1 □ 相手に働きかけてくれた
2 □ 避難先や居場所を提供してくれた
3 □ 一緒にいて、守ってくれた
4 □ 取るべき行動を助言してくれた
5 □ あなたを慰めたり、励ましてくれた
6 □ 話を聞いてくれた
7 □ わかってくれなかった
8 □ 的外れな助言をされた
9 □ あなたを非難した
10 □ 何もしてくれなかった
11 □ その他(具体的に [ ])

次へ

0 50 100(%)

Q10
どこ(だれ)にも相談しなかった理由を教えてください。(いくつでも)

1 ☐ どこ(だれ)に相談してよいのかわからなかったから
2 ☐ 恥ずかしくてだれにも言えなかったから
3 ☐ 相談してもむだだと思ったから
4 ☐ 相談するほどのことではないと思ったから
5 ☐ 相談相手の言動によって不快(ふかい)な思いをさせられると思ったから
6 ☐ 自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思ったから
7 ☐ 自分にも悪いところがあると思ったから
8 ☐ そのことについて思い出したくなかったから
9 ☐ 仕返しが怖かったから(もっとひどい暴力や、性的な画像のばらまき など)
10 ☐ 加害者に「誰にも言うな」とおどされたから
11 ☐ 世間体(せけんてい)が悪いと思ったから
12 ☐ 他人を巻き込みたくなかったから
13 ☐ 他人に知られると、これまで通りのつき合い
(仕事や学校などの人間関係)ができなくなると思ったから
14 ☐ 相手の行為は愛情表現だと思ったから
15 ☐ 相手の行為が理解できず被害を受けたと思わなかったから
16 ☐ 誰にも知られたくなかったから、心配させたくなかったから
17 ☐ 被害かどうかわからなかったから
18 ☐ 低年齢であったため、相談するということが思い浮かばなかったから
19 ☐ その他 (具体的に [　　])

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 11

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

■被害を受けた直後から現在までの、生活の変化についておたずねします。

Q11
被害にあうと、生活上の変化が起こることがよくあります。
あなたは、これまでの被害によって、生活が変わりましたか。(いくつでも)

1 ☐ 夜、眠れなくなった
2 ☐ 心身に不調をきたした (具体的に [　　])
3 ☐ 医療機関を受診し、精神疾患と診断された
4 ☐ 自分に自信がなくなった
5 ☐ 誰のことも信じられなくなった
6 ☐ 外出するのが怖くなった
7 ☐ 異性と会うのが怖くなった
8 ☐ 人づきあいがうまくいかなくなった
9 ☐ 転居(引越し)、別居した
10 ☐ 携帯電話の電話番号やメールアドレス、SNSのアカウントを削除した・変えた
11 ☐ 仕事(アルバイト)をしばらく休んだ・やめた・変えた
12 ☐ 学校・大学をしばらく休んだ・やめた・変えた
13 ☐ 生きているのが嫌になった・死にたくなった
14 ☐ 加害者や被害時の状況を思い出させるようなことがきっかけで、被害を受けたときの感覚がよみがえる
15 ☐ 生活全般にわたって活動的でなくなった、趣味、学業や仕事への関心が低くなった
16 ☐ 神経過敏になり、少しの刺激に過敏に反応してしまったり、イライラ・そわそわしやすくなった
17 ☐ 飲酒量・薬物量が増えた
18 ☐ 性行動が活発になった
19 ☐ その他 (具体的に [　　])
20 ☐ 特にない

次へ

0 50 100(%)

Q12
あなたは現在、性暴力による被害から、ご自分がどのくらい回復したと感じていますか。
1を「全く回復していない」、10は「もとどおり回復した」として、もっともあてはまるものを選んでください。

1 全く回復していない	2	3	4	5 半分くらい回復した	6	7	8	9	10 もとどおり回復した	回復しているかしていないかわからない
1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	8 ○	9 ○	10 ○	11 ○

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 13

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

■被害後に必要な支援などについておうかがいします。

Q13
被害を受けた直後/または現在、あなたはどのような手助け・支援を必要としましたか/していますか。
「被害を受けた直後」と「現在」それぞれについて特に重要だと思うものをお答えください。
(それぞれ5つまで)

回答方向	1 被害を受けた直後	2 現在
事件・被害に関する話を聞いてもらう	1 ☐	1 ☐
安全な避難場所の提供	2 ☐	2 ☐
証拠採取、緊急避妊薬の処方や性感染症検査など医療的支援や医療機関への同行	3 ☐	3 ☐
被害届の提出方法などを教えてもらう	4 ☐	4 ☐
警察・検察とのやり取りの手助け、付き添い	5 ☐	5 ☐
弁護士の紹介や裁判所へ行く際の付き添い	6 ☐	6 ☐
支援団体、自助グループなどの紹介	7 ☐	7 ☐
役所などでの手続の手助け、付き添い	8 ☐	8 ☐
生活全般の手伝い(食事・買物など身の回りのことを含む)や経済的な支援	9 ☐	9 ☐
画像や動画の削除方法などを教えてもらう	10 ☐	10 ☐
精神的な支え	11 ☐	11 ☐
プライバシーなどへの配慮	12 ☐	12 ☐
そっとしておいてもらうこと	13 ☐	13 ☐
その他	14 ☐ (具体的に)	14 ☐ (具体的に)
特になし	15 ☐	15 ☐
どのような支援・配慮が必要かわからない	16 ☐	16 ☐
	被害を受けた直後	現在
	1	2

Q14
性暴力のない社会になるためには、どんなことが必要だと思いますか。(いくつでも)

1 ☐ 性犯罪・性暴力に関する刑法を改正して、
加害者を罪に問えるようにしたり、罪を重くする
2 ☐ パトロールを行うなどの防犯体制の強化
3 ☐ 警察の取り締まりの強化
4 ☐ 加害者の行動を追跡できるようにGPSをつけるなど、
再犯防止対策を強化すること
5 ☐ 社会全体に性犯罪・性暴力について広く知ってもらうこと
6 ☐ 性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための教育・人権教育の推進
7 ☐ 加害者に再犯防止プログラムを受けさせること
8 ☐ その他(具体的に [ ])

次へ

0 50 100(%)

改ページ

Page 15

※回答中にブラウザの「戻る」を使用しないでください。(それまでの回答が無効になりますのでご注意ください)

0 50 100(%)

Q15
政府では、被害を受けた方が相談しやすくなるために、以下のような取組を進めていますが、
さらに取組を強化したほうがよいと思うものはありますか。(いくつでも)

1 ☐ 相談窓口を周知すること
2 ☐ 24時間・365日相談できるようにすること
3 ☐ 性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターの数を増やすこと
4 ☐ 電話以外にもSNSで相談できるなど多様な相談方法があること
5 ☐ 性犯罪・性暴力の支援を出来る支援員を増やすこと
6 ☐ 相談者が希望する性別の相談員に相談できること
7 ☐ カウンセラーや性暴力に関わる医療従事者の数を増やすこと
8 ☐ 相談先で被害者を責めたりしないよう徹底すること
9 ☐ 支援が無料で受けられるようにすること
10 ☐ 児童・生徒に関わる教育関係者の性暴力防止に関する研修を充実すること
11 ☐ 学校や職場などで相談を受ける体制を強化すること
12 ☐ 早期から性の安全に関する教育
(性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないための教育)を行うこと
13 ☐ その他(具体的に [ ])
14 ☐ 特にない

次へ

Q16
アンケートで答えきれなかった被害のこと、今後の取組で期待することなどあれば自由にお書き下さい。

最後までご回答いただき、誠にありがとうございました。
皆さまからいただいた大切な回答内容・ご意見は、個人が特定されないようにアンケート結果としてまとめ、政府による性暴力被害を受けた若い世代のための施策の検討などに活用いたします。
このアンケートが上記目的以外に使われることは一切ありません。

なお、回答後に気分が不安定になったり、誰かに相談したい気持ちになった場合は、最寄りの性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターにつながる全国共通短縮番号「#8891(はやくワンストップ)」、性暴力に関するSNS相談「Cure time(キュアタイム)」までご連絡ください。
●#8891(はやくワンストップ)
https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/seibouryoku/consult.html
●Cure time(キュアタイム)
https://curetime.jp/

また、配偶者などから性暴力を受けている場合については、DV相談窓口にご相談下さい。
●#8008(はれれば)
https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/dv_navi/index.html#dv_navi

【プライバシーについて】
・回答の内容の多くの項目は、統計的にまとめられます。
・自由に記述いただく項目についても、個人が特定されかねない情報が含まれていた場合、すべて削除した上で取り扱います。
・プライバシーについて心配なことがある方は、下記にご連絡ください。

【アンケート実施・お問い合わせ先】(受付時間 平日 9:30～18:00)
株式会社リベルタス・コンサルティング 担当:富永(とみなが)
TEL:070-3243-7593(直通)

送信

0 50 100(%)